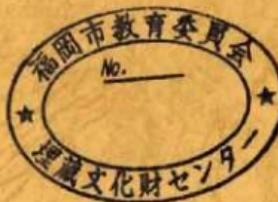


福岡市
鴻臚館跡 I
発掘調査概報

福岡市埋蔵文化財調査報告書第270集

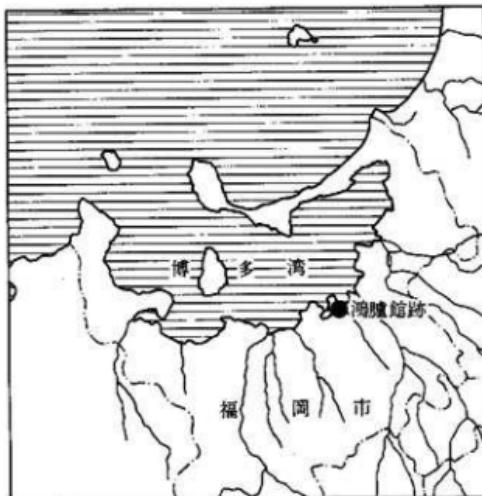


1991

福岡市教育委員会

福岡市
鴻臚館跡 I
発掘調査概報

福岡市埋蔵文化財調査報告書第270集



遺跡略号 KRE-3~6
遺跡調査番号 8747, 8829, 8910, 9005

1991

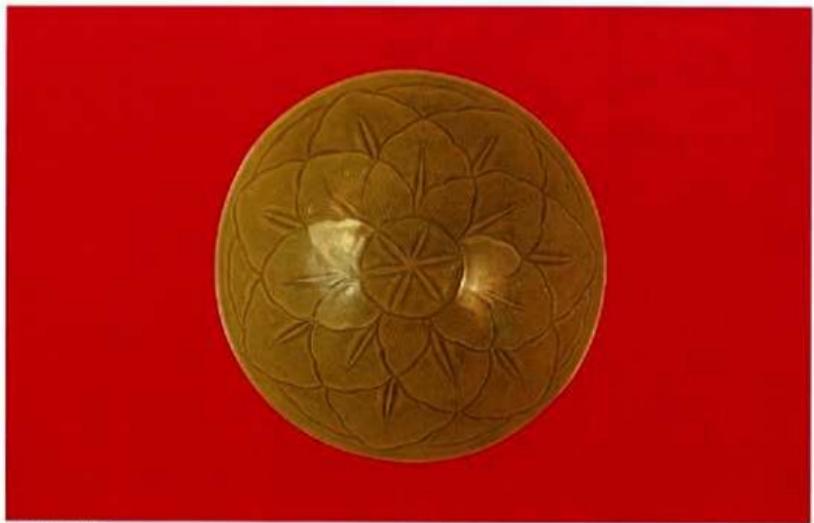
福岡市教育委員会



イスラム陶器



唐三彩陶枕



越窑青瓷器

序

古代、アジアに開かれていた外交施設「鴻臚館」が再発見されたのは、昭和62年12月24日のことです。野球ファンに親しまれている平和台野球場外野スタンドの改修工事に伴う試掘調査によるものがありました。

西アジア産の瑠璃色をしたガラス容器や青く輝くイスラム陶器、中国の世界的名器の青磁器、朝鮮半島の新羅陶器などは、当時のアジア外交を偲ばせるものであります。また、華麗な文様の軒瓦は、古代の迎賓館「鴻臚館」の姿を浮かびあがらせるものであります。

この「鴻臚館」再発見のニュースは、マスコミに大きく報道され、鴻臚館ブームをよびおこしました。時あたかも、福岡市は市制百周年を迎えて「海に開かれた活力あるアジアの拠点都市」をめざし、「アジア太平洋博覧会」の準備期間中であります。まさに、その歴史的原点が発見されたのであります。福岡市は文化を活かした街づくりをめざし、昭和63年5月より「鴻臚館」跡を含む福岡城跡全体をセントラルパークと位置づけ、「舞鶴城址将来構想委員会」を設置しました。また、鴻臚館の全容解明のため専門の先生方からなる「鴻臚館跡調査研究指導委員会」を設置しました。その御指導のもとに発掘調査や関連資料の収集に鋭意努めているところであります。

現在、平和台野球場南のテニスコートで調査を行っております。本格調査では、現在までに大型礎石建物や莫大な量の中国窯陶磁器、木簡、古代瓦などが発見され、全容解明に大きく前進した成果を得ております。

本報告書は、今年次までの調査概要をまとめたものです。今後は、整理を終えたものから順次正式報告書を作製してまいりたいと思います。

なお、鴻臚館跡の整備につきましては、市民の皆様の御要望も強く、発掘調査と平行させながら、整備資料の収集にも努めているところであります。

鴻臚館跡から出土しました主な遺物は、開館の運びとなりました「福岡市博物館」に、大型礎石建物等の遺構の一部は、現地に覆屋を建て公開展示しております。あわせて御高覽頂きますよう御願い申し上げます。

本報告書が埋蔵文化財への御理解と御認識の一助となり、研究資料としても御利用頂ければ幸いであります。

最後になりましたが、発掘調査から報告書作成に至るまで、御理解、御協力頂いた大蔵省福岡財務支局や福岡市都市整備局、鴻臚館跡調査研究指導委員会、文化庁、福岡県教育庁の皆さまに、深甚なる謝意を表します。

平成3年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 井口 雄哉

例　　言

1. 本書は福岡市中央区域内に所在する鴻臚館跡の昭和62年度調査（第3次調査）から平成2年度調査（第6次調査）にかけての調査概報である。
2. 本書で用いる方位は国土地理院座標第2系による座標北で、磁北はこれより $6^{\circ}2'$ 西偏する。
3. 遺構の呼称は記号化し、建物→S B. 土坑→S K. 溝→S D. 墓→S G. その他→S Xとし、遺構番号は遺跡とうして番号をふっているので、遺構間における番号の重複はない。
4. 本書に使用した実測図の作成は、山崎純男、吉武一学、高田一弘、川端正夫、白木英敏、田中克子による。
5. 製図は山崎、吉武、田中、川端、白木による。
6. 本書で用いた写真は山崎、吉武による。
7. 本書の執筆は吉武との協議のもとに山崎がこれにあたった。
8. 本書の編集は山崎が行なった。

本文目次

第1章 序	1
1. はじめに	1
2. 発掘調査の組織と構成	2
第2章 遺跡の立地と歴史的環境	5
1. 遺跡の立地	5
2. 歴史的環境	7
第3章 調査の概要	9
1. 鴻臚館所在地の比定	9
2. 第1次調査の概要	10
3. 第2次調査の概要	12
4. 第3次調査の概要	14
(1) 調査の概要	14
(2) 遺構と遺物の概要	16
① SK-01	16
a. 遺構	16
b. 出土遺物	17
② SK-02	21
a. 遺構	21
b. 出土遺物	24
③ SK-03	25
a. 遺構	25
b. 出土遺物	25
④ SK-04	27
a. 遺構	27
b. 出土遺物	27
⑤ SK-05	27
a. 遺構	27
b. 出土遺物	27
⑥ SK-05'	29
a. 遺構	29

b. 出土遺物	29
⑦ S B -11	31
a. 造構	31
b. 出土遺物	32
⑧ S B -12	32
⑨ S B -13	33
⑩ S D -06	34
a. 造構	34
b. 出土遺物	34
⑪ S D -07	38
a. 造構	38
b. 出土遺物	38
⑫ S D -08	40
a. 造構	40
b. 出土遺物	41
5. 第4次調査の概要	42
(1) 調査の概要	42
(2) 造構と遺物の概要	44
① S B -31	44
a. 造構	44
b. 出土遺物	46
② S B -32	47
a. 造構	47
b. 出土遺物	49
③ S K -24	51
a. 造構	51
b. 出土遺物	51
④ S K -27	51
⑤ S K -28	51
a. 造構	51
b. 出土遺物	54
⑥ S K -29	55

a. 遺構	55
b. 出土遺物	57
⑦ S K - 33	57
a. 遺構	57
b. 出土遺物	58
⑧ S K - 38	59
a. 遺構	59
b. 出土遺物	59
⑨ S D - 30	62
a. 遺構	62
b. 出土遺物	62
⑩ 第2調査区の概要	65
⑪ 第3調査区の概要	66
6. 第5次調査の概要	67
(1) 調査の概要	67
(2) 遺構と遺物の概要	69
① S B - 31	69
② S B - 32	69
③ S B - 50	72
a. 遺構	72
b. 出土遺物	72
④ S K - 53	75
a. 遺構	75
b. 出土遺物	76
⑤ S K - 54	77
a. 遺構	77
b. 出土遺物	77
⑥ S K - 56	78
a. 遺構	78
b. 出土遺物	80
⑦ S K - 61	86
a. 遺構	86

b. 出土遺物	86
⑧ S K - 62	91
a. 遺構	91
b. 出上遺物	93
⑨ S G - 51	95
a. 遺構	95
b. 出土遺物	96
⑩ 推定南門調査区	96
a. 遺構	96
b. 出土遺物	98
7. 第6次調査の概要	100
(1) 調査の概要	101
(2) 遺構と遺物の概要	103
① S K - 57	103
a. 遺構	103
b. 出土遺物	103
② S K - 69	109
a. 遺構	109
b. 出土遺物	109
③ S K - 70	112
a. 遺構	112
b. 出土遺物	114
④ S K - 59	115
⑤ S K - 60	116
⑥ S K - 75	116
a. 遺構	116
b. 出土遺物	116
⑦ S K - 80	120
a. 遺構	120
b. 出土遺物	120
⑧ S K - 82	123
a. 遺構	123

b. 出土遺物	125
⑨ SK - 100	129
a. 遺構	129
b. 出土遺物	130
⑩ SK - 105	133
a. 遺構	133
b. 出土遺物	133
⑪ SB - 150	134
第4章 調査の若干のまとめ	135
1. 遺跡の時期	135
2. 築紫館・鴻臚館の時期区分	135
3. 出土遺物について	136
4. 瓦類について	142

挿 図 目 次

Fig. 1 遺跡の位置と周辺遺跡	6
Fig. 2 遺跡と調査区	8
Fig. 3 第1次調査風景	10
Fig. 4 第2次調査・調査区の設定	11
Fig. 5 第3~6次調査区の関連	13
Fig. 6 第3次調査区全体図	15
Fig. 7 SK - 01実測図	17
Fig. 8 SK - 01出土遺物実測図（1）	19
Fig. 9 SK - 01出土遺物実測図（2）	20
Fig. 10 SK - 02実測図	22
Fig. 11 SK - 02出土遺物実測図	23
Fig. 12 SK - 03~05'実測図	26
Fig. 13 SK - 03~05'出土遺物実測図	28

Fig.14	S B - 11実測図	30
Fig.15	S B - 11出土遺物実測図	31
Fig.16	S B - 15, 16実測図	33
Fig.17	S D - 06実測図	35
Fig.18	S D - 06出土遺物実測図	36
Fig.19	S D - 07実測図	38
Fig.20	S D - 08実測図	39
Fig.21	S D - 07・08出土遺物実測図	40
Fig.22	第4次調査区全体図	43
Fig.23	S B - 31実測図	45
Fig.24	S B - 31出土遺物実測図	46
Fig.25	S B - 32実測図	48
Fig.26	S B - 32出土遺物実測図	49
Fig.27	S K - 24実測図	50
Fig.28	S K - 24出土遺物実測図	51
Fig.29	S K - 27実測図	52
Fig.30	S K - 28実測図	53
Fig.31	S K - 28出土遺物実測図	54
Fig.32	S K - 29実測図	56
Fig.33	S K - 29出土遺物実測図	57
Fig.34	S K - 33出土遺物実測図	58
Fig.35	S K - 38実測図	60
Fig.36	S K - 38出土遺物実測図	61
Fig.37	S D - 30出土遺物実測図（1）	63
Fig.38	S D - 30出土遺物実測図（2）	64
Fig.39	第4次、第2調査区実測図	65
Fig.40	第4次、第3調査区実測図	66
Fig.41	第5次調査区全体図	68
Fig.42	S B - 31実測図	70
Fig.43	S B - 32, S B - 50実測図	71
Fig.44	S B - 50出土遺物実測図	72
Fig.45	S K - 53実測図	73

Fig.46	S K -53出土遺物実測図（1）	74
Fig.47	S K -53出土遺物実測図（2）	75
Fig.48	S K -54実測図	76
Fig.49	S K -54出土遺物実測図	77
Fig.50	S K -56実測図	79
Fig.51	S K -56出土遺物実測図（1）	81
Fig.52	S K -56出土遺物実測図（2）	82
Fig.53	S K -56出土遺物実測図（3）	85
Fig.54	S K -61実測図	87
Fig.55	S K -61出土遺物実測図（1）	88
Fig.56	S K -61出土遺物実測図（2）	89
Fig.57	S K -62実測図	91
Fig.58	S K -62出土遺物実測図	92
Fig.59	S G -51実測図	94
Fig.60	S G -51出土遺物実測図	95
Fig.61	推定南門調査区実測図	97
Fig.62	推定南門調査区出土遺物実測図	99
Fig.63	第6次調査区全体図	101
Fig.64	S K -57実測図	104
Fig.65	S K -57出土遺物実測図（1）	106
Fig.66	S K -57出土遺物実測図（2）	107
Fig.67	S K -57出土遺物実測図（3）	108
Fig.68	S K -69, 70実測図	110
Fig.69	S K -69出土遺物実測図	111
Fig.70	S K -70出土遺物実測図	113
Fig.71	S K -59実測図	114
Fig.72	S K -60実測図	115
Fig.73	S K -75実測図	117
Fig.74	S K -75出土遺物実測図	118
Fig.75	S K -80実測図	121
Fig.76	S K -80出土遺物実測図	122
Fig.77	S K -82実測図	124

Fig.78	S K - 82出土遺物実測図（1）	126
Fig.79	S K - 82出土遺物実測図（2）	127
Fig.80	S K - 100実測図	130
Fig.81	S K - 100出土遺物実測図	131
Fig.82	S K - 105出土遺物実測図	132
Fig.83	S B - 150実測図	134
Fig.84	礎石建物（S B - 31. 50）・推定南門配置図	137
Fig.85	軒瓦集成（1）	139
Fig.86	軒瓦集成（2）	140
Fig.87	軒瓦集成（3）	141

図 版 目 次

- P L. 1 (1) 第3次調査区全景（平和台野球場外野スタンド）
 (2) 平和台野球場とテニスコート（第4～6次調査区）
- P L. 2 (1) 第3次調査・ライト側スタンド調査区全景
 (2) 第3次調査・レフト側スタンド調査区全景
- P L. 3 (1) 第3次調査・S B - 11検出状況（西から）
 (2) 第3次調査・S B - 11検出状況（南から）
- P L. 4 (1) 第3次調査・S B - 11瓦堆積除去状況
 (2) 第3次調査・S D - 08瓦堆積状況
- P L. 5 (1) 第3次調査・S D - 06瓦堆積状況
 (2) 第3次調査・S D - 06および江戸時代暗渠
- P L. 6 (1) 第3次調査・S B - 15. 16検出状況
 (2) 第3次調査・S B - 15布振りの状況
- P L. 7 (1) 第3次調査・S B - 15. 16断面
 (2) 第3次調査・地下事業の状態
- P L. 8 (1) 第3次調査・S K - 01完掘状況
 (2) 第3次調査・S K - 01土層断面
- P L. 9 (1) 第3次調査・S K - 02遺物出土状況（南から）

- (2) 第3次調査・SK-02遺物出土状況（西から）
- P L . 10 (1) 第3次調査・SK-02ガラス出土状況
(2) 第3次調査・SK-03遺物出土状況
- P L . 11 (1) 第3次調査・礎石検出状況（原位置を移動）
(2) 第3次調査・SD-06石硯出土状況
- P L . 12 (1) 第4次調査・調査区全景（北から）
(2) 第4次調査・調査区全景（西から）
- P L . 13 (1) 第4次調査・推定南門前面トレンチ全景（南から）
(2) 第4次調査・推定南門前面トレンチ全景（西から）
- P L . 14 (1) 第4次調査・推定南門後面トレンチ全景（北から）
(2) 第4次調査・推定南門後面トレンチ全景（東から）
- P L . 15 (1) 第4次調査・第Ⅱ調査区全景（北から）
(2) 第6次調査・第24連隊弾薬庫検出状況（西から）
- P L . 16 (1) 第4次調査・第Ⅲ調査区全景（西から）
(2) 第4次調査・第Ⅲ調査区土層断面
- P L . 17 (1) 第4次調査・SK-38遺物出土状況
(2) 第5次調査・SK-81遺物出土状況
- P L . 18 (1) 第5次調査・調査区全景（南から）
(2) 第5次調査・調査区全景（東から）
- P L . 19 (1) 第5次調査・調査区全景（南から）
(2) 第5次調査・調査区全景
- P L . 20 (1) 第6次調査・SK-69
(2) 第6次調査・SK-69漆器出土状況
- P L . 21 (1) 第6次調査・SK-70
(2) 第6次調査・SK-57
- P L . 22 (1) 第5次調査・SK-56全景と土層断面
(2) 第5次調査・SK-61遺物出土状況
- P L . 23 (1) 第6次調査・SK-80遺物出土状況
(2) 第6次調査・SK-82遺物出土状況と土層断面
- P L . 24 (1) 第6次調査・SK-82遺物出土状況（南から）
(2) 第6次調査・SK-82遺物出土状況（東から）
- P L . 25 (1) 第6次調査・SB-50礎石列と瓦窓

- (2) 第6次調査・SK-105遺物出土状況
- P L. 26 (1) 第6次調査・唐三彩陶枕出土状況
(2) 第6次調査・SK-155イスラム陶器出土状況
- P L. 27 (1) 第6次調査・SK-159・160遺物出土状況
(2) 第6次調査・SK-160イスラム陶器出土状況
- P L. 28 (1) SK-57出土木簡
- P L. 29 (1) SK-57出土木簡・SK-69出土漆容器
- P L. 30 (1) SK-57出土須恵器
(2) SK-57出土須恵器の墨書き

第1章 序 説

1. はじめに

1988年12月、都市整備局によって平和台野球場外野スタンドの改修工事が開始された。この工事は古代の迎賓館である筑紫館・鴻臚館跡と推定されていたこの地が史跡福岡城跡内にも関わらず、無届けで行われたものであった。これを知った教育委員会埋蔵文化財課では急遽工事の中止を申し入れ、関連部局及び文化庁記念物課との協議を経て、試掘調査を12月24日より実施した。

試掘調査開始時は、すでに一部のスタンドが除去されたり、また、さらに盛土部分が除去され、地山面が露出している部分もあった。盛土中には古代～近世の遺物が多く含まれていたが、表面的には遺跡の残存の有無は判断しかねた。試掘は重機によって盛土部分を除去することから開始したが、開始直後から古代の柱穴・土坑の輪郭があらわれ、我々が予想した以上に遺跡の残存状態が良好であることが判明した。また、古代の遺構と同一面、あるいは重複して江戸時代の遺構も残っていた。この試掘結果をもとに、福岡市・福岡市教育委員会は文化庁と協議を重ね、無届け工事を陳謝するとともに今後の対応策を検討した。その結果は、年度末も迫り工事の完了は市民の待望するプロ野球オープン戦に間にあわせることとするが、遺跡については、全体的にその状況を把握し破壊することなく保存処置を講じ、工事は設計変更をしても遺跡部分にかかることのないようにするというものであった。それを受けた教育委員会では引き続き内容把握のための調査を進めた。この間、マスコミ各社の報道はすさまじく鴻臚館の重要性をありますことなく紹介し、また検出遺構や出土遺物を発表した。調査は1月20日に終了した。市教育委員会は、調査結果を文化庁に報告すると共に、市幹部にも鴻臚館の重要性を説明した。

おりしも、福岡市は、市制百周年を一年後に控え、海に開かれた活力あるアジアの拠点都市をめざして新たな発展をとげようとし、アジア太平洋博覧会「よかトビア」の開催準備中であり、古代の迎賓館・筑紫館・鴻臚館の再発見は、まさに飛躍する福岡市の歴史的原点であった。これを受けた市は、筑紫館・鴻臚館跡の全容解明をめざし、教育委員会に県内外の一級の専門家からなる鴻臚館跡調査研究指導委員会を設置し、担当職員2名を配置し、本格調査の充実をはかると共に、都市整備局に舞鶴公園基本構想委員会を設置し福岡城・鴻臚館を福岡市のセントラル・パークとして位置づけ都市計画を進めていくこととなった。

翌1989年度の本格調査では、平和台野球場南側において南北に並列した大規模な瓦葺き礎石建物二棟を検出し、それに覆屋をかけて鴻臚館展示館として開館し、「よかトビア」のミニ・パビリオンとして市民や県外からの来客者に親しんでいただいた。ちなみに、米館者は「よか

第1章 序 説

トピア」期間中10万人に達した。

1990年度はさらに調査体制を充実させ、副主幹1名を増員し、課相当の組織として調査体制の充実をはかっている。

1990・1991年度はテニスコート部分の本格調査を進め、新たに礎石建物や筑紫館にあたると考えられる大規模な樹列を検出している。

2. 発掘調査の組織と構成

第3次調査（試掘調査）

野球場外野席スタンドの改修工事に伴う緊急の試掘調査であったが、遺跡発見後、教育委員会では遺跡の重要性を考え、以下の体制で調査を進めた。なお、調査中には諸先生方には現地に来ていただき多くの指導を受けることができた。

調査期間 1987年12月24日～1988年1月20日

調査主体 福岡市教育委員会

教育長 佐藤善郎、教育次長 尾花 剛、文化部長 川崎賢治、埋蔵文化財課
長 柳田純孝、第一係長 折尾 学、第二係長 飛高憲雄

調査庶務 埋蔵文化財課第一係 岸田 隆、松延好文

調査担当 山崎純男（埋蔵文化財課文化財主事、事前審査担当）

吉武学（埋蔵文化財課第一係）

池崎謙二（博物館準備室）

調査協力 永井昌文（九州大学教授）

横山浩一（九州大学教授）

西谷 正（九州大学教授）

八木 尤（山口大学教授）

山村國澄（九州歴史資料館館長）

川添昭二（九州大学教授）

渡辺正気（福岡県文化財保護審議会、専門委員）

平野邦雄（東京女子大学教授）

石松好雄、高倉洋彰、横田賢二郎、森田 勉（九州歴史資料館）

後藤 直、柳沢一男、濱石哲也、田中壽夫（福岡市埋蔵文化財センター）

二宮忠司、横山邦繼、山口謙治、井澤洋一、山崎龍雄、松村道博、杉山富雄、

2 発掘調査の組織と構成

小林義彦、下村 智、大庭康時、小畠弘己、米倉秀紀、常松幹雄、佐藤一郎、
瀬本正志、荒牧宏行、古留秀敏、加藤良彦（福岡市埋蔵文化財課）

第4次調査

昨年度の調査結果を受けて、新たに埋蔵文化財課に調査担当主査および担当を設け、調査体制の充実を計り、また、鴻臚館跡の調査計画、実施、保存、整備および関連する諸件における指導を受けるべく、鴻臚館跡調査研究指導委員会を設置した。

鴻臚館跡調査研究指導委員会（任期2年）

委員長	平野邦雄（東京女子大学教授 古代史）
副委員長	横山浩一（九州大学名誉教授 考古学）
委員	田村圓澄（九州歴史資料館館長 古代史） 川添昭二（九州大学教授 中世史） 八木 充（山口大学教授 古代史） 笛山晴生（東京大学教授 古代史） 坪井清足（大阪文化財センター理事長 考古学） 渡辺正氣（福岡県文化財保護審議会専門部会委員 考古学） 小田富士雄（福岡大学教授 考古学） 西谷 正（九州大学教授 考古学） 鈴木嘉吉（奈良国立文化財研究所所長 建築史） 沢村 仁（九州芸術工科大学教授 建築史） 中村 一（京都大学教授 造園学） 杉本正美（九州芸術工科大学教授 造園学） 渡辺定夫（東京大学教授 都市工学）
調査期日	1988年7月27日～1988年12月10日
調査主体	福岡市教育委員会 教育長 佐藤善郎、教育次長 尾花 啓、文化部長 川崎賢治、埋蔵文化財課長 柳田純孝、第一係長 折尾 学、第二係長 飛高憲雄
庶務担当	埋蔵文化財第一係 岸田 隆、松延好文
調査担当	鴻臚館跡調査担当主査 山崎純男、吉武 学
調査補助員	高田一弘

2 発掘調査の組織と構成

第5、6次調査

さらに組織を充実させ、鴻臚館跡調査担当副主幹を新設し、課相当の組織となる

鴻臚館跡調査研究指導委員会 前掲

調査期日 第5次 1989年4月1日～1989年12月16日

第6次 1990年4月1日～1990年12月24日

調査主体 福岡市教育委員会

教育長 佐藤善郎(1989年度)、井口雄哉、教育次長 尾花 開(1989年度)

河野清一 文化部長 川崎賢治

調査担当 副主幹 折尾 學、主査 山崎純男、吉武 學

調査補助員 高田一弘、田中克子、川端正夫、白木英敏

第2章 遺跡の立地と歴史的環境

1. 遺跡の立地

筑紫館・鴻臚館は福岡市中央区の福岡城内に比定されている。この地は博多湾をめぐる海岸線の中央部にあたり、博多湾に向かって突出した丘陵（福崎丘陵）の先端部に位置している。周辺は福岡城築城によって大きく改変され、また最近の開発によって大きく地形が変わり旧態をとどめていない。筑紫館・鴻臚館の時代の旧地形を知るには困難を伴うが、幸いにも貝原益軒「筑前国統風土記」や発掘調査と平行して実施したボーリング調査によって築城前の旧地形をある程度知ることができる。

貝原益軒の「筑前国統風土記」には「城の西の方、むかしは福崎の汀まで入海有りて、広き潮人の斥地なりしを、此城に築る時、是を埋て平地とせは、人力多く費いなん」「城の北の方町ある所、又乾の方荒戸、諸士の屋敷など、むかしは入海の潟也。中にも荒戸山の下は、大船多く泊りける程の深き海なりしが、此城築き玉ひし初、多くの人力を用ひて、やうやく海を埋め、終に平地として、士民の居宅となれり。」「城の南方は、赤坂山より本丸の山につつきて、要害のためあしかりしかは、山をほり切て墻とし、墻の南の山をならして平にす」「城内のいぬるに、小高き山あり。是又本丸より高かりしかは、山をならしてひき、岡とし、如水公の鬼妻の宅地とせらる」との記事がある。これらの記事とボーリング調査の成果から城周辺の旧地形を復原すると以下の如くなろう。

城の西側の現大濠公園は大きな入江がはいり込み、潮が入り込んでいたことがわかる。城の前面（北側）は狭い砂丘が存在するものの海岸線が間近にせまり、後面（南側）は赤坂山に連なる丘陵である。丘陵は城内にものびてきている。先の記録や天守台から発見された箱式石棺の存在からみて、南からのびる丘陵が天守台から北西方向の黒田如水屋敷跡（御鷹屋敷）にむかって尾根がのび、天守台、御鷹屋敷にそれぞれ頂部があったことが推測される。なお、ボーリング調査の結果では、天守台と御鷹屋敷の間に大きな谷が存在することが予測される。また、城の東端にある福岡高等裁判所と平和台野球場の間に大きな谷が存在することが、第2次調査で明らかになっている。第3次調査やボーリング調査でも谷状の地形が各所に認められるので、南からのびる丘陵がさらに枝状にわかれ支脈を形成していたことが予想できる。これらの谷は、筑紫館・鴻臚館の時代に大規模な造成工事が行われ埋められている。このことは、古墳が破壊され、その遺物（銅鏡、銅鑓、玉）が出土することからも傍証できる。福岡城の築城に際しては南側の堀切りや堀の掘削は別にして、基本的には鴻臚館の造成を踏襲し、削平された所は少なく、大部分が盛土によっていることが予測される。



Fig 1. 遺跡の位置と周辺道路 1. 鴻臚館跡 2. 博多遺跡群

2. 歴史的環境

筑紫館・鴻臚館をめぐる歴史的環境は、過去20数年の飛躍的な発掘調査の進展で、かなりの部分が明らかになりつつある。特に九州の古代史の中心である大宰府についてはめざましい成果があがっている。当然のこととして、筑紫館・鴻臚館は大宰府の出先機関であり、大宰府を抜きにして語れるものではないが、ここでは舞台を福岡市に限定して、その成果を概観してみよう。

J.R.博多駅の南側に位置する北恵遺跡群は弥生時代の遺跡として有名である。ここで那の津官家に關係するとみられる遺構が第7・8・13次調査で検出されている。第8次調査では布掘りの掘立柱建物（倉庫）群とそれに伴う横列、第7・13次調査では布掘り掘立柱の大型建物が方形に配置された遺構がある。時期的には6世紀後半～7世紀前半である。全容が明らかでないが注目される。J.R.博多駅の北側に位置する博多遺跡群は、弥生時代から始まり近世まで存続する複合遺跡である。ここでは地下鉄工事やビル建設に伴って緊急調査が進められている。古代關係の遺構としては方一町をめぐると推測される溝があり、周辺からは多量の越州窯系青磁器等や銘帯、石帯、皇朝十二錢、「長官」と墨書ある須恵器などが出土している。この地域は和名抄にいう中島郷にあたり、「類聚三代格」の「鴻臚中島館」に比定することができる。

この他、東区多々良込田遺跡では二群に分かれた掘立柱建物が検出され、多量の越州窯系青磁器、白磁器、二彩、石帯、墨書き土器、硯などが出土し、官衙的色彩の強い遺跡とみることができる。また、南区の柏原M遺跡でも、二群に分かれた掘立柱建物群が調査され、晚唐三彩をはじめ多量の越州窯青磁器、長沙窯青磁器、白磁器、石帯、墨書き土器、硯などが出土している。多量の墨書き土器の中には、「輝長」の墨書きのあるものがあり、早良郡樋井郷の郷長の居館と考えられる。鴻臚館にもたらされた貿易陶磁器の需要層を知る上で注目される。同様の遺跡は西区十郎川遺跡もある。遺構は明らかでないが、二彩をはじめ多量の越州窯系青磁器や白磁が出土している。大宰府鴻臚館の食料を調達したと考えられる遺跡に、鴻臚館から博多湾をへだてた海の中道に所在する海の中道遺跡がある。玄界灘側に面した砂丘上に立地する大規模な遺跡である。4次にわたる調査では、多量の製塩土器、漁撈具、魚骨等の自然遺物をはじめ越州窯系青磁器、綠釉陶器、銘帯、石帯、皇朝十二錢、鏡、金銅製飾金具が出土している。筑紫館で遣新羅使が歌った万葉集の歌は漁撈活動の様を勢勢とさせる。大宰府厨戸の中心的遺跡とみられ、この遺跡の分析が進めば興味ある成果が期待できよう。

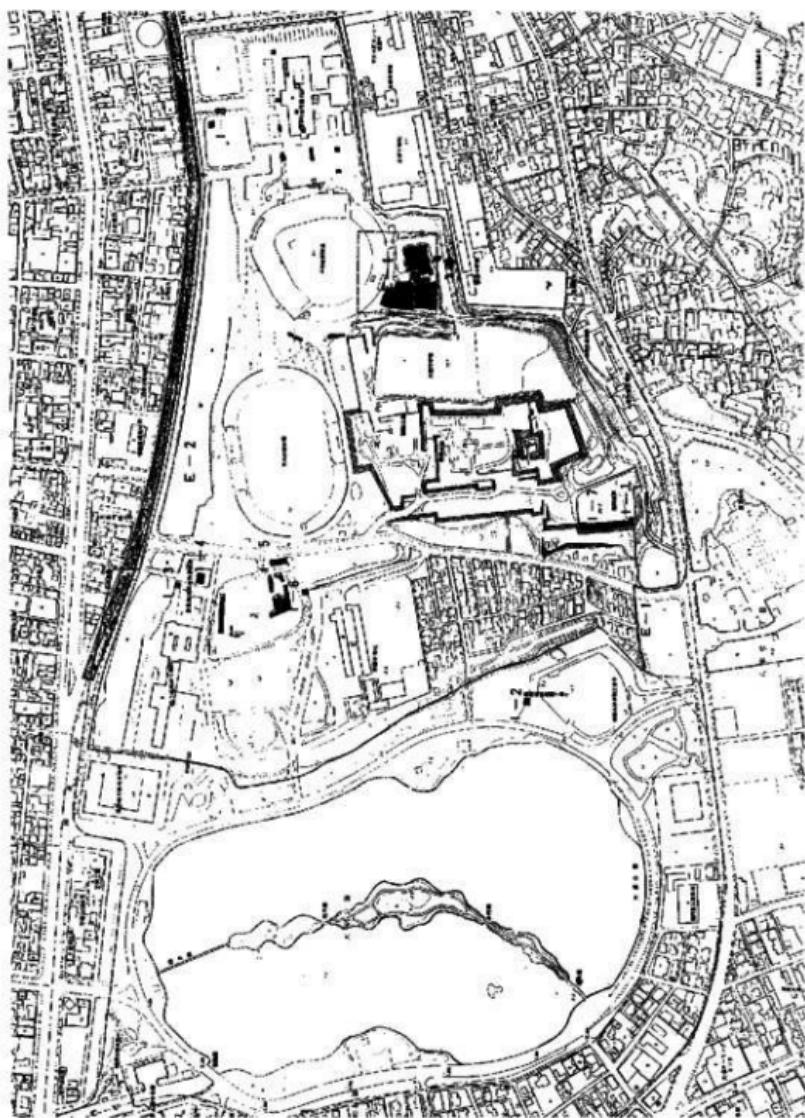


Fig. 2 遺跡と調査区

第3章 調査の概要

1. 鴻臚館所在地の比定

鴻臚館跡の所在地については江戸時代から注意が払われていた。『柳園古器略考』をあらわした青柳種信は「鴻臚館のありし所は今の管内と云所なり」としている。青柳種信の子、長野種正は『博多鴻臚館考』をあらわし、「此館址博多の内何處にありしと云うは詳ならざれど、若しくは今豊町と云る是館町の遺名ならんか……又は官内町……」として、いざれも現在の博多駅の北部一帯の博多部（博多遺跡群）にその所在地を求めていた。また、伊藤常足もその著書『大宰管内志』の中で「館の址は必博多官内なるべくおもはる」としている。三者共、筑紫館（万葉集のよひ方、ちくしのたち）、鴻臚館のよひ方の単なる音韻の符合からその所在地を比定したものであった。これに対し、九州帝国大学医学部教授であった中山平次郎氏は、1926年、『考古学雑誌』に「古代の博多」を発表し、江戸時代以来の博多説を否定し、福岡城内説を唱えた。氏は鴻臚館に併設された博多警固所（大宰府警固所）の位置を地名や『小右記』等にみられる刀伊の來寇の記述を検討し、さらに『万葉集』巻十五、「天平八年丙子夏六月造新羅國之時 使人等各悲別贈答 及海路之上 儀旅陳思作歌 幷當所詠詠古歌」と詞書きのあるもののうち「至筑紫館 遙望本郷 懐懲作歌四首」

3652 志賀の海人の一日もおちず焼く暦の辛き愁をも吾はするかも

3653 志賀浦に漁する海家人の待ち愁ふらむに明し釣る魚

3654 かしふ江に鶴鳴き渡る志賀浦に沖つ白浪立ちし來らしも

3655 今よりは秋づきぬらしあしひきの山松かけにひぐらし鳴きぬ

と、おそらく同じ筑紫館の下の「海辺にして月を望みて作る歌九首」のうちの二首、

3660 神さぶる荒津の崎に寄する波間無くや妹に愁ひ渡りなむ

3664 志賀の浦に漁する海人明け来れば浦巡漕ぐらし楫の音聞ゆ、

を検討する。そして志賀の海人、志賀の浦が頻に歌われている点、筑紫館は博多湾を前にして、遠想を志賀島に馳せしむ位置にあったと考え、対岸に「荒津崎（山）」をひかえ波の音が聞える場所、そして決定的なことは、山松蔭の蟬声が詠まれていることとしている。この諸条件が示す情景と古地形の対応関係から「筑紫館は博多湾を隔てて志賀島を眺むべく、又近くに西公園（注・荒津山）を見るべき海岸の山地にあったことになる。福岡城跡の他に此の条件を容るべき地点は博多にあらずして、福岡城の位置より他には之を索むる能はず」とし、また、文献上の證拠では不充分として、考古学的見地から、当時城内は陸軍歩兵第24連隊の兵営内であったが現地踏査を試み、城内に多量の古瓦が散布することを確認された。そして、筑紫館（鴻臚

館)が福岡城内に所在したとするのが最も妥当性あるものとされたのである。以後、中山氏の説が定説となって現在にいたっている。

氏の説を補強したのは、太平洋戦争終戦すぐの 1948年の第3回国民体育大会開催のための競技場建設工事であった。この工事ではおびただしい礎石列や多量の古瓦・越州窯系青磁器など貴重な遺物が出土し、存命であった中山氏は学術調査の必要性を説かれたが、社会的状況はそれを許すことなく、遺跡は破壊されたのである。この地が筑紫館・鴻臚館の所在地であったと証明されるには、さらに40年の日月が必要であった。

2. 第1次調査の概要

1951(昭和26)年8月、九州文化総合研究所を調査主体に、鏡山猛氏を中心として岡崎敬、乙益重隆、渡辺正氣氏等が参加して実施された。調査地点は、平和台野球場の南側にある2面のテニスコートのうち西側コートおよびその北側緑地の一角にあたる。この一帯は、黒田薄家老大音六左衛門の屋敷跡で、戦前は陸軍歩兵第24連隊の弾薬庫として利用されていた。昭和26



Fig3.第一次調査風景

2. 第1次調査の概要

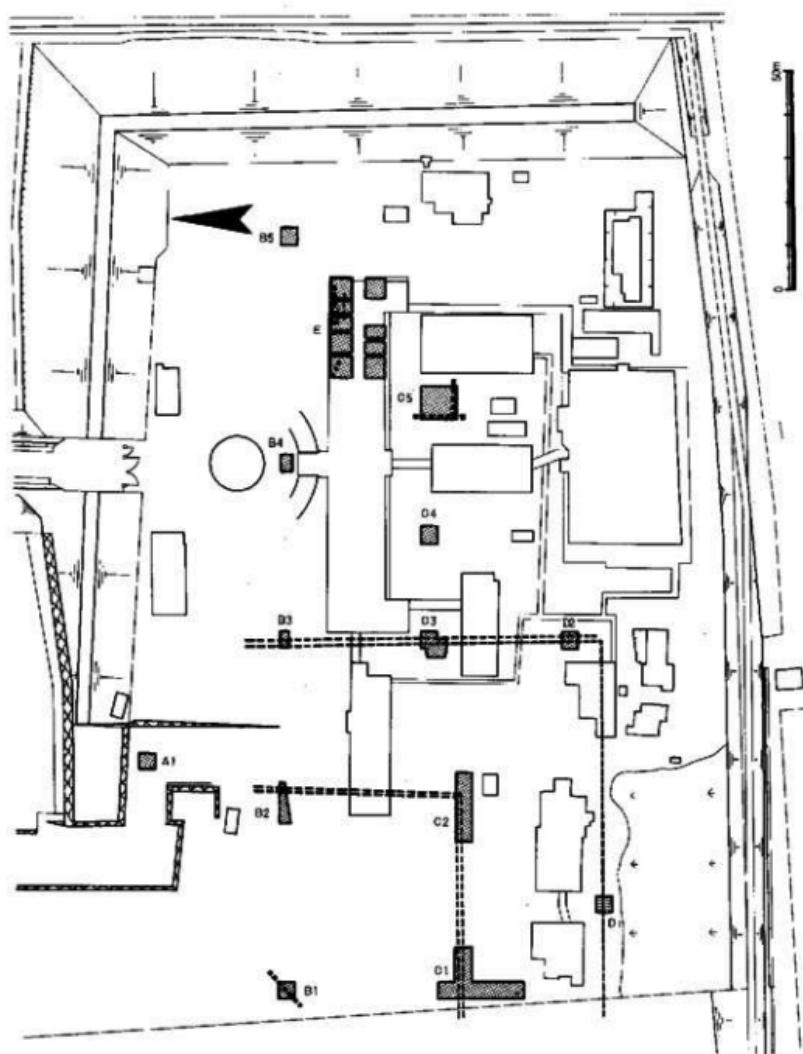


Fig. 4 第2次調査・調査区の設定

第3章 調査の概要

年当時には、第3回福岡国民体育大会に関連してボクシング選手の脱衣場と公衆便所が立てられていた。

調査は脱衣場周辺の削平工事中に脱衣場の北側に玄武岩の大石 ($1.51\text{m} \times 1.21\text{m} \times 0.24\text{m}$) および、その西側に南北に連なる礎石列が5個、また、礎石列の西側に存在する雨落ち溝らしき小溝を中心として進められた。大石の下からは、江戸時代の井戸が検出され、大石は井戸の埋設時に石蓋に用いられていたことが確認された。礎石列については、その配費が記録され断面図が作成されたらしいが、時期やその他についての特別の記録や解説は加えられていない。渡辺正氣氏によれば、鏡山先生は湯屋館に併設された警固所の建物の礎石と考えられていたらしい。

この調査区は本格調査開始の第4次調査区から第5次調査区にあたる。第1次調査で確認された礎石列はSB-31とよんでいる梁行2間、桁行16間以上の長大な瓦葺き礎石建物の西側の礎石列にあたり、雨落ち溝らしき小溝もこの建物の西側の雨落ち溝にあたる。第4次調査では、第1次調査トレンチを確認することができたが、現存する礎石は一個であった。惜しむらくは、この一次調査の時、引き続き本格調査が実施されていれば、得られた情報は今以上にすばらしいものであったと思われる。

3. 第2次調査の概要

福岡高等裁判所庁舎改築に伴う緊急調査である。調査主体は福岡県教育委員会で、文部省文化財保護委員会の協力のもとに実施された。調査期間は、第1次・昭和38年(1963)10月7日～11日と第2次・昭和39年(1964)3月27日～3月31日の2ヶ年にわたるが、湯屋館跡調査としては整理の都合上两者を合せて第2次調査とする。調査員は長沼賢海、豊田勝秋、波多野虎三、藤 次男、太田博太郎、滝口 宏、黒板昌夫、三宅敏之、三木文雄、仲野 浩、田村晃一、伊藤延男、鈴木嘉吉、松岡 史、高野孤鹿、大場憲郎、玉泉大栄、波多江一俊、渡辺正氣、吉田成治の各氏である。

この調査のトレンチ設定はFig. 4 の如くである。1次調査ではA1からD2までの約400m²と他にパレーコート地域で16m²が発掘された。2次調査ではE1からE9までの約180m²が発掘調査されている。

調査の結果、旧地形の復元では、高等裁判所地域東半にも標高15mほどの丘があり、本丸の丘の東端であるパレーコートとの間に幅約200mの広い谷部が存在することが確認された。谷部の最も深い所は標高3m位で、谷部には海砂が堆積していることが判明した。奈良・平安時代の遺構は発見できなかったが、遺物の埋蔵範囲の中心がパレーコートから野球場にかけて存

3. 第2次調査の概要

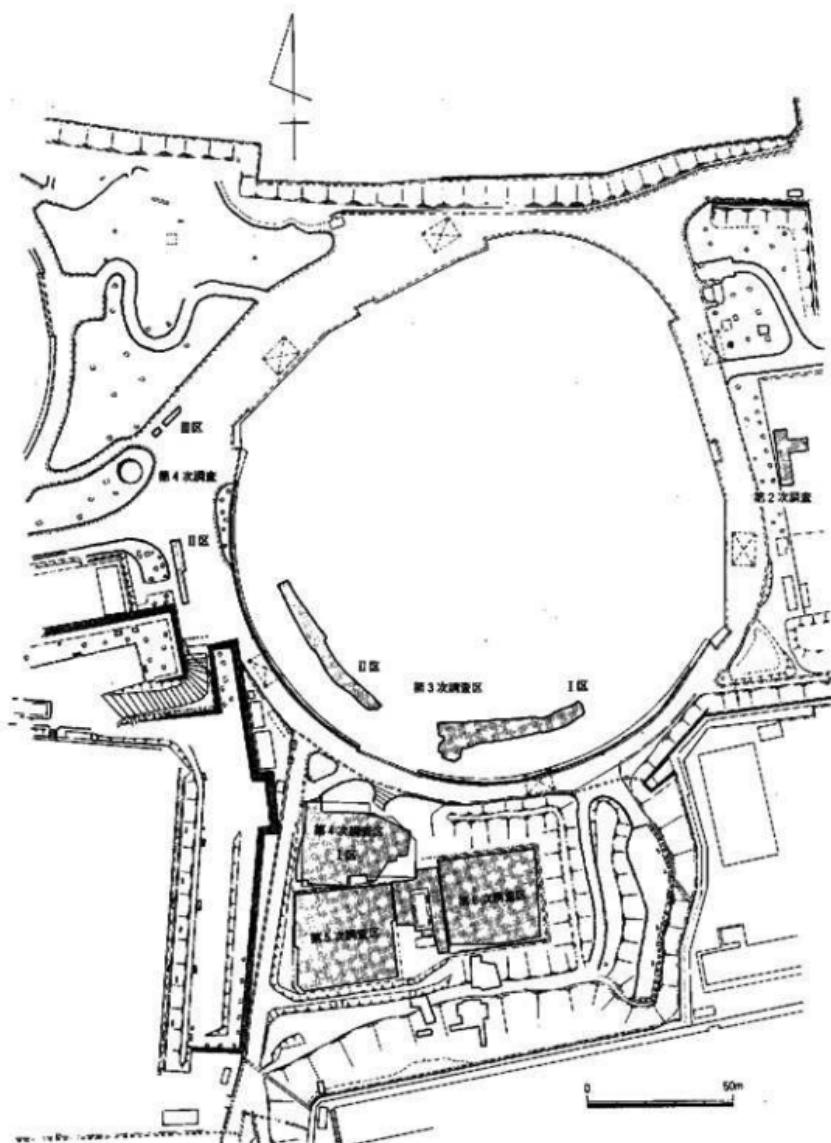


Fig.5 第3～6次調査区の関連

在することがわかった。なお、パレーコート付近の試掘で地山直上に該期の包含層が残存していることが確認された。築城遺構は、攪乱も多いが、築城時の基本的な縄張りの遺構は比較的良好に遺存しており、発掘の結果は古地図の記載を実証するものであった。

4. 第3次調査の概要

(1) 調査の概要

第3次調査は、福岡市都市整備局が計画した平和台野球場外野スタンド改修工事に伴う緊急調査として、福岡市教育委員会文化部埋蔵文化財課が、昭和62(1987)年12月24日から、翌63年1月20日まで実施した。調査に至る経過は前述したとおりである。調査は改修工事にかかる時間的制約から改修工事によって破壊される可能性がある外野席の最もグランド側に近い部分を対象とした。調査は盛土の除去から開始した。スタンドの盛土にも古代から近世にかけての遺物が多量に含まれている。盛土を除去した直下にすぐ遺構が検出され、その遺存状態は良好であった。

この地域は国指定史跡福岡城跡内であることはもちろんのこと、福岡城遺構と同一面や下層から検出される古代の遺構が、迎賓館である筑紫館・鴻臚館の遺構である可能性が高いなどの重要性から、福岡市教育委員会は改修工事の設計変更を求め、検出した遺構については、調査終了後、川砂を用いて盛土保存し、将来的調査に備えることとした。

調査区はスコア・ボードを挟んで2区に分かれる。I区、東側のレフト側スタンドで、発掘面積は約350m²である。II区、ライト側スタンドで、発掘面積は約300m²である。

検出した遺構は9~11世紀を中心とする上坑、溝状遺構、掘立柱建物と江戸時代の礎石建物、道路、排水溝、明治~昭和にかけての陸軍歩兵第24連隊の施設などである。調査区あるいは、その中に設定したトレンチが幅3~4mと狭いために個々の遺構について全容が明らかになるものは少ない。遺構検出面はスコアボード両側とII区の北端部が第三紀の岩盤であるのに対し、他の部分は谷部となり盛土による整地がおこなわれている。筑紫館・鴻臚館建設に先立って、あるいは施設の拡張に伴って大規模な造成工事が行われていることが明らかになった。

遺構と遺物について概観してみよう。上坑はすべてI区で検出している。SK-01はほぼ方形の平面プランをなす。岩盤に掘り込まれており、埋土の状態は自然堆積を示す。出土遺物は多量である。主な遺物として、毛彫りのある越州窯系青磁器、白磁器、黒色土器、土師器、奈良・平安時代の瓦類、食料残渣である鳥獸骨、木片、中国新時代の貨幣「大泉五十」などがある。時期的には10世紀末~11世紀初頭が考えられる。SK-02は長方形プランをなす。SK-

4. 第3次調査の概要

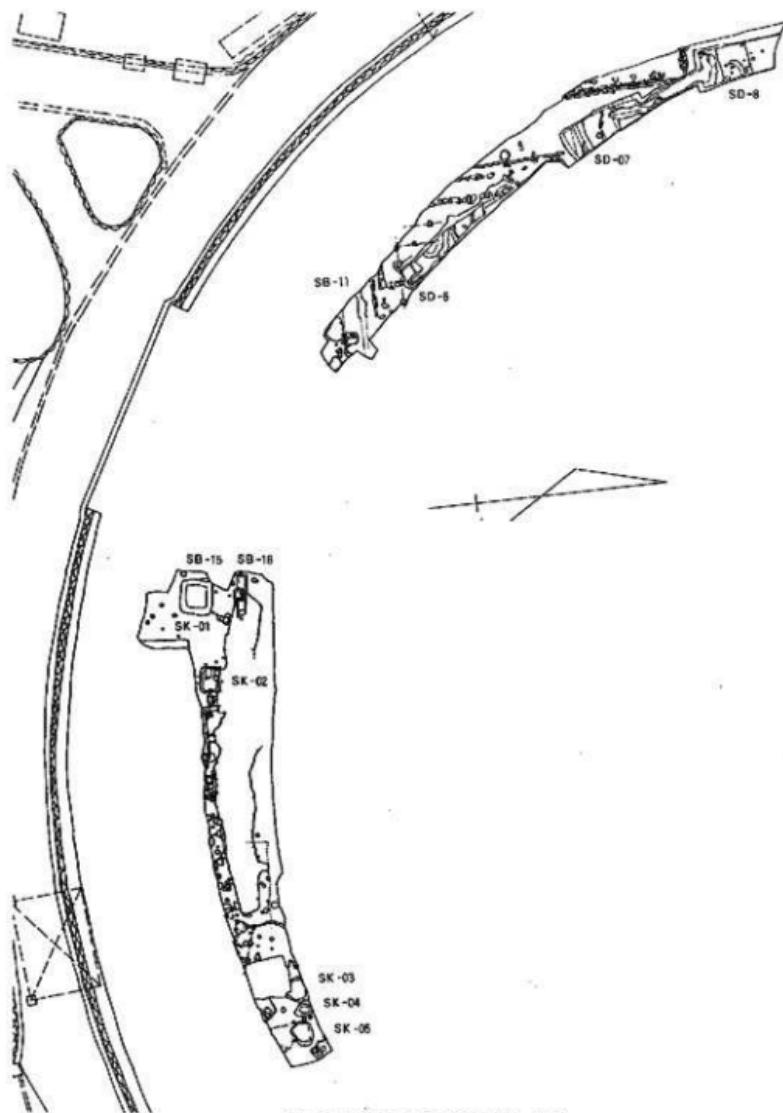


Fig. 6 第3次調査区全体図 (1/600)

01同様に岩盤に掘り込まれている。主な出土遺物は越州窯系青磁器（碗、合子）、盤口壺、水注、双耳壺、白磁器合子、皿、黒色土器、奈良時代の瓦類、西アジア産のガラス容器がある。時期は9世紀後半。SK-03～06は整地層中に切り込まれている。主な出土遺物は、奈良・平安時代の瓦類をはじめ、五代の越州窯系青磁器、白磁器、土師器、黒色土器がある。時期は10世紀～11世紀代である。溝状造構はⅡ区で4条検出している。トレンチがせまいため相互の関係は明らかにできない。溝の方向は東西あるいはそれに直交する南北に限られている。埋土中からは奈良・平安時代の瓦類と若干の越州窯青磁器、白磁器、須恵器、土師器、新羅陶器などが出土している。建築遺構はスコアボードを挟んだⅠ、Ⅱ区に検出した。Ⅱ区では岩盤を削り出した基壇状の造構があり、壇の斜面には多量の瓦が堆積していた。瓦類に混じり若干の青磁器、白磁器、イスラム陶器が出土している。Ⅰ区では布掘り掘立柱建物とそれを切る掘立柱建物各一棟を検出した。両者共工事による攪乱のためその一部を確認したにとどまる。掘立柱建物については直接時期を決定する遺物はないが、瓦葺き礎石建物よりは先行するものと思われる。本調査では遺構的にも三時期の重複があることは注目される。

以下、本次調査の主な遺構と遺物についてみてみよう。

(2) 遺構と遺物の概要

① SK-01

a. 遺構 (Fig. 7 PL. 3-(1)(2))

Ⅱ区の最も西側 バックスクリーンのすぐ東で検出した土坑である。第三紀の頁岩岩盤に掘り込まれている。検出面で東西径3.33m、南北径3.15mの隅丸方形プランをなす。底面では東西2.25m、南北径2.00mのほぼ方形プランをなす。深さ0.75m。断面形は逆台形状をなす。土層断面等からみると上部はかなりの削平を受けていると考えられる。土坑内の埋土は流れ込んだ状態を示す自然堆積である。土層堆積の層序を上より示すと、第1層 炭化物を少量含んだ黒褐色土層、厚さ14cm。第2層 黄褐色土（岩盤）の粒子を含んだ暗褐色土層、厚さ13cm。第3層 炭化物や材を多量に含んだ黒色土層、一部に板材も混入する。厚さ15cm。第4層、西側に片寄って存在する。黄褐色土と暗褐色土のブロック層である。厚さ10cm。第5層、暗褐色粘質土層、厚さ10cm。第6層、3層に似た暗褐色土層、中央部で粘質をおびる。厚さ5～25cm。第7層 炭化物粒子を含んだ灰褐色粘質土層、厚さ20cm。第8層、西側の一部にみられる層で壁の崩落土である。第9層 炭化物粒子を含んだ灰褐色粘質土層で第7層よりやや明るい。厚さ7cm。第10層 西側の一部にみられる層で、壁の崩落土である。黄褐色土。埋土は主に西側から流れ込んだ状態を示している。

4. 第3次調査の概要

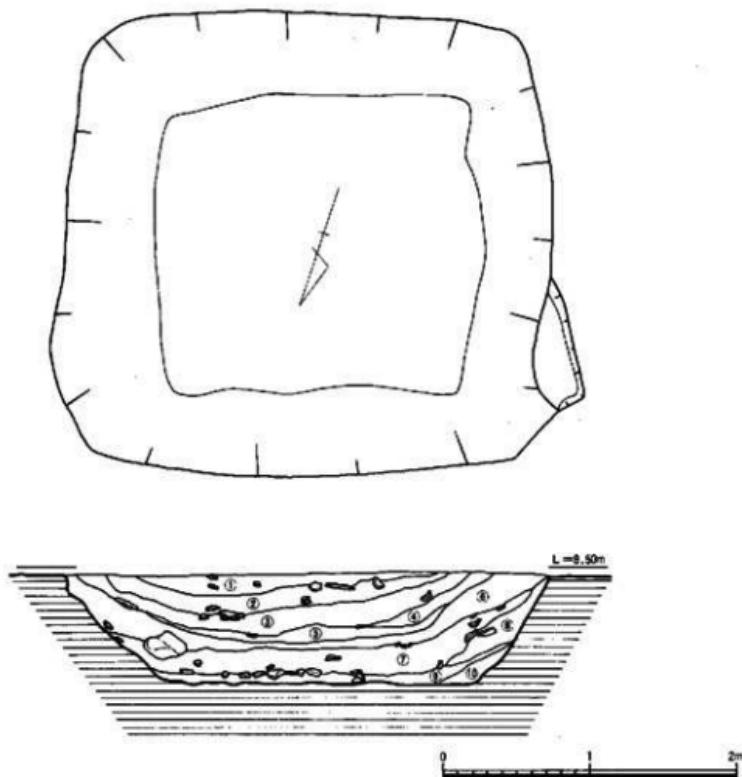


Fig. 7 SK-01実測図

土坑内からは、奈良・平安時代の瓦をはじめ多量の越州窯系青磁器、白磁器、土師器、黒色土器、須恵器が出土。底面に接して「大泉五十」一枚も出土している。この他、食料残滓である獸骨等も出土している。

b. 出土遺物 (Fig. 8, 9)

奈良・平安時代の瓦類をはじめ、白磁器、越州窯系青磁器、土師器、黒色土器、須恵器、貨幣、鉄製品の他、木片や獸骨、鳥骨などの自然遺物もある。一部、代表的なものを図示した。

1～8が青磁器、9、10が青白磁器、11～25が白磁器、26～31、33～35が土師器、32、36が黒色土器である。全体的には白磁器がもっとも多い。

1は全面にオリーブ色の釉を施す。底部は削り出しの輪高台で、その内側に4ヶ所の目跡が残る。器壁は薄く、厚さ0.2~0.3cm。器内に片切形と毛彫による花文が全面に施された優品である。口径15cm、器高6.1cm。類例はエジプトのスタート遺跡、フィリピン、鴻臚館の採集中にみられる。2、3は内面の見込み部分に毛彫による草花文を施す。2は削り出し高台で、その内側に目土が4ヶ所に付着している。3は皿、平底で4ヶ所に目跡が残る。4は底部が削り出しの輪高台で、その内側に4ヶ所の目跡が残るのは他と同様である。体部は丸味をもって立ちあがり口縁部は外反する。体部は外より5ヶ所で押して花形に作られている。全面にオリーブ色の釉を施した精良な小椀である。口径12cm、器高5.4cm。5は皿。削り出し高台で、その内側に目跡（4ヶ所？）が残る。全面施釉である。6は底部が削り出しのやや高い輪高台で、その内側に3ヶ所の目跡が残る。口縁部は直線的にのびる。口縁部には6ヶ所に輪花の刻みがあり、その下方は外より押して花形にしている。口径16.5cm、器高8cm。7は大型の碗である。底部は輪高台で、盤付きに目跡が残るが数は不明。内底部にも細い目跡が輪状に残っている。体部下半にヘラ削りを加える。8も大型の碗、底部は低い削り出しの輪高台である。高台内側に目跡が残るが、数は明らかでない。体部下半から底部にかけては露胎のままである。9は杯、底部は削り出しの輪高台、体部外面は口縁直下までヘラ削りを加える。外底部は露胎のままである。口径10.4cm、器高3.6cm、二次的に火を受けている。10、底部はやや幅広の削り出し高台。体部は開き気味に直線的にのびる。体部外面の下半から底部にかけては露胎のままである。

白磁器は形態から三類に分類可能である。I類、口縁部が直口するもの。(11、14) II類、口縁部が外側下方に強く屈曲するもの。(15、16) III類、口縁部が肥厚するものであるが小型品(12、13、17)と大型品(18~25)の2類に小別できる。

11は皿、体部は6ヶ所で外から押し、花形につくられている。口径10.3cm。14は皿、底部が削り出しの低い輪高台。体部は5ヶ所で外から押さえ花形につくられている。口径13cm、器高3.8cm。15は皿。底部は削り出しの輪高台で、体部は底部から屈曲して立ちあがり直線的にのび、口縁部で外側下方に折りませられている。施釉にあたっては鋏子ではさんでなされたとみられ、傷跡が2個づつ向いあわせに並ぶ。底部は露胎のままである。口径12.3cm、器高3.4cm。16は皿。底部は低い削り出しの輪高台。体部は外傾しながら立ちあがり、口縁部は外側下方に折り曲げられている。体部外面下半はヘラ削りを施す。底部周辺は露胎のままである。口径12cm、器高3.3cm。12、13、17はほぼ同形同大の小碗である。底部は削り出しの低い輪高台。口縁部が低い玉縁状に肥厚する。体部外面は口縁部直下よりヘラ削りが加えられる。釉は高台が露胎で他は薄く、透明度の高い灰白色釉がかけられる。12は口径12cm、器高4.0cm、13は口径10.8cm、器高3.9cm、17は口径12.5cm。18~25は大型の碗で細部には若干の違いがあるが、ほぼ同形同大である。底部は削り出しの低い輪高台。体部はやや丸味をもって立ちあがる。口縁部は折り

4. 第3次調査の概要

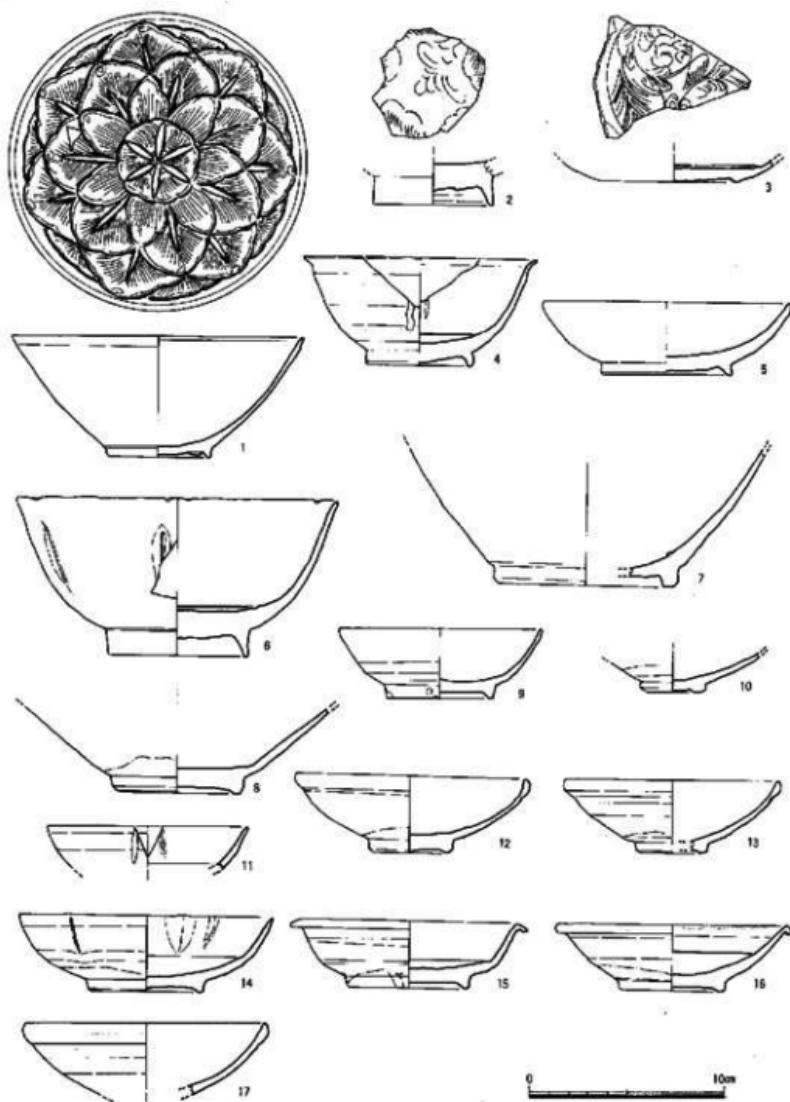


Fig. 8 SK-01出土遺物実測図(1)

第3章 調査の概要

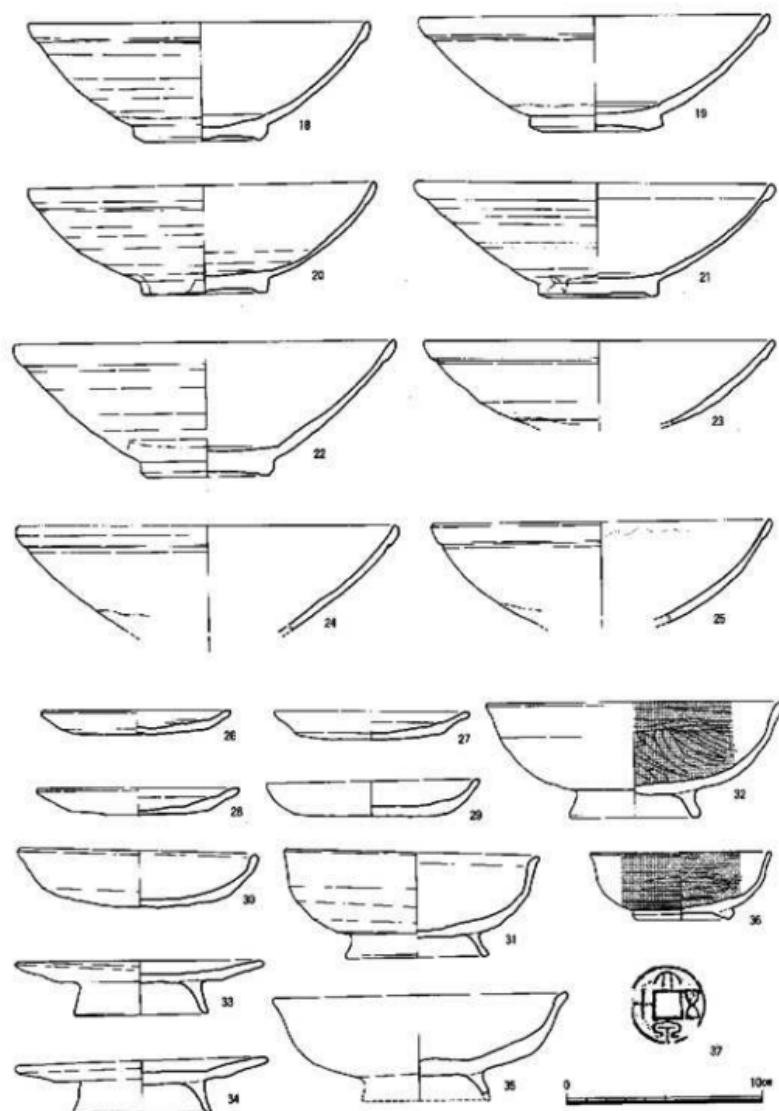


Fig. 9 SK-01出土遺物実測図(2)

4. 第3次調査の概要

曲げ、ハリ付けによって低いカマボコ状に肥厚させる。体部内外面の下半部にヘラ削りを施し、全体に薄手のつくりである。見込みに沈線をめぐらす。施釉は底部付近の露胎部を除いてはほぼ全面に施釉される。18は口径17.6cm、器高6.1cm。19は口径18cm、器高5.9cm。20は口縁部肥厚が顯著でない。口径17.7cm、器高5.6cm。21は口径18.5cm、器高6.0cm、22は口径19.7cm、器高6.8cm、23は口径18.0cm、24は口径19.2cm、25は口径17.2cmである。

土師器には小皿、高台付皿、杯、椀がある。小皿（26～29）いずれも底部はヘラ切りである。内面と体部外面はナデ調整。口縁端部は丸くおさめている。26は口径9.7cm、器高1.2cm。27は口径10.0cm、器高1.5cm。28は口径10.4cm、器高1.4cm。29は口径10.9cm、器高1.9cm。高台付皿（33、34）外方にひらく高い高台をはりつけた皿形品、内面と体部外面はナデ調整。33は口径12.8cm、器高2.8cm、34は口径13.0cm、器高2.7cm。杯（30）は底部がヘラ切りで丸味をもつ。内面はヘラ磨き。体部外面はナデ調整。口縁部はやや肥厚し丸くおさめる。口径12.3cm、器高3.0cm。椀（31、35）外にひらいたやや高い高台を貼り付けている。外底部はヘラ切り後、ナデおよびヘラ磨き、内面も丁寧なナデないしはヘラ磨きである。口縁端部はやや肥厚し、外反する。31は口径12.1cm、器高5.6cm。35は口径15.1cm。

黒色土器（32、36）32はやや大型の椀、黒色上器Aである。高台は外にひらく、器形は土師器と同様である。外面はナデ調整。内面はヘラ磨き。口径15.3cm、器高5.9cm。36は黒色土器B、小型の椀である。幅広く低い高台をはりつける。体部は丸味をもってたちあがる。内外面共に横方向のヘラ磨き。口径9.2cm、器高3.4cm。

大泉五十（37）中国、新時代の貨幣、土坑底より出土。径2.75cm、重さ3.92g、この時代に中国で流通していたものがもち込まれたのであろう。

以上が、SK-01の代表的な出土遺物である。時期的には共伴する土師器系から10世紀後半とみることができる。

② SK-02

a. 遺構 (Fig.10 PL. 9-(1)(2)・PL. 10(1))

II区に検出した土坑である。SK-01の東6.5mのところに位置する。第3紀の頁岩岩盤に掘り込まれているのは、SK-01と同様である。SK-01と02の軸線は平行していて、両者が無意味に掘り込まれたものでないことがわかる。土坑は検出面で東西径2.4m、南北径1.8mの長方形プランをなすが、南側の中央部に幅30cm、深さ5cmの浅い溝が連接している。底面では東西径2.0m、南北径1.5mの長方形プラン、断面形は浅い逆台形状をなす。深さ20cmと浅いがこれは上部がかなり削平されているためである。土坑埋土は黒褐色土層。上坑は後世のピットの重複がみられ、特に西半部に多い。西半部中央には東西径0.87m、南北径0.7m、深さ0.35

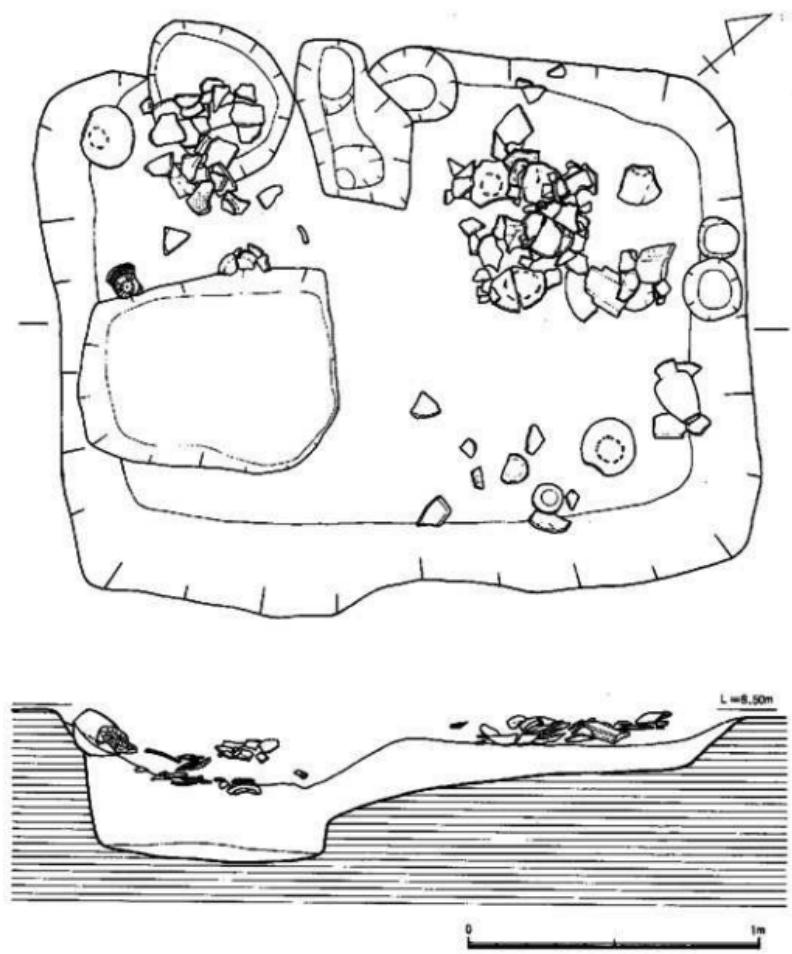


Fig.10 SK-02実測図

4. 第3次調査の概要

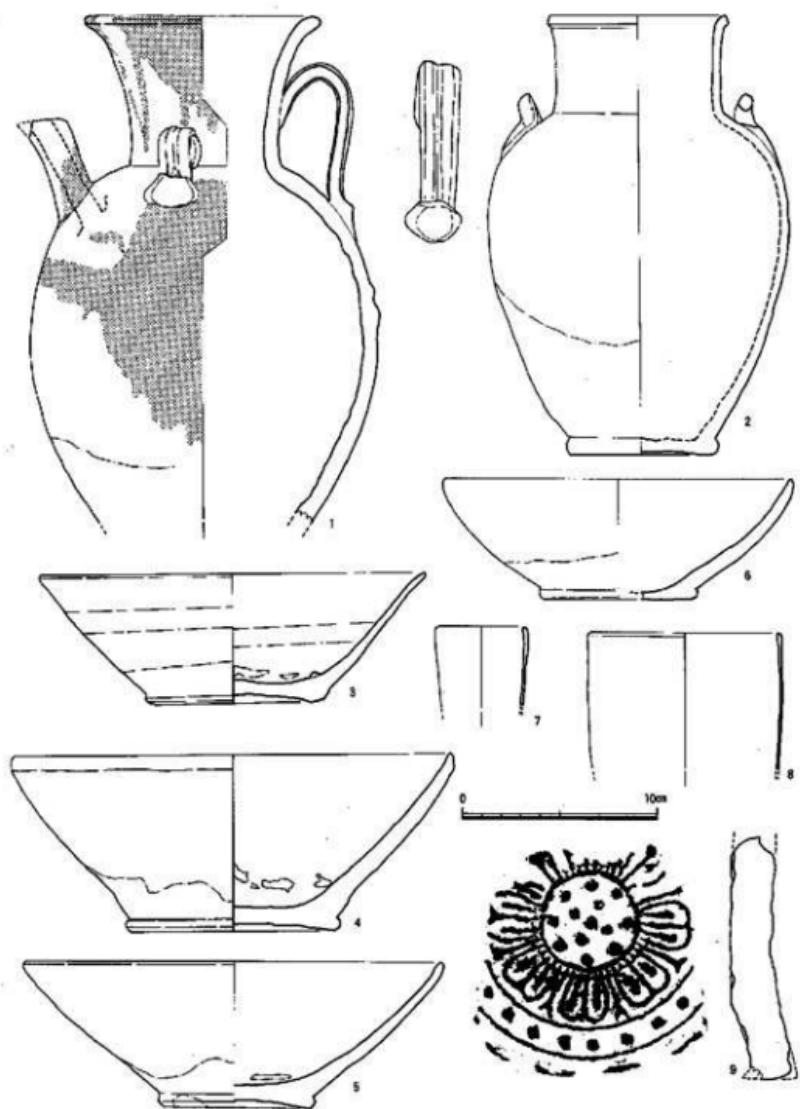


Fig.11 SK-02出土遺物実測図

■長方形プランの江戸時代の礎石抜き穴がうがたれている。

遺物は底面より約10cm浮いたところに集中して存在する。瓦類をはじめ、越州窯系の青磁器（双耳壺、水注、椀、合子）がほぼ完形で出土していて、セット関係を知る好資料である。その他若干の白磁器、黒色土器、ガラス容器がある。磁器類は目跡がついたままで使用痕も認められないので未使用品と考えられる。また、その大部分に火を受けた痕跡があることは注目されよう。

b. 出土遺物 (Fig.11)

越州窯系青磁器、黒色土器、ガラス容器、白磁器、瓦類がある。土坑が浅いため量的には多くないが、完形に近いものが多く、セット関係をよく示している。

1は水注、底部を欠損する。口頭部は上方にむかってひろがり、口縁端部は丸くおさめる。体部はやや長胴となり、底部は2に示す双耳壺と同様の形状になるとされる。注口は断面円形で長くならない。注口の接合の仕方は先ず注口部をつくり、体部肩に穿孔、そこより注口部を挿入して、後に仕上げを行う。注口の反対側には把手をつける。把手は粘土紐二本を組み合わせている。相反する左右には、粘土紐二本よりなる縫耳を配する。釉色は二次加熱のため変色している。釉は底部下半部以外の外表面と口頭部内側に黄色釉がかけられ、縫耳から胴部にかけての2ヶ所に褐色釉が斑状に施され、それが横線で結ばれている。また、注口部、口縁部2ヶ所にも褐釉がみられる。口径12.1cm、推定器高28cm前後。2は双耳壺、口縁部の一帯を欠く。頭部はまっすぐに立ちあがり、口縁端部がわずかに外反肥厚する。胴の最大径は上半にあり、やや肩の張った長胴をなす。肩部2ヶ所に横耳が配される。胴部は下半は露胎のまま放置される。底部は横に張り出した平底である。胴上半部と口頭部内側に施釉されているが二次的加熱のため変色剥離している。1同様に口縁部と肩部から胴部にかけて褐色の斑文が施される。釉下に化粧がけがみられる。口径9.3cm、器高22.3cm。3～6は大型の椀である。3はややあげ底状の平底。体部は外傾しながら立ちあがり、口縁端部がやや外反する。底部付近は露胎の今まで、それより上半と内面に黄緑色の釉がかけられる。底部量付と見込み部分に11ヶ所の目跡が残る。目跡は削られることなく放置されている。未使用品。口径19.8cm、器高6.5cm。4は器壁がやや厚い。口縁部がわずかに内傾する。底部の形状は3と同様である。体部下半から底部にかけては露胎。釉は二次的加熱のため青灰色に変色し剥離が著しい。見込みに7ヶ所の目跡が残る。3同様に未使用品。口径22.2cm、器高9cm。5・6は前者同様の器形であるが、口縁部が内傾し、端部を丸くおさめる。体部下半から底部にかけては露胎の今まで、施釉は内面部と外面部上半部におこなわれる。5は緑色釉、6は二次加熱のため灰青色に変色し、剥離が著しい。5は見込みに6ヶ所の目跡。削られておらず、未使用品。6は破片のため目跡の数は不明。5は口径21.6cm、器高7.5cm。7は復原口径17.8cm、器高8.2cm。

4. 第3次調査の概要

7・8はガラス容器。7は復原口径10.0cm、口縁部がやや肥厚し内傾する。椀ないし杯であろう。色調は若干緑味がかっているが透明。若干の気泡がある。器壁の厚さ約0.1cm。8は口縁部がわずかに肥厚し、内傾する。器壁は厚さ0.1~0.2cm。口径4.8cm、杯ないしは瓶の口となろう。緑色の半透明で、気泡を多く含む。共に成分分析からは、イスラム地方の製品と考えられる。8に類似したガラス片は東区多々良込田遺跡から出土している。

9は鴻臚館式の軒丸瓦である。複弁八弁蓮華文で、中房に1+4+8の蓮子を配する。外区内縁には8個の珠文が残っている。

③SK-03

a. 造構 (Fig.12)

II区の東端部近くに検出した土坑である。谷部が埋められた整地層に掘り込まれている。南側の一部が工事によって破壊され、北側は未調査区にのびている。平面形は梢円形をなすのであろう。検出面で南北径2.1m+a、東西径2.4mを測る。深さ15cmと浅く皿状をなす。底面に2個の柱穴がある。この土坑の上部が削平されているのは他と同様である。

b. 出土遺物 (Fig.13-1~6)

奈良・平安時代の瓦類が量的に多く、若干の青磁器片、白磁器片を含む。図示したのは6点で、1、2、6が青磁器、3~5が白磁器である。

1は口縁部の一部を欠くが、ほぼ全形を知ることができる。底部は貼り付けの輪高台で、底部端は外側にひらく。底部でゆるやかに屈曲し、外傾しながら立ちあがる。口縁端部は丸くおさめる。見込みには毛彫りで草花文が描かれている。外底の高台内側に4ヶ所の目跡が残る。体部外面は口縁部近くまでヘラ削りの調整が加えられる。全面にオリーブ色の釉がかけられる。越州窯系青磁器の優品である。口径16.1cm、器高4.2cm。2も1と同様の器形をなすと考えられるが、底部のみの破片である。底部は貼り付けの輪高台で、底部端は外に張り、バチ形をなす。端部は丸くおさめている。外底の高台内側に目跡が4ヶ所残っている。見込みには太めの毛彫りで草花文が描かれている。全面施釉で、釉調は風化のため、茶褐色をおびたオリーブ釉で、光沢はない。底径6.5cm。6は小型の椀、底部は輪高台であるが、削り出しか貼り付けかは不明瞭。体部は丸味をもってたちあがり、口縁は直口する。底部の高台内側に4ヶ所の目跡がみられる。全面施釉であるが、釉の発色が悪く、モスグリーンを呈する。口径12.8cm、器高5.4cm。

3は青白磁皿である。体部中ほどで屈曲し、外側にひらく。口縁端部は尖り気味におさめる。口縁部に刻みを施し、復原すると六輪花になる。器壁は非常に薄い。器内はよくナデ、外側はわずかに削り痕が残る。全体に丁寧なつくりである。施釉は青味をおびた透明釉が全面に施さ

第3章 調査の概要

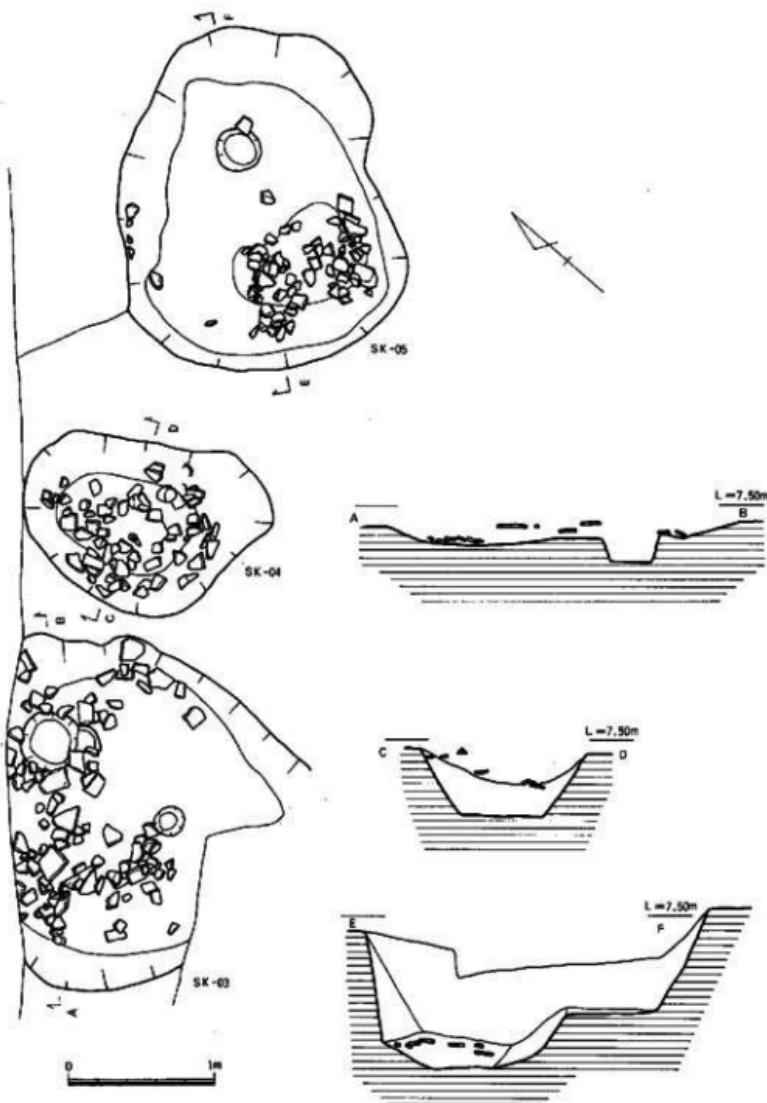


Fig.12 SK-03~05 実測図

4. 第3次調査の概要

れるが、高台近くの一部に露胎がみられる。復原口径15.8cm。同様の器形をなすものが他に数点存在する。4、5は玉縁をもつ白磁器碗である。4は小破片。やや灰色をおびた透明釉がかけられるが、底部まではいたっていない。二次的加熱のため釉が荒れている。復原口径16.1cm。5は口縁部が4に比較し、やや幅広になる。折りまげないしは貼り付けで接合部にすき間が存在する。全面に灰色をおびた透明釉をかける。外面の口縁下はヘラ削りの調整を加えている。復原口径18.8cm。

④ SK-04

a. 造構 (Fig.12)

II区の東端部SK-03の東15cmに検出した土坑である。SK-05とは約55cm離れた西側に位置する。SK-03同様に整地層に掘り込まれている。検出面で南北径1.7m、東西径1.15mの不整格円形プランをなす。深さ45cmで、断面形は逆台形をなす。埋土は黒褐色粘質土層。上部が削られているのは他と同様である。

b. 出土遺物

青磁器、陶器、土師器、須恵器、黒色土器、瓦類がある。量的に多いのは瓦類である。他の遺物はいずれも小破片であり、今回は図示するのを省略した。

⑤ SK-05

a. 造構 (Fig.12)

II区の東端に検出した。SK-04の東55cmのところに位置し、SK-06とは切り合い関係にあるが、SK-06のプランがはっきりしないために、その前後関係は不明。整地層に掘り込まれている。検出面では東西径2.35m、南北径1.95mの不整格円形プランをなす。底面は平坦でなく西側が一段深くなっている。深さは浅い部分が約70cm、西側の深い部分が約95cmを測る。埋土は黒褐色粘質層である。

b. 出土遺物 (Fig.13-7~12)

青磁器、白磁器、須恵器、土師器、黒色土器、奈良・平安時代の瓦類がある。量的には瓦類が多い。7、10、11は青磁器、12が白磁器、8は黒色土器である。

7は口縁部を欠くが、越州窯系青磁器杯の優品である。体部外面には、外から押えた割線があるが、五輪花になるか六輪花になるか不明。底部は貼り付けの輪高台で、バチ形に外に開き、端部は丸くおさめている。体部外面はヘラ削り調整。内面見込みには圓線をめぐらし、その内側に毛彫りによる草花文を描く。底部の高台内側には、やや片寄って5ヶ所に目跡が残る。全面施釉で、オリーブ色の透明釉。光沢がある。底径10.0cm。10は碗。底部は削り出しの低い高

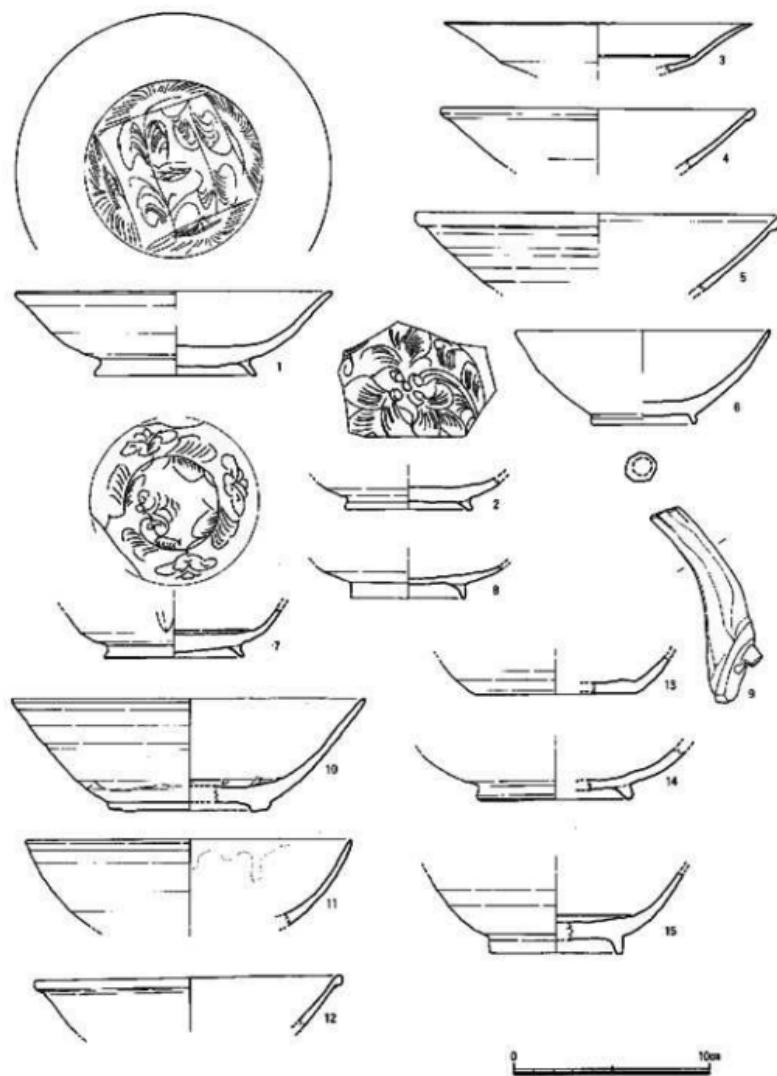


Fig.13 SK-03~05'出土遺物実測図

4. 第3次調査の概要

台、体部はやや丸味をもって立ちあがり、口縁端部は丸くおさめる。体部下半はヘラ削り調整、見込みに圓線をめぐらす。釉は外面上半から内面に、青灰色のくすんだ不透明釉が施されているが、二次加熱のため変色、変質している。釉がやや浮き、剥離がみられる。見込みに目跡3ヶ所が残る。未使用品か。復原口径17.8cm、器高5.7cm。11は椀、体部は丸味をもって立ちあがり、口縁端部は尖り気味におさめる。体部下半はヘラ削り。全面にやや青味のあるオーリーブ色の透明釉を施す。二次的加熱のため、内外面の一部に変色、変質がみられ、一部二次的釉だれもある。復原口径16.5cm。

12は小さな玉縁をもつ白磁碗、灰白色の透明釉を全面に施釉する。復原口径15.4cm。

9は水注の注口部である。断面は円形で、長くそりかえる。注口部のとりつけは体部に外側より穿孔し、それに注口を貼り付けたもので、内側に粘土のはり出しがみられる。注口部はヘラナデ調整、胎土には多量の砂を含む。無釉であるが、二次的加熱のために釉が剥離してしまった可能性もある。

8は椀、黒色土器A類である。底部は内湾した細い貼り付け高台、器面が荒れている。他は不明。全体に薄手のつくりである。高台径5.9cm。

⑥ SK-05'

a. 造構 (Fig.12)

II区の東端に検出した土坑である。SK-05と切り合い関係にあるが、その前後関係は不明。南側が未調査区にのびる。平面プランは明確でないが径2.6m前後の円形ないしは稍円形プランをなすと考えられる。断面形は皿状をなし、深さ20cm前後を測る。

b. 出土遺物 (Fig.13-13-15)

黒釉陶器、須恵器、土師器、瓦類があるが、いずれも量的に少ない。3点を図示した。

13は土師器の杯。底部はヘラ切りの平底、体部内外面はナデ調整であるが、器面が荒れていて詳細不明。底径8.0cm。 14は黒色土器B類の椀。底部はやや厚い貼り付けの輪高台でバチ形に開く。端部は丸くおさめている。内面は丁寧なヘラ磨き。外面は荒れているために詳細不明。底径7.9cm。

15、青磁器の椀、底部は削り出しのやや高い輪高台。体部は丸味をもって立ちあがる。外面はヘラ削り調整。見込みに浅い段がめぐる。やや青味の強いオーリーブ色の釉がやや厚く全面施釉される。外底の高台内側に目跡が残る。高台径6.7cm。



Fig.14 SB-11実測図

4. 第3次調査の概要

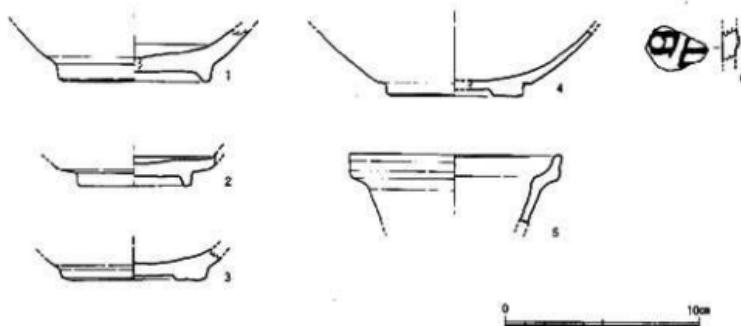


Fig.15 SB-11出土遺物実測図

⑦SB-11

a. 造構 (Fig.14)

I区の最も東側、バックスクリーンのすぐ西に検出した造構である。第三紀頁岩の地山を削り出した基壇状の造構である。基壇と思われる部分は削平が著しく、また後世の擾乱によるピットが多数存在するが、明確に建物を示す造構はない。段落ち部分はほぼ東西に直線的にとうる。調査区内で約6mを確認している。この部分より西側には、軒よりずり落ちたような状態で瓦が3m幅で堆積している。段落ちの最も深い部分は、基壇と考えられる面より約50cmあり、断面U字形の溝状を呈している。基壇に伴う雨落ち溝と考えることもできるが、瓦が小さく割れているなど、判然としないところもある。

この造構は断面図でも明らかなように、江戸時代の建物、兵舎（被服庫）の建物と重複関係にある。断面図をもとにその関係を説明する。まず、江戸時代の建物の建築に際して、削平され、後に新たな整地がおこなわれる。第1層、暗褐色の炭混じりの粘質土層、第2層、頁岩風化土のブロックを含んだ褐色粘質土層、第3層、頁岩風化土のブロックを含んだ橙赤色粘質土層は、この整地によって生じた土層である。その後、被服庫は江戸時代の建物を拡張するような状態で建築されている。第4層、炭混じりの暗褐色粘質土層に多量の奈良・平安時代の瓦が堆積している。先の削平で残った部分である。上からの擾乱はあまりみられず、遺物の混入もみられない。先に指摘したように溝状になっている。この第4層より下位は、第5層、暗褐色の粘質土層、第6層、地山の頁岩ブロックを含んだ暗褐色粘質土層、第7層、炭、地山ブロックを含んだ黄褐色粘質土層、第8層、焼土、炭を含んだ黄褐色粘質土層、第9層、頁岩風

化土である地山である。第5層～7層は鴻臚館時代あるいは筑紫館時代の整地層である。若干の遺物が含まれるが、その時代を確定するには他の部分との比較検討が必要である。調査区が狭く、遺構の性格が明確でないが、ここでは一応建物基壇の一部としてみておきたい。

b. 出土遺物 (Fig.15)

軒からずり落ちたような状態で堆積した多量の瓦類に混じって、若干の青磁器、白磁器、陶器、イスラム陶器がある。瓦類は量的にきわめて多いが、奈良・平安時代のものが混じっている。出土遺物は6点を図示した。1、2は青磁器、3、4は白磁器、5は無釉陶器、6はイスラム陶器である。

1は楕、底部は削り出しの輪高台。外面はヘラ削り調整。見込みに浅い段がつく。淡オリーブ色の釉を全面施釉する。施釉後、豊付の部分の釉をかきとっている。見込みに細長い目跡が残るが数は不明。底径7.8cm。2は皿である。底部は削り出しの細い輪高台。体部は屈曲してちあがるが大部分を欠いている。オリーブ色の釉を全面に施釉し、豊付の部分は削り取る。見込みに細長い目跡が1個残っているが数は不明。豊付きにも同様の目跡が残る。底径5.9cm。

3、4は小さな玉縁をもつ楕の底部とみられる。蛇目高台を有する。器面は内外共、丁寧な調整である。高台外面から内面にかけて施釉され、豊付きの部分は施釉後、ヘラで不定方向に削られている。3は黄白色釉で、釉下に化粧がけがみられる。底径7.4cm。4はオリーブ色をおびた白色透明釉。底径7.1cm。

5は盤口壺の口縁部とみられる。口縁部は直線的にたちあがる、胎土には多量の砂を含み、焼成は良好、外面は黒褐色、内面は灰褐色をなす。無釉の陶器である。復原は口径10.9cm。

6は3.0cm×2.5cmほどの小破片。大型壺の体部上半部にあたる。円形と粘土紐の貼り付け文様が残っている。胎土は白色、内外面に厚く青釉をかけるが、文様上面は剥離している。

⑧ S B - 15 (Fig.16)

II区の西端、バックスクリーンのすぐ東に検出した。S K - 01の北2.2mに位置する。S B - 16と重複関係にあり、S B - 16に切られている。地山の頁岩に掘り込まれた幅0.75m、深さ1.2mの布掘りの掘立柱遺構である。東側が工事によって破壊され、西側がバックスクリーンの下の未調査区に延びるために確認した長さはわずか4.5mである。底面に3ヶ所の柱痕跡が認められる。柱部分は幅1.1mにわたって約10cm掘りさげられ、その中央に柱をたてる。柱の大きさはその痕跡から径40cmの円形と考えられる。柱間は2.1m（7尺）である。布掘り掘り方内は、I、白色の頁岩混入土、IV、頁岩混入の赤色～白色土、V、頁岩混入の赤色土、VI、暗赤色土、頁岩混入の白色～赤色土、VII、赤色土がブロック状にはいる。VII、頁岩混入白色土を5～10cmの厚さで交互に版築状につき固めて埋めている。布掘りの主軸方向はS - 98.5°

4. 第3次調査の概要

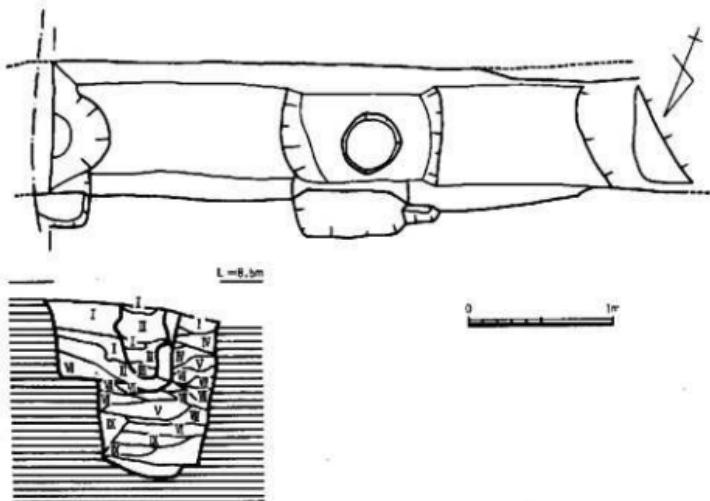


Fig.16 SB-1516実測図

—Rをとっている。

第4、5次調査で確認した構造と考えられる布掘り遺構と軸線を同じくしており、構造に対応する北側の構造と考えることもできるが、確認部分が短くかつその延長線上に同様遺構が検出できること、規模、柱に差異が大きいことから、建物跡とみるのが妥当と考えられる。ただし、建物とした場合もその規模や構造については今後の調査によって検証する必要がある。

出土遺物がないため時期の決定はできないが、切り合ひ関係等からみれば、本遺跡で最も古く位置づけられる遺構である。

⑤SB-16 (Fig.16)

II区の西端、バックスクリーンのすぐ東に検出した掘立柱遺構である。SK-01の北2.0mの所に位置する。SB-15と重複関係にあり、SB-15の布掘り掘り方を切っているのでSB-15より後出することは明らかである。ただし、布掘りの柱部分とSB-16の柱掘り方がよく一致することは、時間幅があまりないことを示している。

SB-16は柱穴掘り方2個を確認したにとどまる。これはSB-15同様に東側が工事により破壊され、西側が未調査区のバックスクリーンの下に延びるためである。柱穴掘り方は一辺80cm

第3章 調査の概要

の方形プランで、現存の深さは約55cmである。掘り方内には柱痕跡が確認でき、柱の大きさは径30cm前後と考えられる。柱痕内には、Ⅱ、褐色土、Ⅲ、炭化物混入の灰褐色土がつまっている。掘り方は頁岩の風化土で埋められている。柱間は2.1m（7尺）とSB-15と変わらない。建物の規模・構造は調査区がせまいため不明。

出土遺物がないため時期決定はできないが、礎石建物に先行するものと考えられる。

④ SD-06

a. 遺構 (Fig.17)

II区に検出した溝状の遺構である。調査区の工事によって掘削された部分の幅約1.5mに限ったために、遺構の性格が正確に把握できていない。一応、溝としたが、土坑である可能性も強い。溝幅3.0m、深さ0.9m、断面V字形をなす。溝の方向は東西方向をとっている。溝底には瓦が堆積し、その上部に木炭層が厚さ2~3cmで堆積している。北西部で土坑（SD-06'）と重複していて、土坑に切られている。土坑は南北径3.9m、東西径1.1m+αの楕円形プランをなすと考えられる。深さ1.4mで断面形は皿形をなす。土坑内には溝底に堆積する木炭層がないことからもその切り合ひ関係は明白である。

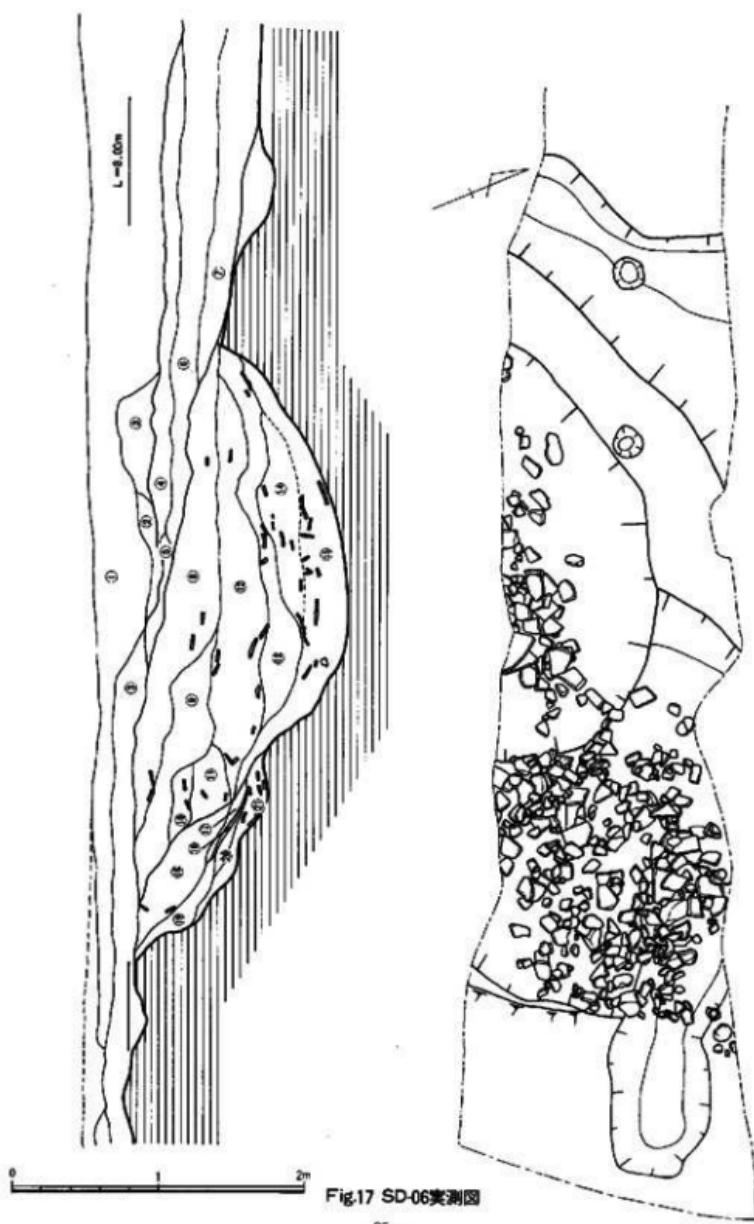
西壁の土層からそれらの関係をみてみよう。第1層、花崗岩風化礫、真砂土を混入した褐色土層。第2層、灰茶褐色粘質土層。第3層、暗茶褐色粘質土層は、江戸時代の築造時における整地層。第4層、木炭片を若干含んだ褐色粘質土層。第5層、明褐色粘質土層。第6層、瓦小片、小砾、木炭片を若干含んだ茶褐色粘質土層。第7層、第6層より瓦、砾の量が少なくなる。やや赤味をおびた茶褐色粘質土層。以上の第4~第7層は西側に順次厚くなっている。地山の傾斜とも符合しているので、自然に流失した土の堆積とみられる。SD-06'はこの土層の下面において確認できる。第8層から第15層はSD-06'の埋土である。第8層、木炭片、瓦小片を含む赤褐色粘土層。第9層、暗赤褐色粘土層。第10層、赤褐色粘質土層。第11層、頁岩風化土、木炭片を含んだ暗赤褐色粘質土層。第12層、頁岩風化土、木炭片、瓦片を含んだ明赤褐色粘質土層。第13層、瓦片を含む赤褐色粘土層。第14層、木炭片を含む茶褐色粘質土層。第15層、木炭片、瓦類を多量に含んだ暗褐色粘土層となっている。第18層~第21層は、SD-06の埋土である。第16層、暗赤褐色粘質土層。第17層、褐色粘質土層。第18層、木炭層。第19層、赤褐色粘質土層。第20層、黄褐色粘質土層。第21層、木炭片、瓦を多量に含んだ暗褐色粘質土層となっている。

SD-06'、SD-06の堆土はいずれも自然の流れ込みによる堆積状態を示している。

b. 出土遺物 (Fig.18)

SD-06からは多量の瓦類に混じって、青磁器、須恵器、土師器、石製鏡等が出土している。

4. 第3次調査の概要



第3章 調査の概要

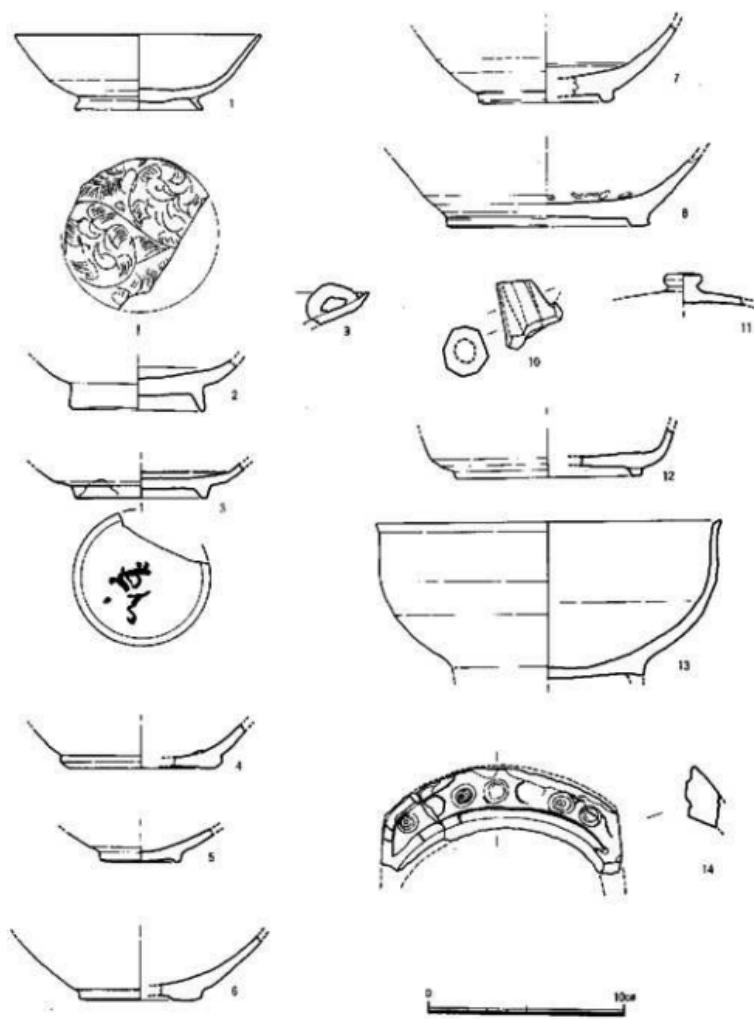


Fig.18 SD-06出土遺物実測図

4. 第3次調査の概要

S D - 06' では瓦類が主で青磁器の類はきわめて少ないが、調査当初、切り合ひ関係がわからず、遺物が混在している危険がある。

14点を図示した。1～4、7～9が青磁器、5、6が白磁器、11、12が須恵器、13が土師器、14が石製鏡である。

1は皿、底部は貼り付けの輪高台で、バチ形に外に開く。体部は丸味をもってたちあがり、口縁端部は丸くおさめる。白くすんだオリーブ釉を全面に施す。底部高台内側に目跡が5個残る。復原口径12.5cm、器高3.9cm。2は椀の底部破片。底部は削り出しの輪高台で高い。見込みに圓線をめぐらし、その内側に毛彫りによって草花文を描く。オリーブ色の釉を全面に施す。高台内側に4個の目跡が残る。高台径7.0cm。3は皿、底部は削り出しの高台。外側は垂直に、内側は斜めに削られ、疊付きの幅がせまい。外面の高台より上と内面に黄褐色釉が施される。釉の剥離が著しい。外底部に墨書きがあるが、残存状態が悪く判読できない。底径6.8cm。4、底部はあげ底の円盤状をなす。外面は下半が露胎になるものであろう。内面には青色の釉がかけられる。見込みに目跡2個が残っている。7、椀。底部は削り出しの輪高台。体部はふくらみ気味にたちあがる。見込みに段がある。オリーブ色の釉を全面にかけ、疊付のみ削り取る。見込みが4ヶ所に残っている。底径6.9cm。8、大型の椀。底部は削り出しの幅広の輪高台。黄味の強い青灰色釉を全面施釉した後、疊付のみを削り取る。見込みと疊付に細かい目跡が密に残る。底径10.4cm。9は灯籠で皿状の器形をなす。口縁端部は平坦。内面に粘土紐で灯台がつけられる。内外面共に淡オリーブ色の釉が施される。

5、小型の碗か、底部は削り出しの低い高台。体部は外傾しながらたちあがる。底部を除いた全面に黄白釉がかけられる。底径4.2cm。6は玉縁をもつ椀であろう。底部は蛇目高台。高台との境に段をもつ。高台外側から内面にかけて白色透明釉をかけ、後から疊付部分をヘラ削りする。高台内側にも釉滴がみられる。底径6.3cm。

10は水注の注口部。太く短い。八角形に面とりがおこなわれる。注口内側に褐釉が残っているが、外面は剥離している。釉下に白化粧がみられる。

11は蓋。天井部にボタン状のつまみをつける。12は杯。断面方形の高台をつける。体部は底部から強く屈曲し、垂直にたちあがる。内外面ともナデ調整。

13、底部の高台が剥離している。体部は内傾気味にたちあがり、口縁部が外反し、端部は尖り気味におさめる。器面が荒れていて詳細は不明。

14は石製風字鏡である。粘板岩様の堆積岩が利用されている。海部の壁にあたる部分の破片。全体によく研磨されていて、上面に軒平瓦様の文様が彫り込まれる。文様は縁どりした内側に、珠文7個を浮彫りにしているが2個は剥離している。また珠文の頂部にはきわめて浅い線刻で渦巻文が施されている。

⑩ S D - 07

a. 造構 (Fig.19)

II区の中央部に検出した溝である。溝幅1.2~1.8m、深さ25~50cm、断面V字形をなす。東にむかって深さをましている。主軸方向をN-45°-Eにとる。S B-11, 15, 16, S D-06の方向とほぼ一致することは注意される。

S D-07の部分の土層断面は、第1層、地山の頁岩風化土を含んだ赤褐色粘質土層、厚さ40~60cm、江戸時代の整地層。第2層、暗茶褐色粘質土層で、鴻臚館時代の遺物を含む。第3層以下がS D-07の埋土である。第3層、茶褐色粘土層。第4層、黄褐色粘質土層。第5層、頁岩風化土の粒子を含んだ茶褐色粘土層。第6層、明褐色粘質土層。第7層、頁岩風化土の粒子を多量に含む黄褐色粘土層となっている。

この溝から出土する遺物は量がきわめて少ない。

b. 出土遺物 (Fig.20-1)

量的に少なく、瓦類、青磁器類が若干ある。また鶴尾かと思われる破片が1点出土している。

1は青磁器碗、底部はあげ底の円盤状をなす。体部下半は露胎で、外面の上半部と内面に青

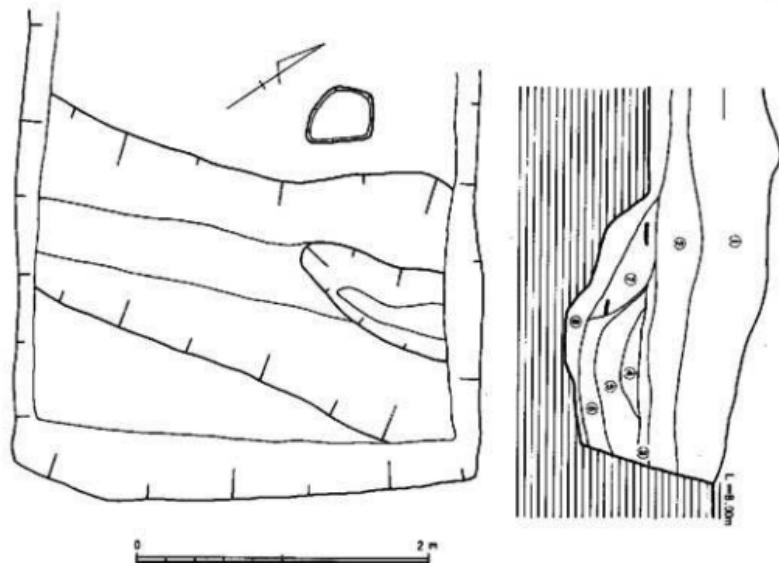


Fig.19 SD-07実測図

4. 第3次調査の概要

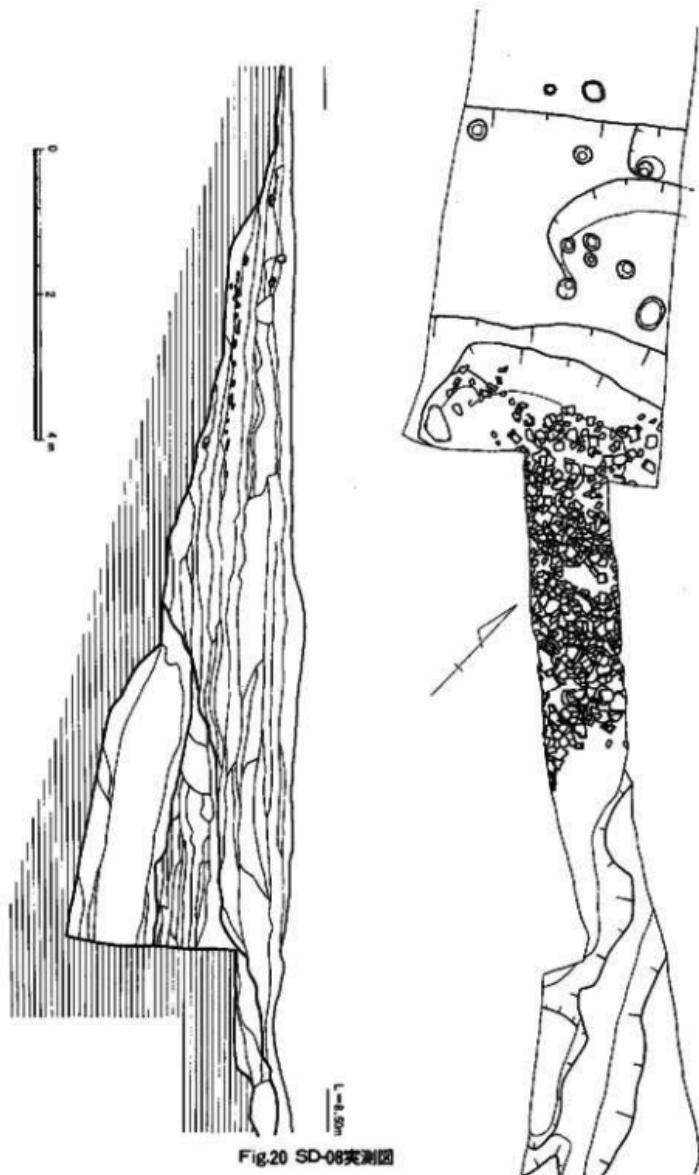


Fig.20 SD-08実測図

灰色の釉がかけられる。底部に釉滴がある。見込みに目跡が1ヶ所残っている。

⑫ SD-08

a. 遺構 (Fig.20)

II区の北端近くに検出した溝状の遺構である。遺構が大きいことと発掘区がせまいため、詳細は明らかにすることは困難であるが、検出した各所の所見からすれば、東西溝と南北溝の接点、すなわちコーナー部分にあたっていると推測することができる。溝底にコーナーの一部になる部分が検出されている。調査区内で検出した東西溝は約3m、南北溝は約15mである。これから推測できる溝幅は11m前後、深さ約1.7mの大溝となる。溝断面は皿状をなしている。溝の肩は北側で頁岩の岩盤、南側では整地層となっている。このことは、SB-11やそれより

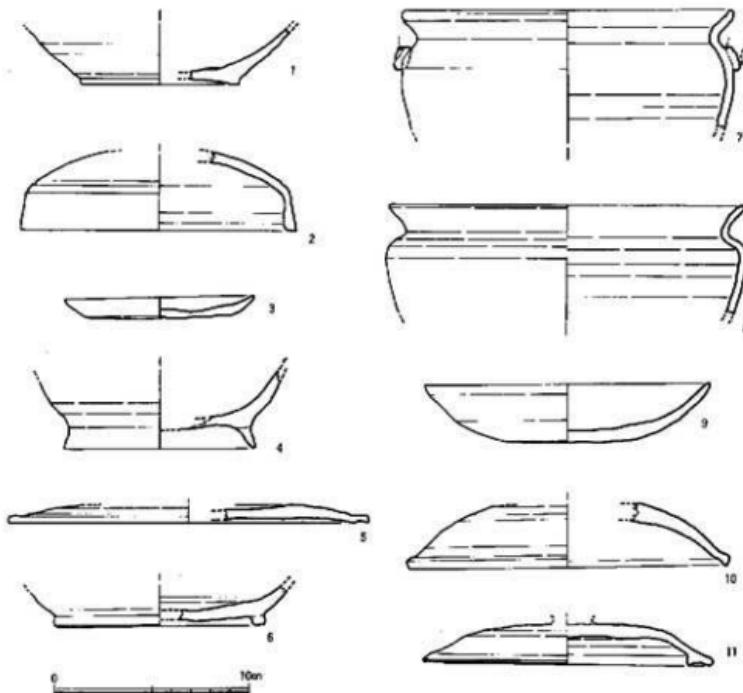


Fig.21 SD-07.08出土遺物実測図

4. 第3次調査の概要

北側の土層観察からして、SD-08とSB-11の間に谷が存在していることを証明している。このことはこの部分の土層断面で読みとることができる。

土層は大きく三大別できる。下層は南側の岩盤に接した部分の約1mは谷に流入堆積した自然堆積層である。灰褐色粘質土層を主体としている。6世紀中頃から後半にかけて須恵器が出土する。筑紫船造営以前に後期古墳等の築造があったと推測される。次は、筑紫船造営に伴う整地層である。厚さ1m前後、谷中央に向って順次厚くなり、厚い所では数m以上になるとみられる。岩盤の頁岩風化上を主体とし、版築状に固められている。上層が溝埋土となる。流れ込みによる自然堆積層。20数層に分離できるが、遺物のあり方等から、5層に大別できる。第1層は茶褐色粘土層を基本とするもので、瓦の小片を含む。第2層は灰褐色粘土層を基本とし、多量の瓦類が存在する。第3層、遺物をあまり含まない間層となる。明灰褐色粘土層。第4層、砂質の灰褐色粘質土層を基本とする。多量の瓦類が堆積する。瓦類はほとんどが鴻臚館式である。第5層、黄褐色粘土層を主体とする。

b. 出土遺物 (Fig.21)

多量の瓦類、青磁器、白磁器、須恵器、土師器、新羅陶器などがある。2、7、8が青磁器、3、4、9が土師器、5、6、10、11が須恵器である。出土層位は先の大別した層位で、2～8が第4層、9～11が第5層である。

2は合子蓋、天井部と口縁部の境に段があり、沈線をめぐらす。天井部はヘラ削り調整、口縁端部は平坦に仕上げる。口縁端部を除いた全面に淡オリーブ釉が施される。口径14.0cm。7、8は双耳壺と考えられる。口縁部は頸部で屈曲し、外反する。7は口縁端部が上方につまみあげられる。肩部が張り、体部最大径は上方にある。7は横耳がつくり、8は耳の形の形状不明。7、8共に全面施釉される。7は白味をおびた黄褐色釉、8は黄青色釉であるが剥離が著しい。7は復原口径16.5cm。8は18.0cm。

3は小皿、底部はヘラ切り、器面が荒れており詳細不明。口径9.6cm。器高1.1cm。4は杯、高台は高く、バチ形に外にひらく。体部は外傾しながら丸味をもってたちあがる。底部径9.7cm。9は皿、底部、体部下半は丁寧なヘラ削り、他はヘラ研磨と思われるが判然としない。口径14.4cm。器高3.0cm。

5、10、11は蓋、6は杯である。5は口縁端部がわずかに下方に屈曲し、端部は尖る。偏平である。内外面共にナデ調整。口径18.3cm。6、底部は断面方形の高台を貼り付ける。体部は丸味をもってたちあがる。底径10.6cm。10は口縁部が外へ張り、端部はわずかに下方にひきのぼされる。天井部は丸味をもつ。天井部の1/2がヘラ削り調整で他はナデ調整。口径15.0cm。11は天井部につまみがつくりが剥離している。口縁部と内面のかえりはほぼ同じ高さである。天井部の1/2がヘラ削り調整、口径14.8cm。

5. 第4次調査の概要

(1) 調査の概要

昨年度の平和台野球場外野スタンドの改修工事の試掘調査を受けた本格調査の一年度目である。鴻臚館の広がりや遺存状態が全く不明な時点であり、その探査を兼ね平和台野球場周辺に調査区を3ヶ所設定した。

第1調査区は平和台野球場南側、テニスコートの北側にある緑地帯、第2調査区は平和台野球場の南西部の野球場の周回道路部分、第3調査区は平和台野球場の北西部の周回道路部分である。

第1調査区では遺構の残存状態が比較的良好であることが判明。この地区を本格調査の対象として拡張した。第2調査区は兵舎の建設で擾乱が激しく、地山面では築城にかかる削平がみられ、鴻臚館関連遺構は検出されなかった。第3調査区は上層に江戸時代の礎石を上下2面に確認した。またその下層に鴻臚館時代の遺物を検出したが、調査区がせまく、また、深いために遺構は検出していない。なお、鴻臚館跡調査と併行して実施した福岡城堀清化工事に伴う堀の確認調査で、大濠公園側（城の西側）の数ヶ所のトレンチで古代の須恵器数片、南側トレンチの1ヶ所で平安時代の瓦数片、またテニスコート南側のトレンチでは多量の鴻臚館時代の遺物と共に包含層を検出した。これと従来の知見を総合すると、鴻臚館に関連する遺物は福岡城内全域に広がっていることが判明した。

以下、第1調査区の概要をみてみよう。この地域には樹木が多く、当初はトレンチ調査法で行っていたが、各遺構の間通性が把握困難であったため、途中、都市整備局と協議し、樹木の移植を行い調査区の確保をついた。調査面積は約1000m²。

検出遺構は大型の礎石建物2棟、ゴミ穴として使用された土坑、瓦溜の土坑、製鉄遺構、鋳造構、地下式横穴、江戸時代の大型土坑、井戸等がある。

大型建物はいずれも南北棟で、乱石積みの基壇をもち、両側に雨落ち溝がある。西側の建物は基壇幅9m(30尺)で梁行2間(6m=20尺)桁行9間(27.3m=91尺)を検出した。昭和26年の第1次調査で5個の礎石列が調査されていた建物と同一である。今回の調査では、すでに4個の礎石が失われ、現存するは1個のみであったが、礎石の根固め穴は良く残っていた。ただし、東側の礎石根固め穴は瓦溜りなどがつくられ、部分的に判明するのみである。この建物は2ヶ所に間切りがある。東側建物は西側建物と9m(30尺)離れて並列する。基壇幅15m(50尺)で、梁行4間(12.0m=40尺)桁行7間(21.3m=71尺)を検出した。身舎が2間で東西に廂がつく。一部柱間が3.3m(11尺)と広い所があり、その部分に排水溝がつくられ馬

5. 第4次調査の概要

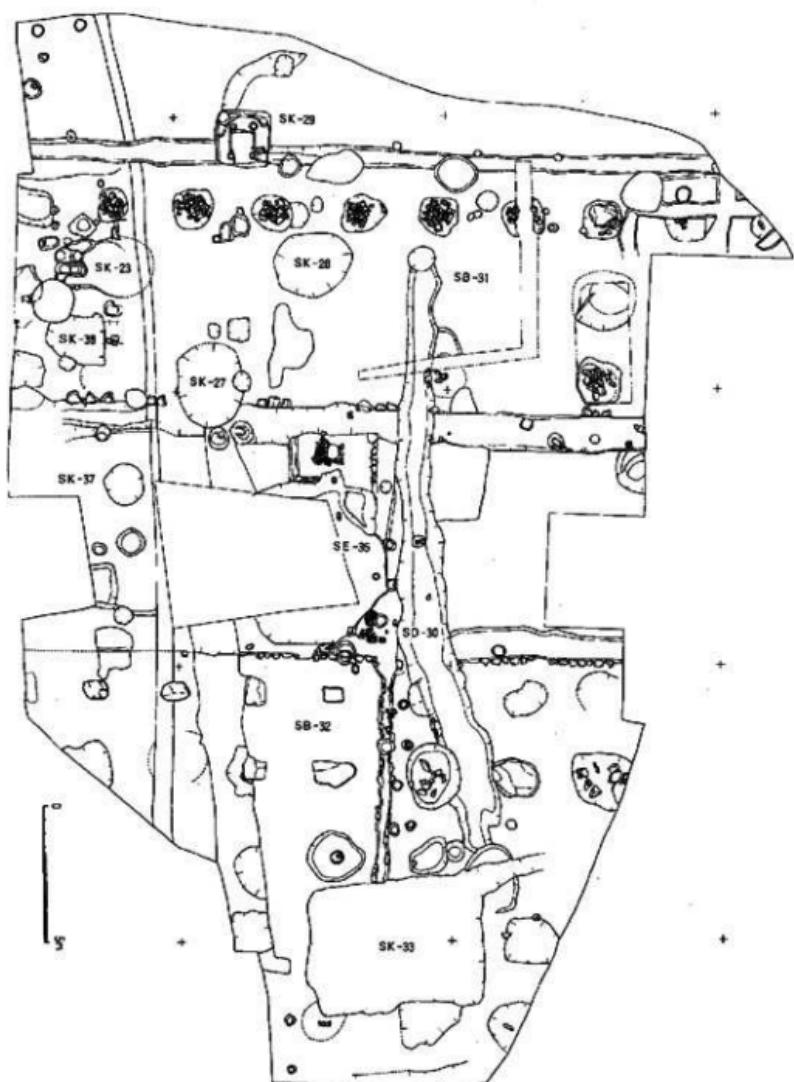


Fig.22 第4次調査区全体図

道となっている。礎石は残りがよく、7個が現存していた。礎石には花崗岩、玄武岩の自然石が利用されている。

瓦溜めの上坑は数ヶ所に認められた。鴻臚館式を主体とした多量の瓦が出土し、いずれも二次的に火を受けている。瓦溜めには焼土も多く混在しており、建物が火災にあったことを示しており注目される。

ゴミ捨てに使用された土坑には越州窯系青磁器がほぼ完形に近い姿で数十個体投棄されたものが存在する。また整地層からも越州窯系青磁器、白磁器など多量の中国陶磁器が出土し、改めて鴻臚館にもたらされた陶磁器の莫大な量を知ることになった。なお、本次調査でもイスラム陶器2点、中国董綠釉陶器(?)、唐三彩、新羅陶器などが出土し、その国際性を示している。

地下式横穴の検出も注意される。鴻臚館廃絶後、江戸時代の築城までの間この地がどのように利用されたかは全く白紙の状態であった。地下式横穴はこの間の資料を埋めるものである。

本次調査の最大の成果は、確実に鴻臚館として把握される礎石建物の検出であった。今回はその一部を検出したのみであるが、今後、その配置等がどのようになるか興味あるところである。

(2) 遺構と遺物の概要

① S B - 31

a. 遺構 (Fig.23)

第1調査区西側で検出した乱石積基壇をもつ瓦葺き礎石建物である。主軸をN-2°-Eにとる南北様である。東西の両側には雨落ち溝がある。西側の雨落ち溝は幅60~90cm、深さ10cm、東側の雨落ち溝は幅1.2m、深さは基壇石積みから30cmで、断面U字形をなす。雨落ち溝には瓦が多量に落ち込んでいる。その他若干の青磁器、白磁器、須恵器、土師器がある。基壇の石積みは花崗岩、砂岩の乱石積みであるが、西側は存在せず、東側のみにみられるが、東側も残存状態は悪く、5ヶ所数個ずつが残るのみである。残存するのは一段のみであるが、礎石の高さからすれば2段に積まれたものと推測される。基壇幅は9m(30尺)である。建物は梁行2間の6m(20尺)、桁行は9間の27.3m(91尺)を確認した。西側の礎石列は10個分を検出したが礎石の残るのは1個で花崗岩の自然石が利用されている。他はすべて根固め穴で、花崗岩、玄武岩、砂岩で根固めがおこなわれている。根固め穴は径1.4m前後の方形に近い掘り方である。北側はさらに調査区をのばし確認したが削平され延長部分は確認できない。南側はさらに延びると予想される。東柱は二ヶ所に存在し、間切りがおこなわれている。東側は他の遺構が切り合うため根固め穴は3個を確認しているのみである。柱間は3m等間であるが、間切り間の中

5. 第4次調査の概要

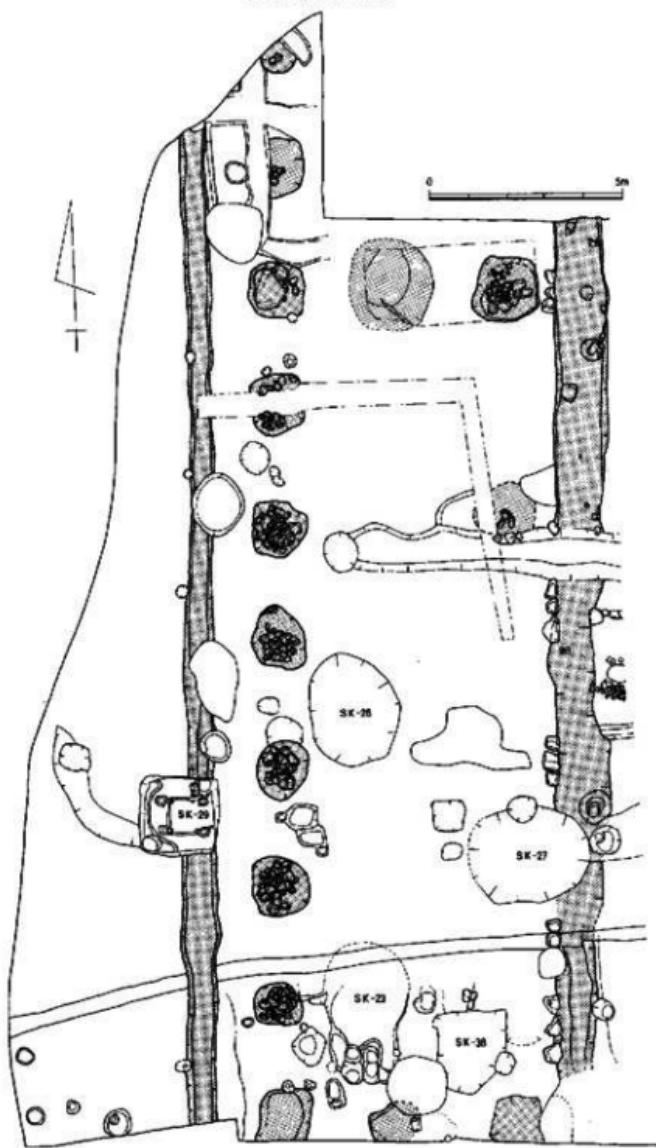


Fig.23 SB-31実測図

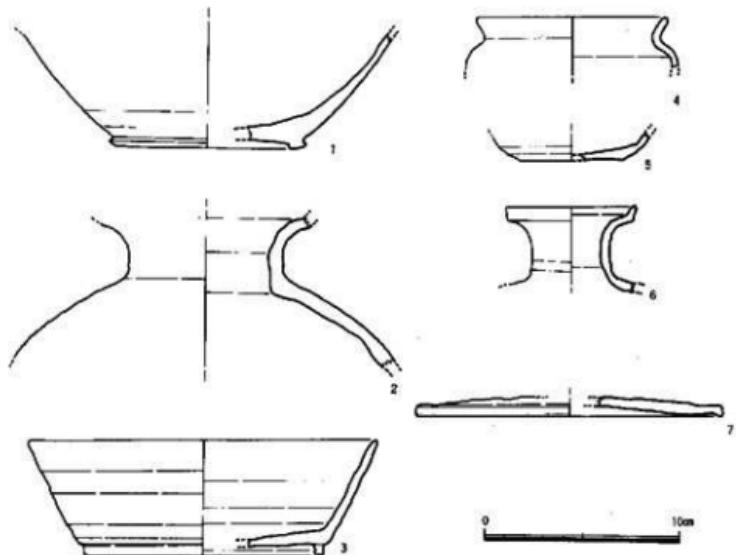


Fig.24 SB-31出土遺物実測図

央にあたる部分のみが3.3mと広い。そして、その部分の東には石列で方形の張り出し部がつくられている。石造りの内部は瓦敷きになっていて出入口部が作られていた可能性があるが、右列の面が逆にそろうなど不自然な点もあり確定できない。

S B - 31は他の遺構との重複関係が著しい。重複する遺構にはS K - 23、S K - 27、S K - 28、S K - 29、S K - 38、S K - 30があるが、展示館建設のため、調査を途中でやめているので重複遺構はさらに増えると思われる。重複遺構はいずれもS B - 31を切っている。これら重複する遺構で最も古いのはS K - 38である。S K - 38は多量の越州窯系青磁器が出土しており、いずれもが9世紀の末に近いものであることを考えれば、S B - 31は9世紀末以前の建物であることが知られる。

b. 出土遺物 (Fig. 24)

S B - 31の出土遺物は主に雨落ち溝、礎石根固め穴のものがある。雨落ち溝の遺物は大部分が瓦類で他の遺物は少量である。また、礎石根固め穴の遺物も大部分が瓦類が主で土器類は少ない。また礎石がほとんど抜かれていることから、直接的に建物の年代を決定する遺物としては不適当である。まだ未整理の状態であるので、図示した遺物がすぐに建物の年代を示すので

5. 第4次調査の概要

はない。出土遺物には瓦類の他、青磁器、白磁器、須恵器、土師器、食料残滓がある。

1、4が青磁器、5が白磁器、2、3、7が須恵器である。また、2が西側雨落ち溝、4、5、7が東側雨落ち溝、1、3、6が根固め穴出土である。

1、碗、底部は低い削り出しの輪高台、体部は外傾しながらたちあがる、疊付きと見込みに目跡の痕跡が残る。底部付近は露胎のままで、他は白味をおびたオリーブ釉を施す。底径10.2cm。4、小型の双耳壺、口縁部は頸部で屈曲し、やや外反する。口縁端部は丸くおさめる。肩が張る。耳がつくが形状不明、内外面にくすんだオリーブ釉を施す。復原口径9.8cm。

5は小型の皿、底部はヘラ切りの平底。底部以外の全面に青味がかった白釉を施す。底径5.2cm。

2は壺、頸部はまっすぐにたちあがり、口縁部は強く外反するが、端部は欠損し不明。肩が張る。体部外面は長方形の格子目タタキ、口頸部は横ナデ、内面は指頭による調整。器壁は厚く、やや粗雑なつくりである。3、杯、底部は粗い高台を貼り付ける。体部との境は平坦で体部は屈曲して外傾しながら直線的にたちあがる。内外面共ナデ調整。口径17.8cm、器高5.9cm。6は瓶、頭部はまっすぐにたちあがり、口縁部は大きく外反し、口縁端部は上方につまみあげられる。内外面ナデ調整。口径6.7cm。7、蓋。偏平で口縁端部が下方へつまみだされる。内外面共にナデ調整、口径15.8cm。

② S B - 32

a. 造構 (Fig.25)

第1調査区東側、S B - 31の基壇から9m (30尺) 離れて並列する乱石積基壇をもつ瓦葺き礎石建物である。主軸をN - 2° - Eにとる。東西両側に雨落ち溝をもつが、東側は明瞭でない。西側の雨落ち溝は幅1.0m、深さは基壇石積みから約30cm、断面U字形をなす。溝内には瓦が多量に存在し、わずかに須恵器や新羅陶器、青磁器が混在する。基壇の石積みはS B - 31同様に花崗岩、砂岩を利用した乱石積みである。西側の北半部は良好な状態で残存するが、南半部東側は破壊され存在しない。基壇幅は15m (50尺) である。建物は梁行4間の12m (40尺)、桁行7間の21.3m (71尺) を確認した。東西の両側に崩のつく建物である。西側崩の礎石列に4個、西側身舎の礎石列に4個（うち1個は埋め込まれている）の礎石を確認した。礎石には花崗岩、玄武岩の自然石が使用されている。他は根固め穴であるが、横固め石もほとんど抜き取られている。根固め穴の掘り方はまちまちであるが、ほぼ1.5m前後の円形である。東柱は相対した2ヶ所に検出している。その間は柱間が3.3mと他 (3m等間) よりやや長い。そして、その中央に側壁に花崗岩をたてた幅30cm、深さ20cmの基壇を横断する排水溝がつくれられている。この排水溝は礎石の高さからみて開渠であった可能性が強い。なお、この排水溝の下

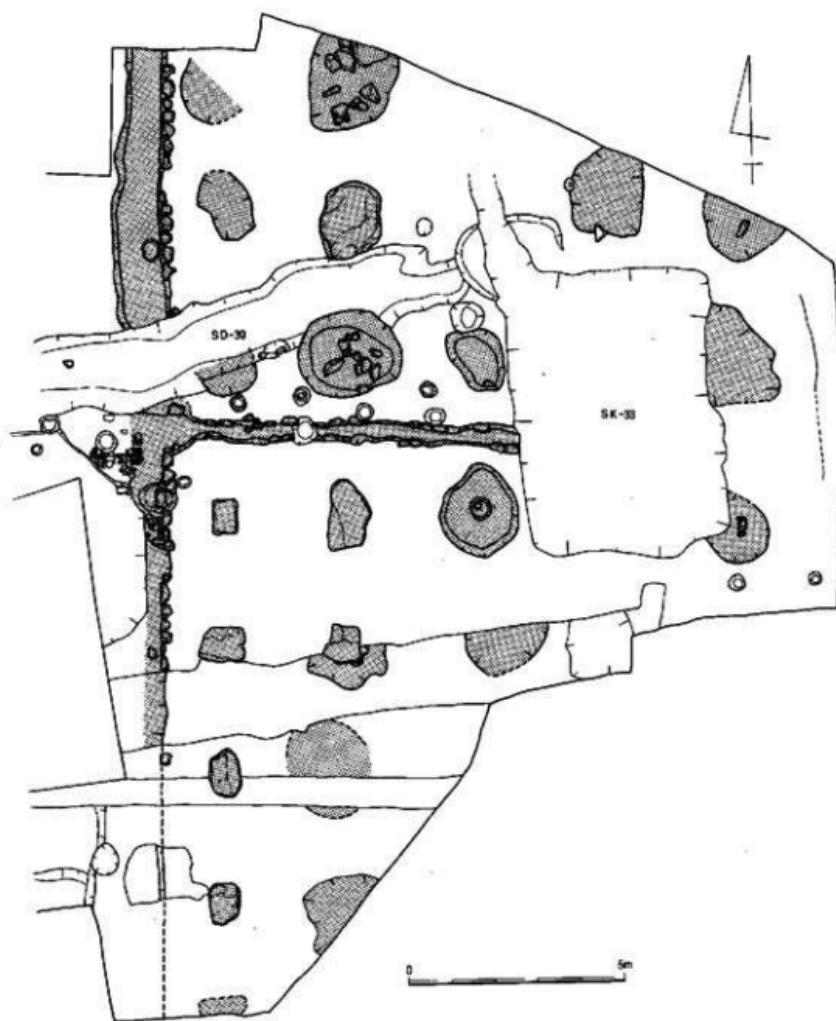


Fig.25 SB-32実測図

5. 第4次調査の概要

には瓦をたてた別の構が検出できる。発掘していないので、改修されたものか、それ以前のものかについては明らかにできない。

b. 出土遺物 (Fig.26)

SB-32に伴う遺物は雨落ち溝、排水溝、根固め穴に伴うものである。量的に多いのは瓦類である。軒瓦は鴻臚館式と平安時代のものが混在する。丸以外では青磁器、白磁器、土師器、須恵器、新羅陶器、灰釉陶器、唐三彩があるが、量的に少ない。

1～4が青磁器、5が白磁器、6～8が土師器、9～12が須恵器である。また5、9、11が内側雨落ち溝、1～4、6～8、10、12が根固め穴の出土である。

1は小型の椀。底部が蛇目高台で、体部は外傾しながら直線的にたちあがり、口縁端部は丸くおさめる。オリーブ色の釉を全面施釉する。壺付きに目跡の痕跡が残る。復原口徑13.0cm、器高5.3cm。2は椀。底部は削り出しの低い輪高台、体部はやや丸味をもってたちあがり、口縁端部は尖り気味におさめる。全面にくすんだオリーブ色の釉を施し、後に壺付きの部分を削

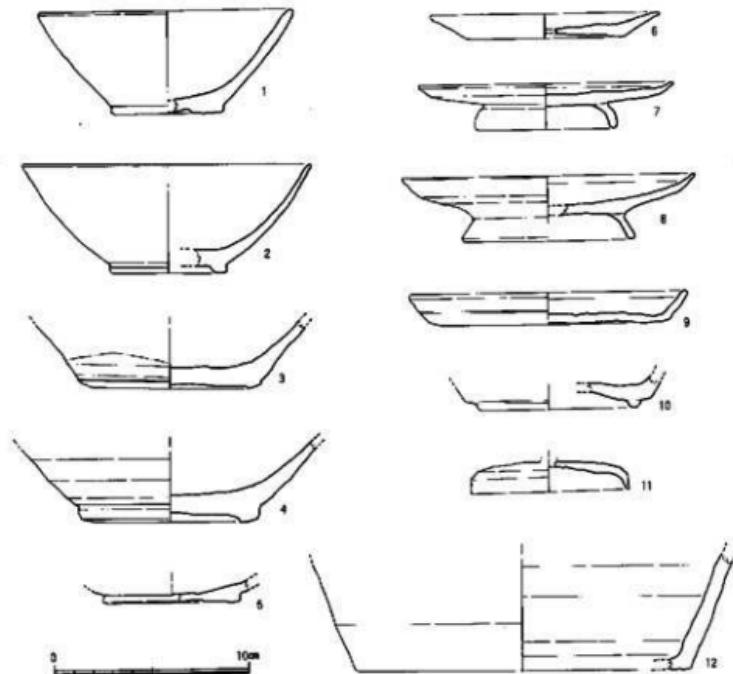


Fig.26 SB-32出土遺物実測図

第3章 考査の概要

る。見込みと疊付きに目跡の痕跡があり、見込み部分の目跡は削り落とされている。復原口径14.8cm、器高5.5cm。3、4は大型の碗。底部は共に削り出しの低い輪高台である。3はオリーブ色の釉を底部近くから内部にかけて施釉する。見込みと疊付きに目跡が残り、削りとられていない。目跡の数は12個である。4は青灰色釉を全面に施釉し、後で疊付きを削っている。見込みと疊付きに目跡が残る。底径は3が9.4cm、4が9.0cm。

5は碗。底部は削り出しの低い蛇目高台、白色釉を全面に施し、後、疊付きを削る。底部径は7.0cm。

6は小皿。底部はヘラ切り、体部は直線的に外にひらく。口径11.6cm。器高1.3cm。7、8は高台付皿、7は高台が高く内湾気味にたちあがり、端部は丸くおさめる。口縁部は屈曲しわずかにたちあがる。8は高台が高く、外方へひらく。皿部は7よりやや深い。7は口径13.2cm、器高2.3cm。8は口径14.9cm、器高3.3cm。

9は皿。底部はヘラ切り、体部はわずかにたちあがり、口縁端部は丸くおさめる。口縁内側に沈線をめぐらす。口径14.2cm、器高1.6cm。10は杯。高台は小さく断面は方形。底部径9.8cm。

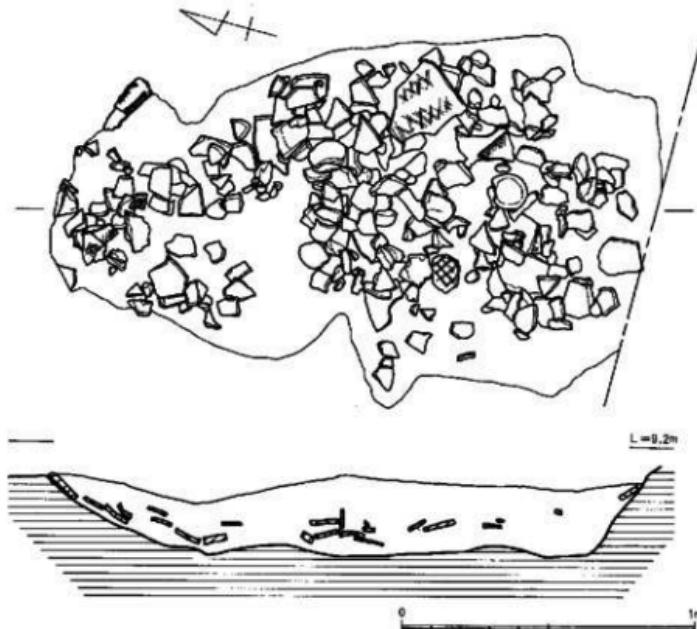


Fig.27 SK-24実測図

5. 第4次調査の概要

11は小さい短頸壺の蓋であろう。天井部は扁平で、口縁部は屈曲して下方にのびる、端部は尖り気味におさめる。天井部はヘラ削り。他はナデ調整。口径8.0cm。12は壺。底部は、平底である。底部壁が薄い。内外面共タタキ後ナデ調整。底径17.0cm。

③ SK-24

a. 遺構 (Fig.27)

第1調査区南側中央部、SB-31とSB-32の間に掘り込まれた大規模な瓦溜めであるSK-37の中に切り込まれた土坑である。SK-37が焼上混入の埋土であるのに対し、SK-24の埋土が黒色粘質土であるため、その判別は容易であった。

長径2.05m、短径1.2mの不整橈円形プランをなす。深さ25cmで断面は浅い皿状。多量の瓦をはじめ、青磁器、須恵器、鉄器が出上しているゴミ捨て用の土坑と考えられる。

b. 出土遺物 (Fig.28)

土師器1点を図示した。ほぼ完形の小皿である。底部はヘラ切り、板目圧痕がついている。器盤の保存状態が悪いが、内外面共ヨコナデ調整とみられる。胎土には砂粒を含み精良ではない。焼成は不良、色調は黄褐色～青灰色をなす。口径11.2cm、器高1.9cm。

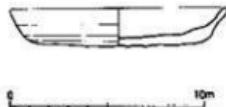


Fig.28 SK-24出土遺物実測図

④ SK-27 (Fig.29)

第1調査区西側、SB-31の基壇東側に重複して検出した瓦溜めの土坑である。基壇から雨落ち溝にかけて掘削されており、基壇石積みはこのため破壊され消失している。長径5.5m、短径3.1mの不整橈円形プランを有する。深さ等は展示館の展示として検出状態でおいてるので不明。土坑内には多量の瓦類が廻棄され、一部青磁器が混在している。瓦類は繩目タタキは少なく、斜格子目タタキが多い傾向にある。SK-37の瓦溜めと異なり、埋土には焼土が混在していないので時期を異にするものと考えられる。

⑤ SK-28

a. 遺構 (Fig.30)

第1調査区西側、SB-31の基壇内に検出した地下式横穴である。天井部が崩壊している。崩壊時期は比較的新しいと考えられ、崩壊したくほみの穴には周辺の鴻臚館関連の遺物の他、江戸時代の陶器片、瓦類が含まれている。遺構は深く作業に危険を伴うことと、SB-31の礎石根固め穴の崩壊の危険があったので玄室西半は木掘のままであるが、全形を推測するには支

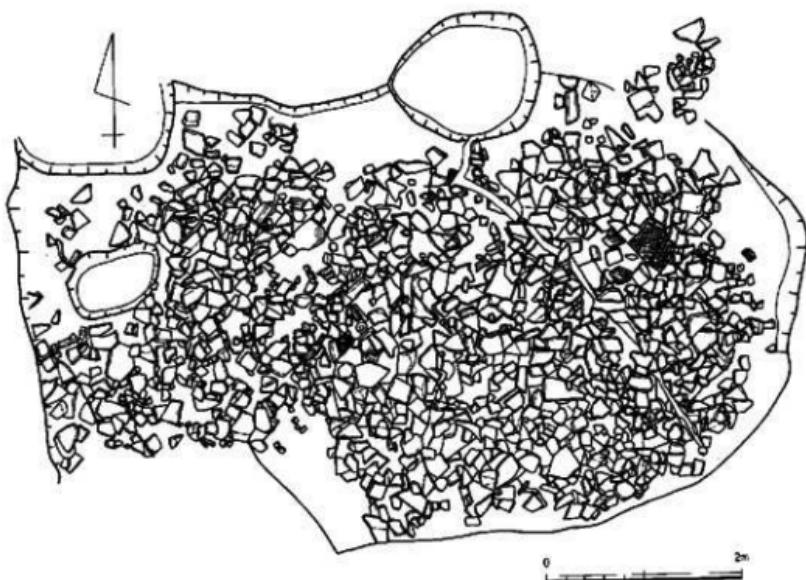


Fig.29 SK-27実測図

障ない。

豊塙は75cm×45cmの長方形プランで、垂直に1.55m掘り込まれている。豊塙の底は玄室部（南）に傾斜しており、深い部分は1.65mを測る。玄門部は崩壊しているので高さは不明であるが、あまり高くないと考えられる。壁は豊塙と同じ75cm、人間一人がやっと通れる程である。

玄室部はさらに一段深く掘り下げている。豊塙の平坦面から0.8mの深さがある。地表面から玄室床面までは2.5mを測る。玄室は前壁部のコーナーはほぼ直角に曲がるが、奥壁部は明確なコーナーがなく、丸くなる。玄室長2.5m、玄室幅は軸線で左右対称と考えると3.1m。隅丸長方形の平面プランをなすと考えられる。

床面には砂岩、花崗岩の礫が側壁、奥壁にそって数十個配されている。敷石という程のものではなく、散在的である。玄門部よりおりた玄室前面中央部の1m四方には礫はみられず、側壁にそった部分の幅0.9m、奥壁にそった部分の幅1.4mのL字形に配置されていることからみれば、一種の植台としての使用が考えられる。配石は未掘部も入れるとコの字形配置になるかもしれない。

5. 第4次調査の概要

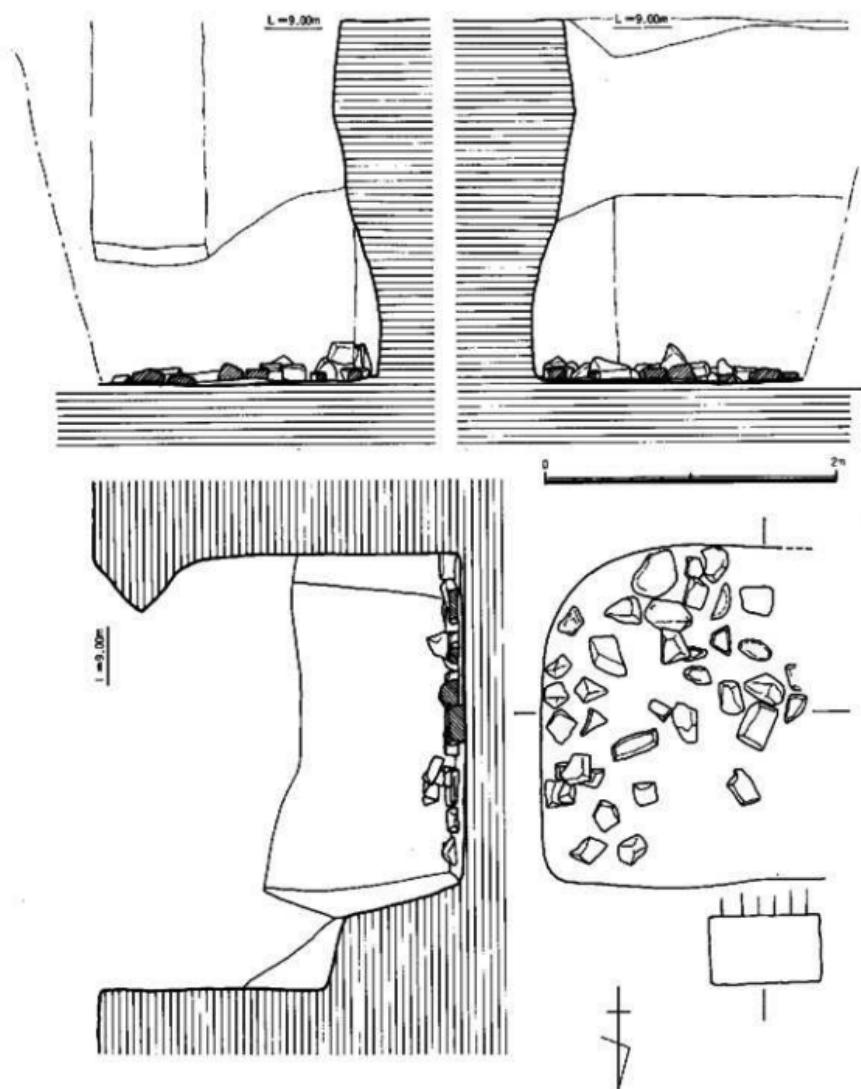


Fig.30 SK-28実測図

第3章 調査の概要

壁面は奥壁部が垂直に1.1mたちあがり、側壁はやや内傾しながら1mたちあがる。前壁は外傾しながら1.3mたちあがっている。それより上部は崩壊している。現存の上端部が天井部への移行点と考えることができる。床面から天井部までの高さは1.5m前後になると推定される。

b. 出土遺物 (Fig.31)

地下横穴に伴う遺物はきわめて少なく、床面に配置された砾に混じっていた石臼と青磁器片1点がある。他は天井部が崩壊したくぼみに流れ込んだ遺物で、鶴林館関連と福岡城関連の二者の遺物が混在している。

1～4は青磁器、5は石臼。1～3は崩落土中、4は周辺の整地層、5は玄室内出土である。

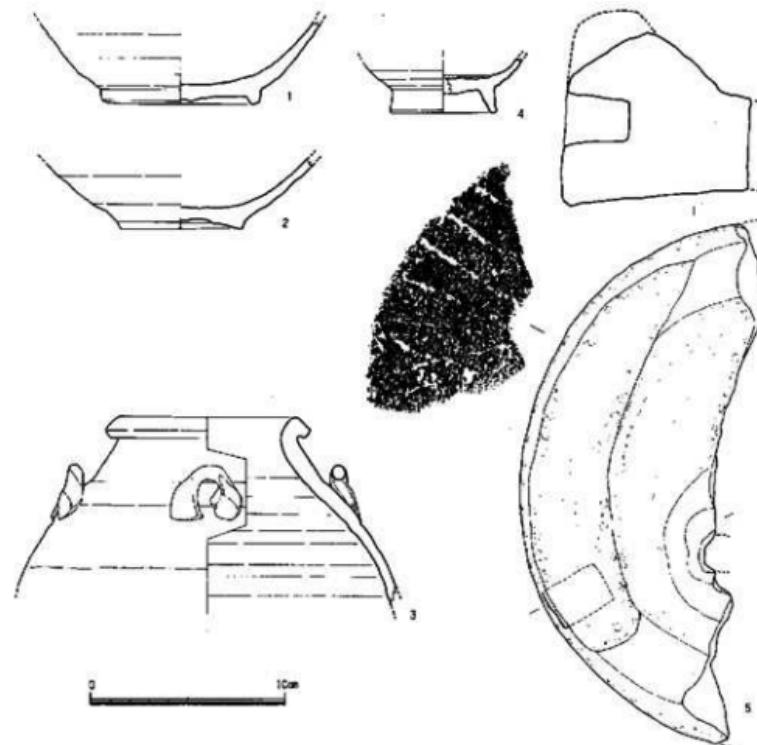


Fig.31 SK-28出土遺物実測図

5. 第4次調査の概要

1～3は腕、1は底部が削り出しの輪高台、体部は丸味をもってたちあがる。体部下半はヘラ削り調整。オリーブ色の釉を全面施釉する。その後、疊付き部分の釉をかきとる。見込みと、疊付きに目跡の痕跡があるが、きれいに削り取られている。底径8.2cm、2は底部は蛇目高台、体部は外傾しながら直線的にたちあがる。黄青色の釉を全面施釉する。疊付きに目跡が残る。底径5.4cm。3は小型品、底部は削り出しの高い高台、高台の基部に細い沈線をめぐらす。見込みに圓線がめぐる。オリーブ色の釉を全面に施釉する。疊付きに目跡が残る。4は四耳壺である。頸部は内傾しながらたちあがり、口縁部で屈曲して外傾する。口縁部は肥厚し玉縁状をなす。体部は長胴になると考えられ、体部最大径は中位にある。肩部に横耳が貼りつけられる。体部下半は露胎、上半部に青緑色の釉をかける。内面は露胎。口径10.5cm。

5は石臼の破片、上石の破片である。火成岩質の石を利用している。上面は皿状に凹められ、深さ4.5cm。対象物を入れる穴は径2cmで縁に片寄って穿たれる。側面には把手を入れる穴が穿たれている。穴は横2.1cm、縦2.5cm、深さ3.1cm。底面は下石に合せ、ややあげ底状をなしている。また、磨りつぶすため線刻が入れられているが、磨滅して判別困難である。復原径27.4cm、高さ10cmである。

⑥ S K - 29

a. 造構 (Fig.32)

第1調査区西端部に検出した梵鐘鋳造造構である。鋳造造構はS B - 31の基壇、雨落ち溝との切り合い関係があり、本造構がS B - 31を切っているので後出するのは明らかである。

鋳造造構は一辺2.05mの方形プランで、深さ50cmの土坑を掘ってつくられたものである。土坑壁は垂直に近い。埋土中に多量の木炭、鋳型片、炉壁片、瓦類が投棄されていた。特に底面近くは木炭が敷き詰められたように多量に存在した。また埋土途中においても木炭層だけで形成されている部分もある。鋳型は原位置にあるものではなく、すべてが破壊投棄された状態であった。

土坑の底面の構造は、北東と南西の対角線上のコーナーに径25cm、深さ約50cmの柱穴がある。この柱穴に柱をたてた場合、土坑の中心で組み合う傾斜で掘り込まれている。また西壁にそって幅10～30cm、深さ3cm前後の浅い溝が半円状にまわっている。中央部には一辺40cmの方形、深さ2～3cmの浅い掘り込みがあり、その四隅には径20～25cm、深さ10cm前後の柱穴が掘られている。柱穴の内側にはそれぞれ瓦片が1～2個配されている。他遺跡の鋳造造構から類推すると、中央部の方形の掘り込みは掛木の状態を示しているものと考えられる。対角にあるやや大きな柱穴は滑車をとりつけた柱をたてたものと思われる。

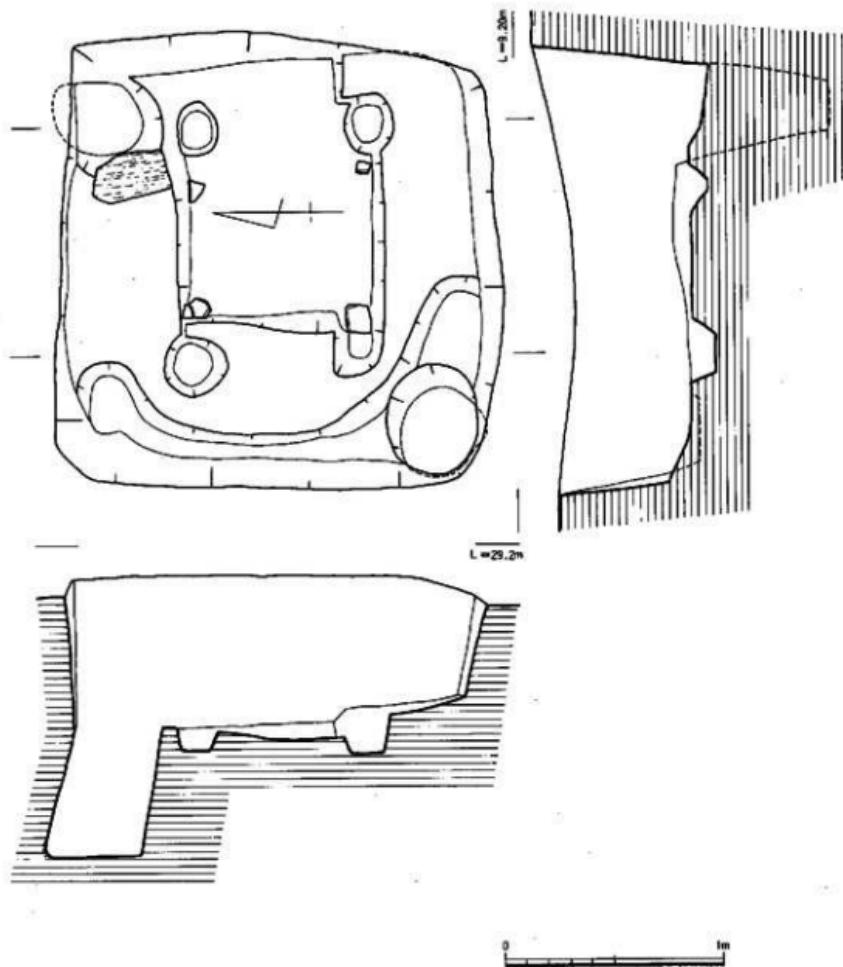


Fig.32 SK-29実測図

5. 第4次調査の概要



Fig.33 SK-2 9 出土遺物実測図

b. 出土遺物 (Fig.33)

炉壁片、鋳型片が圧倒的に多く、若干の瓦頬、青磁器、白磁器などが伴う。

鋳型は中子と外型の両者がみられ、接合復原すれば、ほぼ全形を知りうる可能性がある。鋳型は銀殻を入れた粘土を使用してつくられている。外型の文様は残りが悪く2本単位の突線部分、乳の部分が判別できる。詳細は復原後報告する。

1は青磁器碗。底部は削り出しの低い輪高台。高台と体部の境に沈線をめぐらす。全面にオリーブ色の釉を施す。後に疊付き部を削りとる。見込みと疊付きに目跡8ヶ所が残っている。底径8.6cm。2は白磁器の碗、小さな玉縁のつくものか、底部は蛇目高台、釉下に化粧がけがある。全面に黄白色の釉をかける。疊付きは後からヘラ削りを加え釉をかきとる。底径5.6cm。3は瓶の口縁部、頸部は直立し、口縁部は外反し両端部が上下に引きのばされる。焼成良好、新羅陶器か。口径5.4cm。

⑦ S K - 33

a. 遺構

第1調査区北端部において検出した土坑である。S B - 32の基壇と重複関係にあり、S B - 32を切っている。南北径6.5m、東西径4.5mの長方形プランをなす深さ約1.8mの土坑である。壁面はほぼ垂直に掘り込む。北西部コーナーから幅0.6m、深さ約1mの溝が北側にのびる。土層堆積は最下層が黒色土で江戸時代の瓦等若干を含む。その上の層は溝壁の整地層、遺構埋土が流入して堆積した黒褐色粘質土層、瓦頬、青磁器、イスラム陶器などを多量に含んでいる。上層は黄褐色粘土層となっている。歩兵第24連隊に伴うと考えられる柱穴（底に礎板をもつ）が上より掘り込まれているので、江戸時代に埋没したものと考えられる。樹木の関係で南半分のみを発掘したが、使用用途等については不明。

この調査区で検出した江戸時代と明確に判断できるのは、この遺構と現在ホタル用水として使用されている井戸掘り方のみである。当然建っていたであろう家老屋敷の建物が検出できないのは、この地域が後世に削平されていることを意味している。

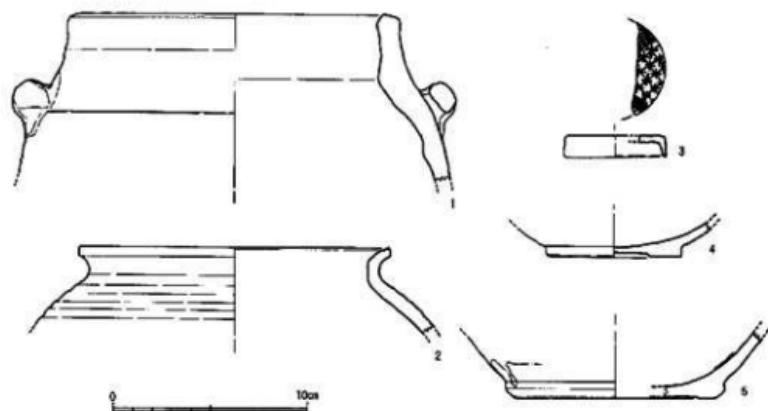


Fig.34 SK-33出土遺物実測図

b. 出土遺物 (Fig.34)

時代の決定となった遺物は量は多くないが、軒丸、軒平瓦数点と染付の陶器若干がある。他は鴻臚館関連の遺物で量的には多く、青磁器、白磁器、須恵器、土師器、イスラム陶器、瓦類がある。瓦では鴻臚館できわめて少ない、老司二式の軒平瓦が2点含まれていたことは注意される。1、5は青磁器、4は白磁器、2は須恵器、3は染付である。

3は小型の蓋、青白釉を施し、天井部に染付で文様を描く。1は双耳壺か四耳壺、体部と頸部の境は不明瞭。頸部が内傾しながら口縁部にいたる。口縁端部は平坦である。器壁が厚く粗雑なつくりである。耳は横耳である。外面と内面上半に黄白緑色の釉をかける。復原口径17.0cm。5は椀、円盤状をなす底部、底部に近い部分は露胎のままで、それより上部と内面に白緑色の釉を施す。見込みと疊付きに目跡が残る。底径11.2cm。4は碗、底部は蛇目高台、全面に白色釉を施釉した後、疊付きをヘラで削る。底径6.9cm。2は中型の甕、口縁部は外反し、口縁端部を上方につまみあげる。体部は胴張りになる。内外共横ナデ調整。焼成は堅致である。新疆陶器の可能性が強い。口径15.9cm。

5. 第4次調査の概要

⑧ S K - 38

a. 遺構 (Fig.35)

第1調査区の南西端に検出した土坑である。S B - 31の基壇と重複している。切り合い関係はにわかに決めがたいが、全体的に総合すれば S K - 38が S B - 31を切っていると考えられる。

土坑は東西径1.8m、南北径1.7mの不整形プランをなしている。深さは、展示館の現地展示のため検出状況で中断し、完掘していないので詳細不明。土坑内は青磁器、瓦類で埋められている。青磁器の器種は碗、皿が主体で、一部水注と蓋がある。いずれも完形に近い姿を保っている。個体数にして100個体前後があると考えられる。一部を除いて、すべてが二次的に火を受けていて変色、変質している。また、重ね焼きのための目跡がそのままの状態で残り、使用痕もみられないことから、器形、製作技法なども類似していて同一窯の製品と考えられることなどから、これらの青磁器は貿易品として鴻臚館に持ち込まれ倉庫等に収納、保管されていたものが、火災等の事故により破損し、一括投棄されたものと考えることができる。

b. 出土遺物 (Fig.36)

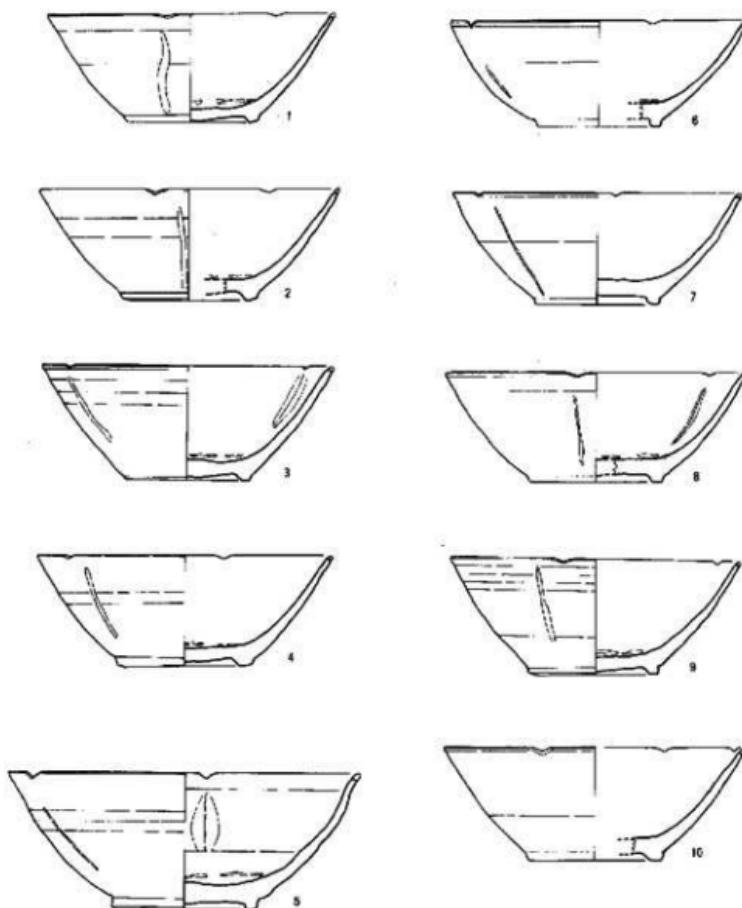
瓦類、青磁器が主体である。一部遺物は検出状態で展示しているため、調査当初、近世井戸に接した部分の青磁器をとりあげたので、それを紹介する。いずれも碗で、取り上げ分に限って二次的に火を受けていない。10点を図示した。

1～4は、ほぼ同形同大、同じ特徴を有し、釉薬の色調も同じである。底部は削り出しの低い輪高台。体部は高台から外傾しながら直線的にたちあがり口縁端部は尖り気味におさめる。口縁部には5ヶ所に刻み入れその下に縦の凹線を入れ五輪花に形づくる。黄色がかったオリーブ釉を全面に施釉する。疊付きは後から釉が削りとられる。見込みと疊付きにそれぞれ9個の目跡が残っている。使用の痕跡はみられない。1は口径14.6cm、器高5.5cm、2は復原口径15.2cm、器高5.7cm、3は口径14.6cm、器高5.8cm、4は口径15.0cm、器高5.7cm。5は他よりやや大型の碗。底部は削り出しの輪高台。高台と体部の境に沈線をめぐらす。体部は外傾しながら直線的にたちあがり、口縁端部は尖り気味におさめる。口縁部に輪花の刻みを5ヶ所に入れ、その下方に縦の凹線を入れ五輪花に形成する。外面の下半はヘラ削り、他は横ナデ調整する。オリーブ色の釉を全面に施釉する。疊付きは後からヘラで削り取られている。見込みと疊付きに9個の目跡がある。使用痕はみられない。口径17.8cm、器高7.0cm。6～7は、ほぼ同形同大、同じ特徴を有し、釉薬の色調も同じである。器形施釉の特徴は1～4と同様である。体部下半がヘラ削り調整、他はナデ調整。釉はオリーブ色をなす。見込み、疊付に9個の目跡が残る。使用痕はみられない。6は口径15.0cm、器高5.4cm。7は口径14.8cm、器高5.7cm。8は口径15.4cm、器高5.6cm。9は口径14.6cm、器高5.9cm。10は口径15.5cm、器高5.8cmである。



Fig.35 SK-38実測図

5. 第4次調査の概要



0 10cm

Fig.36 SK-38出土遺物実測図

④ S D - 30

a. 造構

第1溝充区の中央部を東西にわずかに蛇行しながら走る溝状の造構である。S B - 31、S D - 32と重複関係にありいずれも。S D - 30が切っている。溝はS B - 31の基壇中央部S K - 28（地下式横穴）の前面で西端が消え、東側はS K - 33付近で造構の切り合いが激しいために不明瞭になる。溝幅は東側で1.8m、西にいくにしたがい幅をせばめ、西端では約1mとなる。深さは西が浅く、東が深い、10~30cmで断面U字形をなしている。溝内は黒灰色粘質土層によつて埋っている。埋土中からは多量の瓦類と共に青磁器、白磁器、須恵器、土師器が混在して出土する。出土遺物にはほんと混じりがないが、擾乱されていない底より中世の陶磁器が出土し、時期的に下るものであることが判明した。用途は決めがたいが、形状からは丘陵上にみられる山道の凹んだ状態と類似し、時期的に考えて、地下式横穴に至る墓道かともみられるが確証はない。

b. 出土遺物 (Fig.37、38)

瓦類、青磁器、白磁器、須恵器、土師器、新羅陶器、中世陶磁器など多数がある。いずれも、まわりの整地層、造構より遊離、混入したもので、元来、S D - 30に伴うものは、きわめて少ない。Fig.36は上層、Fig.37は下層出土の遺物である。

上層青磁器はすべてが碗である。1は底部は貼り付けの輪高台、バチ形で外方にひらき端部は尖り気味におさめる。オリーブ色の釉を全面施釉する。高台内側に目跡が残る。底径6.9cm。2~4はいずれも削り出しの輪高台。2は高台と体部の境に段を有する。黄色をおびたオリーブ釉を全面に施釉し、疊付き部は後で釉が削り取られる。見込みと疊付きに目跡が残る。底径9.0cm。3は火を受け変色している。くすんだ青灰色釉を全面施釉、後で疊付き部の釉が削り取られる。見込みと疊付きに目跡が残る。底径9.6cm。4は高台と体部の境に段がある。体部に縦の凹線があり、輪花なることが知られる。くすんだオリーブ釉を全面に施し、疊付きは削り取られる。見込み、疊付きに目跡が残る。底径8.3cm。5は高台が低い。低部を除いた全面にくすんだオリーブ釉が施釉される。見込みに目跡が残る。底径10.2cm。8~12は円盤状をなす底部である。体部下半は露胎で、上半から内面にかけて施釉される。8は暗褐色の釉、疊付きに目跡がある。底径6.4cm。9は二次的に火を受け釉は剥離している。見込みと疊付きに目跡が残る。底径9.8cm。10は内面に化粧土をかけた後黄褐色釉をかける。疊付きに目跡が残る。底径6.6cm。11はやや白味をおびたオリーブ色の釉、見込みに目跡が残る。底径7.9cm。12は内面に化粧土、釉は剥離して、釉調は不明。底径10.1cm。

6、7は白磁器、6は皿、7は碗である。6、底部は削り出しの低い輪高台、体部は大きく外へひらく。器壁が薄い。見込みに沈線をめぐらす。底部を除いた全面に白釉がかけられる。

5. 第4次調査の概要

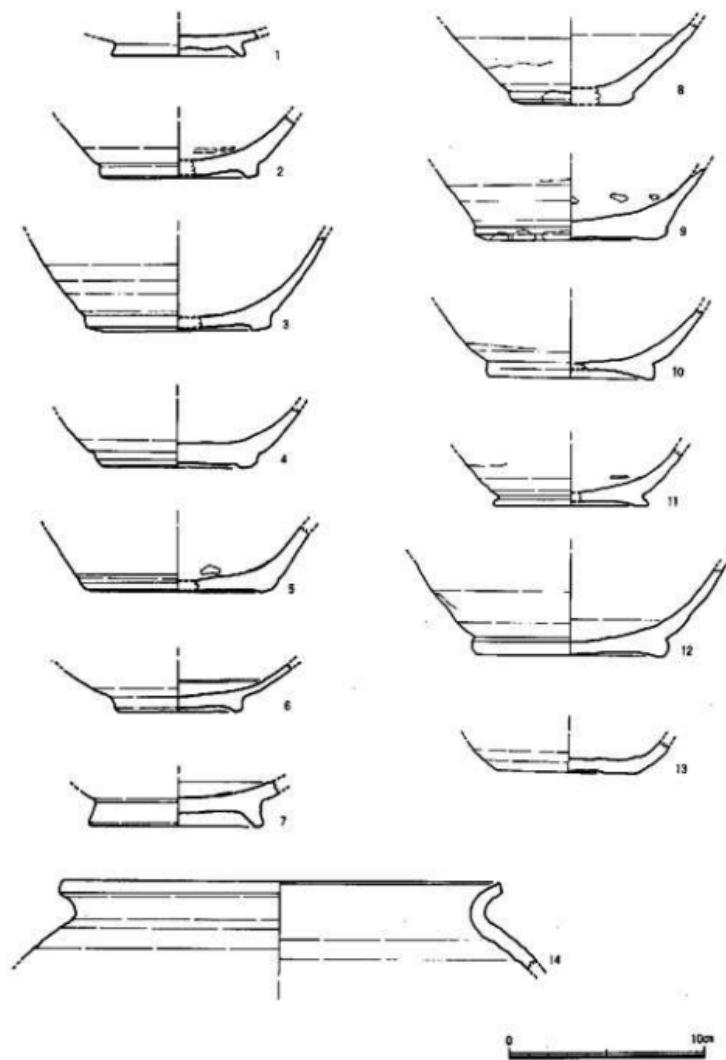


Fig.37 SD-30出土遺物実測図(1)

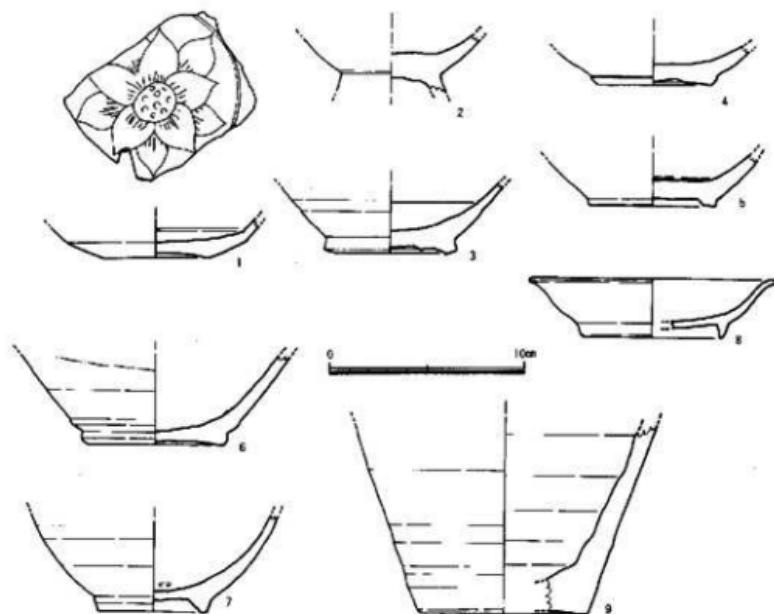


Fig.38 SD-30出土遺物実測図(2)

底径6.8cm。7は削り出しの高い輪高台、底部は除いた全面に白釉が施される。見込みに目跡が残る。底径8.9cm。

13は須恵器の杯、底部はヘラ切り。体部下半もヘラ切り調整、内面はナデ調整、底径7cmである。

14は新羅陶器の甕、口縁部は外反し、端部は上方につまみあげられる。内外面共ナデ調整で仕上げる。焼成は良好、灰黒色を呈する。

下層出土陶磁器 (Fig.37) は青磁器 (1～6、9)、白磁器 (8)、中世陶器 (9)を図示した。

1は皿、底部はあげ底状の平底、体部は外方に広がり、屈曲してたちあがる。見込みに沈線をめぐらし、内部に毛彫りで花文を描く。オリーブ色の釉を全面に施釉する。疊付きに6個の目跡が残る。底径5.5cm。2は高い高台あるいは脚台をもつ。全面にオリーブ色の釉を施す。3は削り出しの低い輪高台。体部は丸味をもってたちあがる。体部下半はヘラ削り調整、上半から内面にかけてくすんだオリーブ釉をかける。見込みに沈線をめぐらす。底径6.8cm。時期

5. 第4次調査の概要

的に下るものとみられる。4は底部が蛇目高台。オリーブ色の釉を全面施釉し、疊付きの釉は後で削り取られる。見込みと疊付きに輪状の目跡が残る。底径6.5cm。6は円盤状の底部、体部下半は露胎で、上半から内面にかけて白青緑色の釉をかける。見込みと疊付きに目跡が残る。底径7.5cm。9は四耳壺の底部か、平底で体部は外傾しながら直線的にたちあがる。外面はヘラ削り。外周に薄い青色の釉をかける。底径8.7cm。

8は白磁器の皿、全体に薄いつくりである。底部は貼り付けの輪高台でやや内傾する。口縁部は外反する。全面に白色釉をかけ、疊付きは後で削り取られる。口径12.6cm、器高3.0cm。

7は碗、底部は削り出しの輪高台、体部はふくらみをもってたちあがる。洗成はあまり。全面に不透明白色釉をかける。底径6.0cm、中世の陶器で高麗のものか。

⑩第2調査区の概要 (Fig.39)

半和台野球場の南西側、二の丸東門より北に20m離れた周回道路に北向きに幅1.5m、長さ22mのトレンチを設定、さらに選構の関係から北側11mを東に1.5m拡張し幅3mとなる調査区を設定した。

調査区の土層は以下のようになっている。第1層、約15cmの厚さで、現在の道路面のバース層、第2層、真砂土、第3層、灰褐色土、第4層、炭化物を主体とした黒色土、太平洋戦争による火災層、第5層、灰を含んだ暗褐色粘質土層、第6層、黒褐色土、以上が明治

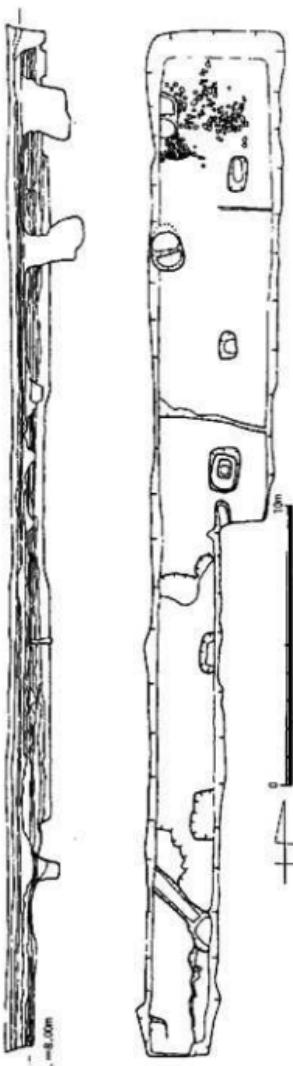


Fig.39 第4次、第2調査区実測図

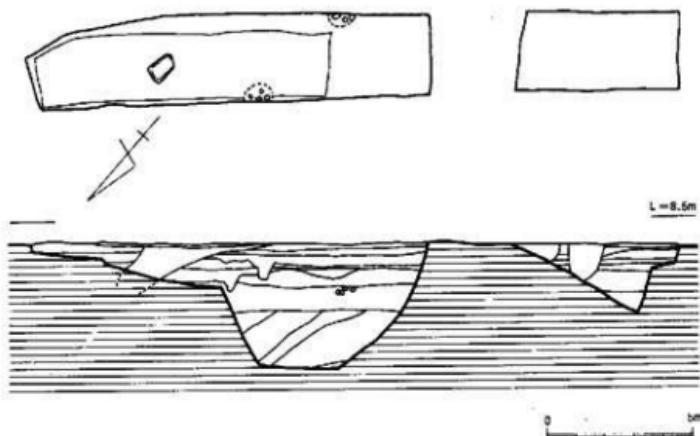


Fig.40 第4次、第3調査区実測図

時代以降の土層である。第6層以下は江戸時代築城の盛土である。赤褐色粘質土層と砂質土層の互層となっている。地山は第三紀頁岩の岩盤となっている。

検出した遺構はいずれも江戸時代以降に限られ、鴻臚館関連の遺構は削平され消滅している。地山面は南側が高く、階段状に削り出されて南側に低くなっている。階段状になっているところは2ヶ所で、段差は25cmと15cmである。平坦面の幅がわかっているところで9mある。東門の階段の延長部分でその傾斜も良く一致しているので築城時における工事に關係してつくられたものと思われる。トレンチの北側で地山直上に粘土を敷き瓦、繩が敷きつめられた部分が幅2mで存在する。何のために行われたものかは明らかにできない。また南端近くでは幅40cm、深さ60cm、断面逆台形の溝一条が確認されている。時期は江戸時代。

明治時代以降の遺構として、兵舎の遺構がある。兵舎の基礎は南北にならんでいる。柱間は3.5mで1ヶ所25m部分がある。また北側に片寄って瓦溜め二ヶ所があり、兵舎に使用された瓦類が廃棄されている。

①第3調査区の概要 (Fig.40)

平和台野球場の北西部の周回道路に設定したトレンチである。トレンチは幅1.5m、長さ13m、途中水道管が埋設されていたので、2mの範囲は発掘していない。この調査区の土層は以下のようになる。第1層、パラスを含んだ灰褐色土層、第2層、灰~黒褐色砂質土層、第3層、黒

6. 第5次調査の概要

褐色砂質土層、第4層、赤褐色粘質土層、第5層、黒褐色砂質土層、第6層、地山の風化土を多量に含んだ黄褐色土層、第7層、明赤褐色土層、第8層、赤褐色土層、第9層、暗赤褐色土層、第10層、黒褐色土層、第11層、暗赤褐色土層、第12層、黒褐色土層となっている。第6層と第7層との間には不整合面が存在する。

遺構は江戸時代の礎石と礎石を置いた根固め穴がある。礎石、根固め穴は上下二面に認められる。第7層以下は築城時に埋められた土である。この上層中には、奈良、平安時代の瓦が包含されている。さらに下層に鴻臚館関連の遺構が検出される可能性があるが、深いために中断し、将来の調査にゆだねることにした。

6. 第5次調査の概要

(1) 調査の概要

第4次調査の成果から、今次調査は第4次調査区の南側のテニスコート部分と、南側上墨の下の推定南門部を対象とした。調査区の面積は1155m²、表土下すぐに遺構を検出した。残存状態は第5次調査同様比較的良好であったが、調査区の南半は江戸時代の堀の掘削によって鴻臚館関連遺構は深いものを除いて削平されていた。

検出した遺構は第4次調査で検出していったSB-31、SB-32の延長部と新たにSB-31とSB-32を結ぶような東西棟建物SB-50、これらの建物に先行する布堀りの柵列、ゴミ捨てのための土坑多数である。

SB-31の延長部分は桁行6間分を検出した。花崗岩の礎石1個が残存する。残存状態はきわめて悪く基壇の石積み等はすでに失われ、南側は場に削平され、また基壇の中央部に江戸時代のゴミ穴が大きく掘り込まれている。SB-32は桁行2間分を検出した。SB-50は桁行7間分を検出した。現存する礎石は3個、いずれも花崗岩の自然石である。このSB-50は複廊の回廊もしくはSB-31、SB-32をつなぐ軒廊かと思われるが決め手を欠く。SB-31とSB-50との接する部分の基壇はSB-31の東側雨落ち溝と連絡して排水溝がつくられている。排水溝には花崗岩の板石をたてて溝壁としている。ゴミ穴用の土坑は多く、いずれも基壇と切り合ってつくられている。切り合い関係からみれば、いずれも建物より新しいものである。土坑内からは多量の青磁器が出土している。特にSK-56、SK-61では、SK-38同様に未使用の青磁器が二次的に火を受けて多量投棄してある。時期的に三者の土坑は同時期であることは出土青磁器が同一窯産の可能性が強いことからも推測でき、SK-56の下層とSK-61では出土陶磁器が互いに接合する。この時期に倉庫等が火災にあったことを裏付けるものである。

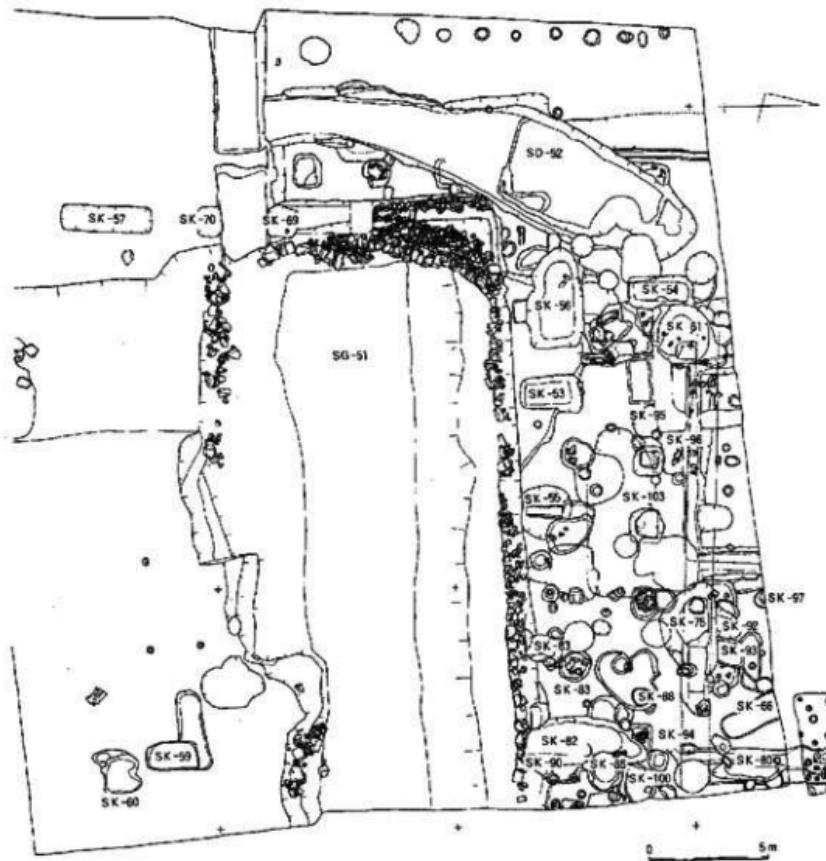


Fig.41 第5次調査区全体図

6. 第5次調査の概要

南門推定地の調査は、昨年度堀の浄化工事に伴って設定したトレーナーを拡張し、土壌下に基壇らしい高まりとそれに伴う雨落ち溝を検出した。雨落ち溝は基壇のコーナー部分とそれに連接する回廊もしくは築地に伴う雨落ち溝と考えられる。検出面は上塗下約3mの面である。これを基準にして土壌の北側、および西側にトレーナーを設定し、基壇の規模の追求につとめた。遺構面が深く、また樹木があるためにトレーナーの設定はかならずしも目的とするところには設定できなかったが、それぞれのトレーナーで雨落ち溝および段落ちを確認できたので規模を知ることは可能である。基壇は東西21m、南北12mで位置からすれば南門と推定できる。しかし、南門基壇としては疑問もあるので将来全面調査して詳細に検討する必要がある。

第5次調査はSB-31、32の延長部分を確認し、さらにそれらをつなぐSB-50の検出、南門と推定される基壇など成果があがったが、調査区の南半部が江戸時代の堀の掘削によって破壊され、肝心な所が把握できなかつたのが残念である。

(2) 遺構と遺物の概要

① SB-31

a. 遺構 (Fig.41)

調査区の西側に検出した建物でSB-31の延長部分にあたる。他の遺構との重複が著しく、その残存状態は良好でない。西側の礎石列、雨落ち溝は、江戸時代のゴミ穴であるSK-52に大きく破壊されている。検出した礎石根固め穴は1ヶ所であるが、昨年検出分から桁行7間分にあたる。また、東側礎石列は、SK-54、SK-61、SK-62、SK-56によって大部分が破壊され、礎石1個と根固め穴1個、昨年度検出から桁行2間分を確認にとどまる。共に南側は江戸時代の堀 (SG-51) によって大きく破壊されている。東側雨落ち溝はSB-51にそってL字形にまがる。SB-31とSB-50接する部分に幅10cm、深さ25cm、側壁に花崗岩の割石を用いた排水溝が約4mにわたって確認できる。構造的にはSB-32に検出した排水溝と同様である。

SB-31は第4・5次調査を総合すると、梁行2間 (6m) 桁行16間 (48.3m) 以上の長大な建物となる。

② SB-32 (Fig.42)

調査区東側にSB-32の延長部分を検出した。桁行2間分でいずれも礎石根固め穴である。基壇上に掘り込まれたSK-75と重複し、SK-75に切られている。西側雨落ち溝はSB-50との接点部分で西側にまがり、SB-50の雨落ち溝となる。SB-31の雨落ち溝と合せるとコ

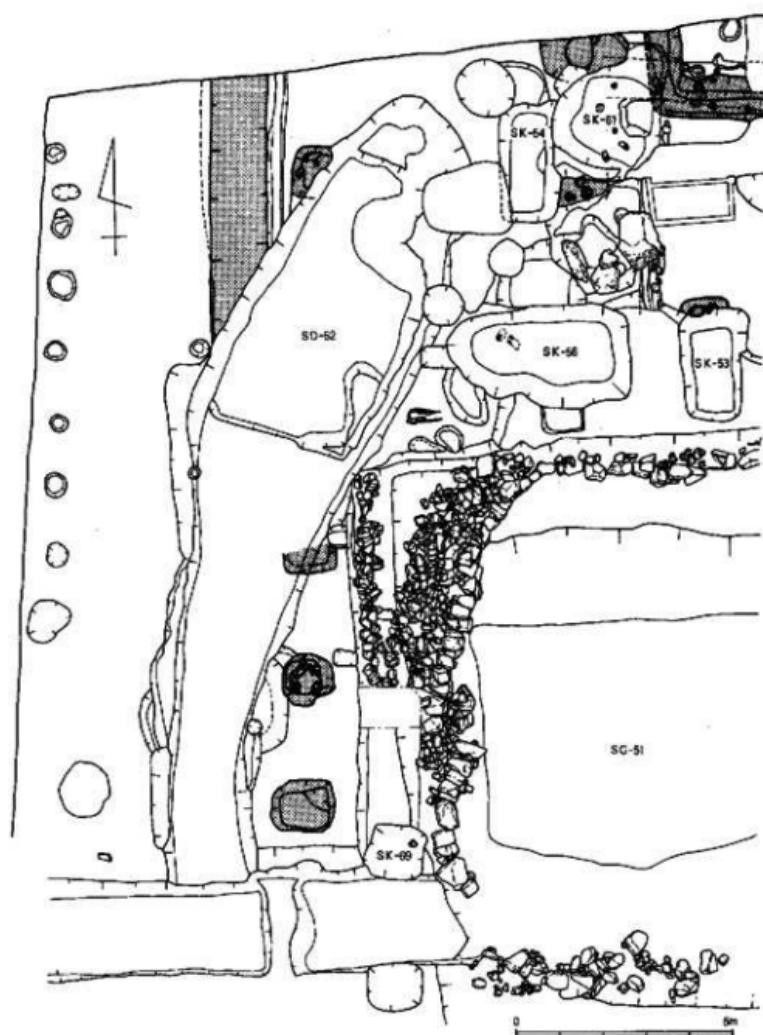


Fig.42 SB-31実測図

6. 第5次調査の概要

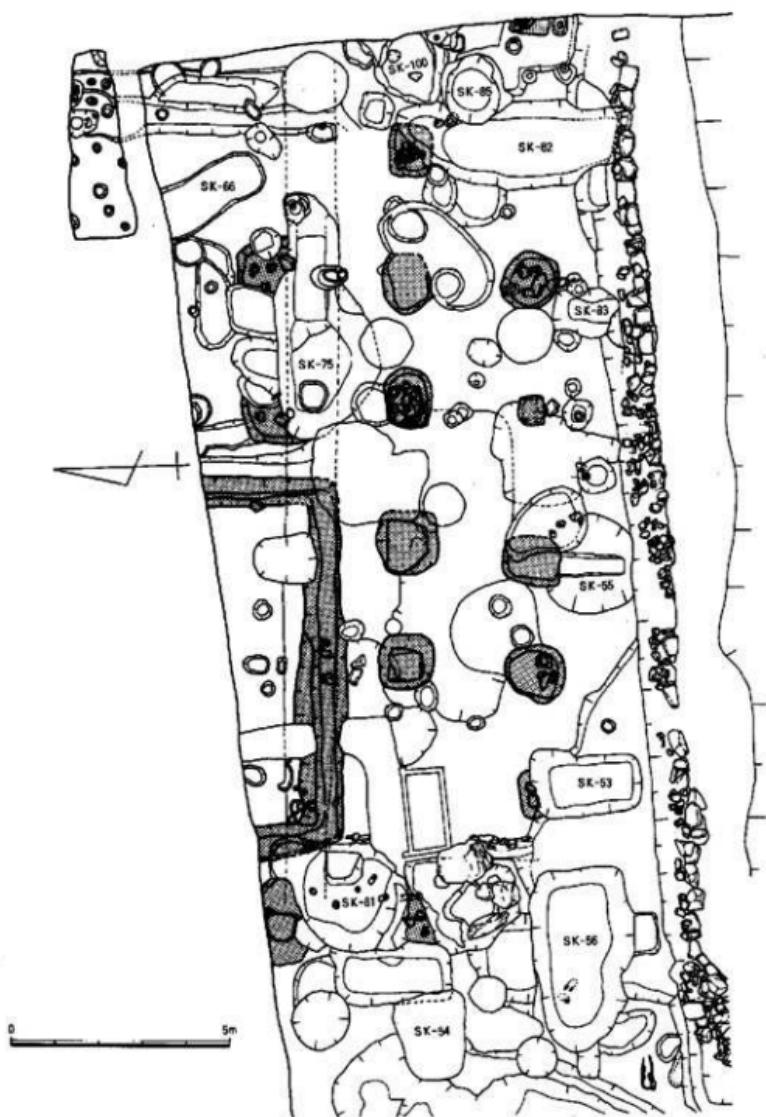


Fig.43 SB-32, SB-50実測図

字形になる。

第4次調査分と総合すると、SB-32は梁行4間(12m)桁行9間(36.3m)以上の長大な建物となる。SB-50の南側が、江戸時代の堀(SG-51)によって大きく削平されているので、SB-50とのあり方が不明で、さらに南側にのびるか否かは明らかにできない。

③ SB-50

a. 造構 (Fig.42)

調査区の北半に検出した東西棟の建物である。SB-31とSB-32を連接する建物で、回廊ないしはSB-31とSB-32を連なく軒廊であるかは、南側が不明であるため判別できない。よって、ここでは一応、回廊的な建物として説明を加える。

検出した造構は東西に2列に並んだ礎石ないしは礎石根固め穴である。礎石が現存するのは3個で、いずれも花崗岩が使用されている。礎石は $0.6m \times 0.6m \times 0.3m$ 、 $0.7m \times 0.65m \times 0.26m$ 、 $1.0m \times 0.8m \times 0.2m$ と大きさにばらつきがある。また、根固め石には花崗岩、砂岩の他玄武岩の板石も使用されている。検出した柱石列の桁行は7間分である。SB-31とSB-32にはさまれた部分には雨落ち溝が存在する。雨落ち溝は残存状態が良好な部分で幅約1m、深さ30cm、断面U字形をしていている。東側のSB-32とSB-50との間に排水溝が設置されたか否かは土坑が切り合うため確認できていない。また、南側には雨落ち溝が確認できないので、少なくとももう1列以上の礎石列が存在したことは疑いない。少なくとも梁行は2間以上であることが想定される。

b. 出土遺物 (Fig.43)

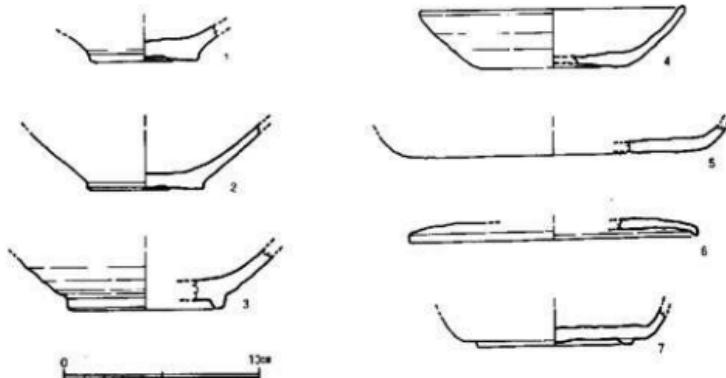


Fig.44 SB-50出土遺物実測図

6. 第5次調査の概要

雨落ち溝、根固め穴より出土した遺物がある。青磁器、白磁器、須恵器、土師器、瓦類がある。図示したのは7点で、1～3が青磁器、4、5が須恵器、6、7が須恵器である。1～3は根固め穴、4～7は雨落ち溝からの出土である。

1、2は楕、底部は蛇目高台をなす。体部は外傾しながら直線的にたちあがる。オリーブ色の釉を全面に施釉する。豊付きに目跡が残る。1は底径5.6cm、2は底径6.0cmを有する。3は楕。底部は削り出しの輪高台、体部は外傾しながらたちあがる。体部下半はヘラ削り調整。オリーブ色の釉を全面に施釉する。豊付きは後で釉が削りとられる。見込みと豊付きに目跡が残る。底径8.0cm。

4は杯。底部はヘラ切り、体部は外傾しながら直線的にたちあがる。口縁端部は丸くおさめる。内外面共に横ナデ調整、口径13.4cm、器高3.0cm。5は盤。底部はヘラ切り。器壁が荒れていて詳細は不明、底径15.4cm。

6は蓋。口縁部は屈曲し、下方にのび、口縁端部は丸くおさめる。天井部の内外面は横ナデ調整。口径15.7cm。7は杯、貼り付けの高台は低く、底部のやや内側にある。体部は屈曲してまっすぐにたちあがる。体部、内底部はナデ調整である。底径8.0cm。

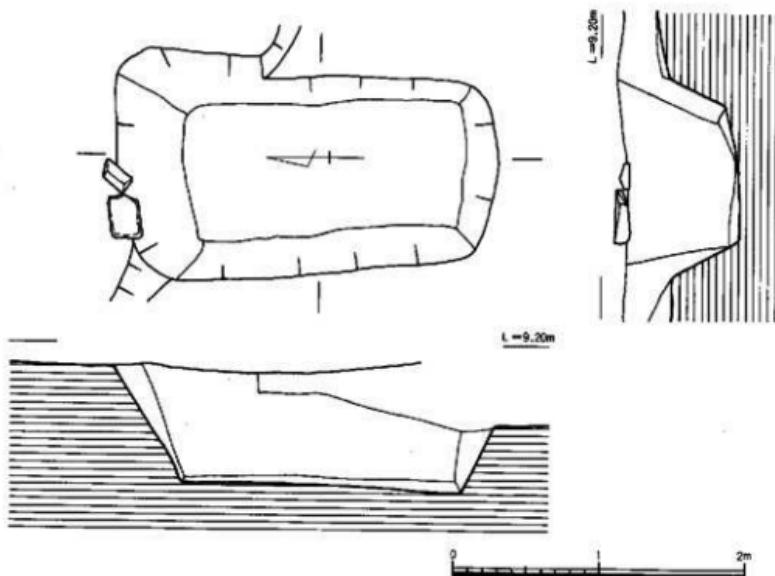


Fig.45 SK-53実測図

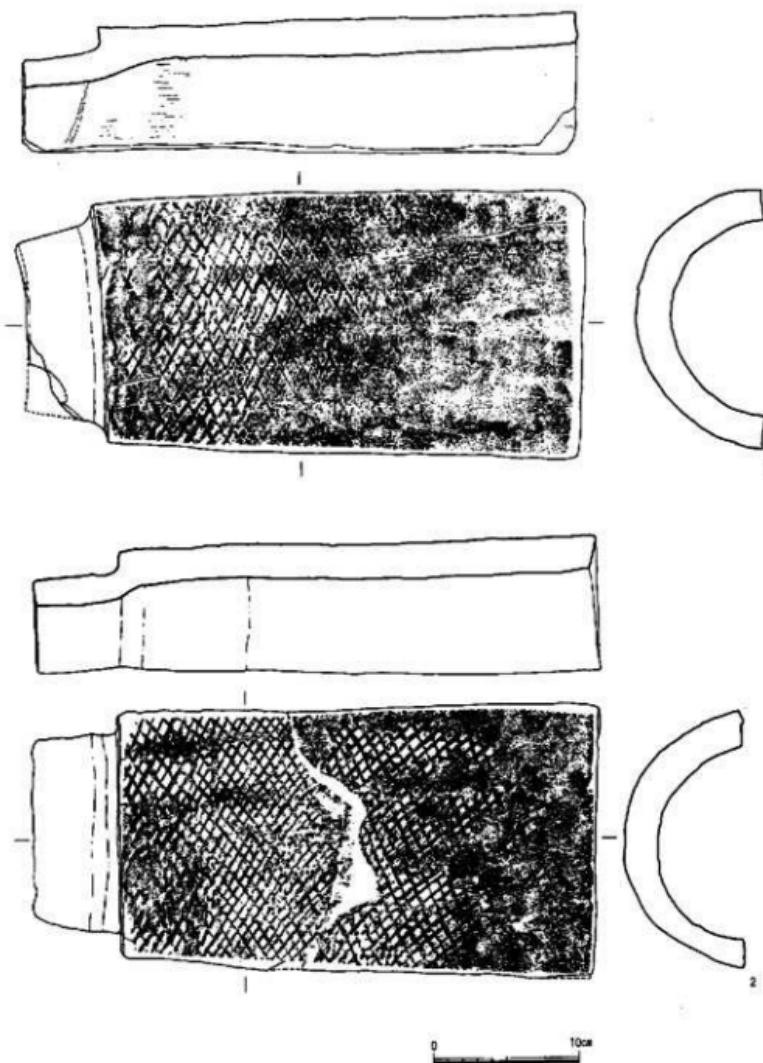


Fig.46 SK-53出土遺物実測図(1)

6. 第5次調査の概要

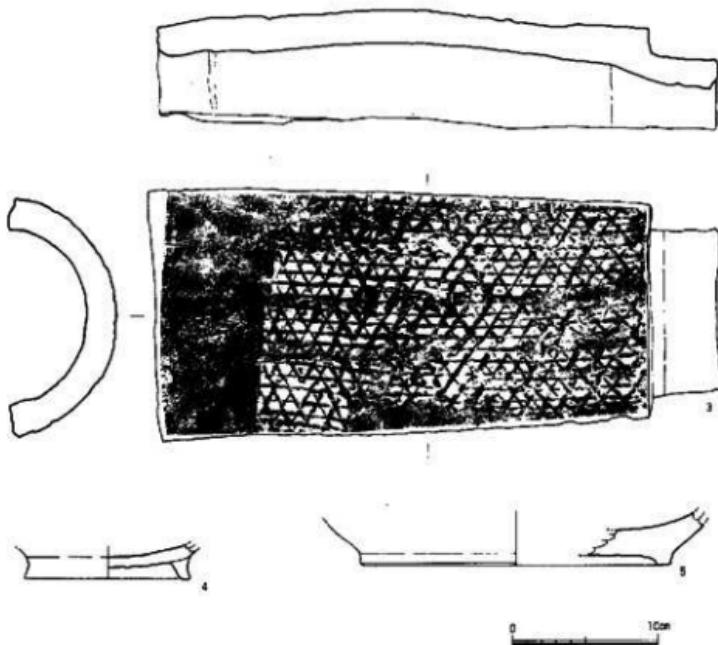


Fig.47 SK-53出土遺物実測図(2)

④ SK-53

a. 造構 (Fig.44)

調査区北半中央部に検出した土坑である。S B-50の基壇の中に掘り込まれていて、碇石根固め穴と重複関係にあり、根固め穴を切っている。S B-50より後出であることは明白である。土坑は南北径2.6m、東西径1.6mの長方形プランをなす。底面は南北1.95m、東西0.9mの長方形。南半部が近世の擾乱によって削平され浅くなるが、北側では0.8mの深さを有する。掘り方の断面は逆台形状をなす。内部には多量の瓦が投棄されていて、特に丸瓦は完形品が数個含まれる。青磁器、土師器、須恵器はきわめて少ない。

土坑の平面プランは第4次調査検出のSK-01、SK-02と同様に正確な長方形プランに掘り込まれている。企画性が感知され、他の用途に掘り込まれたものが、後にゴミ穴として使用されたかもしれない。

b. 出土遺物 (Fig.45、46)

出土遺物は瓦類が大部分で、若干の青磁器。土師器がある。瓦類には平瓦、丸瓦が大部分を占め、軒瓦は少ない。

Fig.45-1、2、Fig.46-1は共に玉縁つき丸瓦である。Fig.45は表面にやや大き目の斜格子のタタキがある。内面は荒い布痕、全長39cm、幅16.3~18.3cm、玉縁長5.3cm。2は表面は細い斜格子のタタキ、裏面は1と同様の荒い布痕、全長38.7cm、幅16.7cm~18.8cm、玉縁長6.3cm。Fig.46-1は表面に斜格子と三角形のタタキが一面にある。内面やや荒い布痕、全長34.1cm、幅14.8cm~17.0cm、玉縁長は5.0cm。いずれも分割の方法はヘラで半分に刻みを入れ割りとしたものである。

Fig.46-2は土師器、3は青磁器である。2は杯、底部は貼り付けの高台でやや高い。端部は平坦に仕上げている。底面はナゲ調整、底径8.4cm。3は大型の椀か、底部は削り出しの細い輪高台、体部は外傾しながら直線的にのびる。器壁は厚い。青黄色の釉を全面にかける。豊付きは後で釉が割りとられる。釉は剥離が著しい。底径15.8cm。

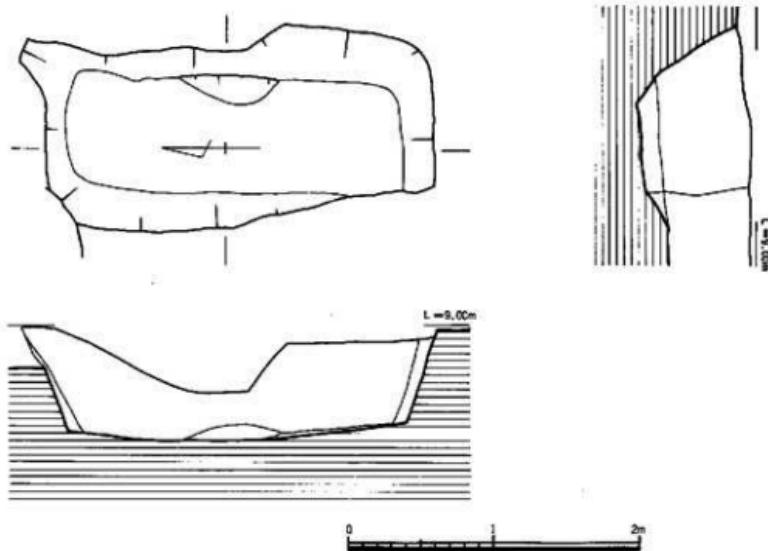


Fig.48 SK-54実測図

6. 第5次調査の概要

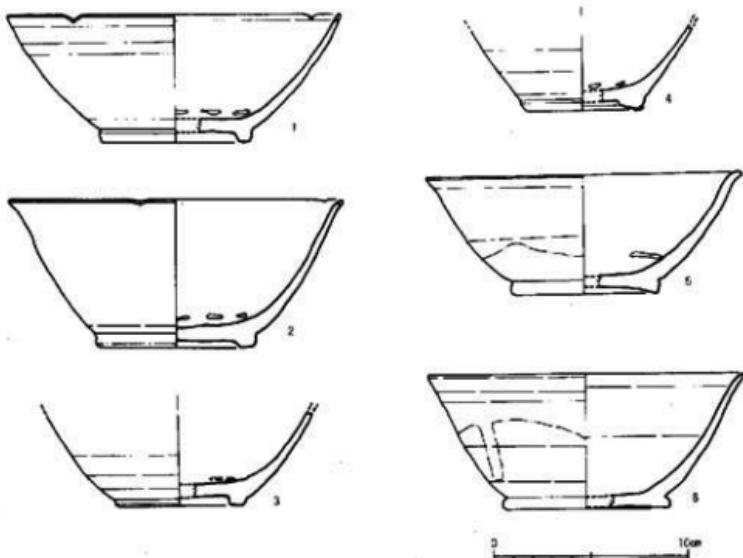


Fig.49 SK-54出土遺物実測図

⑤SK-54

a. 造構 (Fig.46)

調査区の北端部、SB-31の基礎上に掘り込まれた土坑である。土坑の東側でSB-31の礎石、根固め穴、SK-61、SK-62と重複関係にあり、いずれの造構をも切っていて、最も後出する土坑である。西側は近世の擾乱坑によって切られている。

土坑は検出面で南北径2.65m、東西径1.4mの長方形プラン。底面は南北2.3m、東西0.81mの長方形。深さ0.8mで断面形は逆台形状をなす。瓦類をはじめとして、青磁器類が多数出土した。

土坑の規模、形状はSK-53とよく類似している。同様の目的のために掘削された可能性が高い。時期にもきわめて近い関係にあると考えられる。

b. 出土遺物 (Fig.49)

瓦類をはじめ青磁器、土師器がある。図示したのはいずれも青磁器の碗である。

1. 底部は削り出しの輪高台、体部はやや丸味をもってたちあがり、口縁端部は丸くおさめる。口縁には輪花の刻みがあり、その下位に継ぎの凹線がある。五輪花になると考へられる。

第3章 調査の概要

全面にくすんだ青灰色の釉をかけるが、二次的に火を受けたとみえ変色している。壺付きは後から釉を削りとっている。見込みと壺付きに目跡が残る。口径17.0cm。器高6.5cm。2は底部は削り出しのやや幅広い輪高台である。体部はやや丸味をもってたちあがり、口縁部はわずかに外反する。口縁部には輪花の刻みがみられ、たぶん五輪花になるであろう。オリーブ色の釉を全面に施し、後から壺付きの釉を削りとっている。見込みと壺付きに目跡が残る。目跡は小さく右まわりに傾斜し、数は16である。口径17.2cm、器高7.5cm。3も底部は削り出しの輪高台、高台の外面はやや内傾気味に削る。体部は丸味をもってたちあがる。体部下半はヘラ削りの調整を加える。全面にオリーブ色の釉をかける。見込みと壺付きに目跡が残る。底径6.6cm。4、底部は低いやや幅広の削り出し高台、体部は高台から外傾しながら直線的にたちあがる。釉下に白粘土の化粧かけがある。釉は剥離して存在しない。見込みと壺付きに目跡が残る。焼成不良である。底径6.3cm。5の底部は円盤状をなす。体部はやや丸味をもってたちあがり、口縁部は外反する。体部下半は露胎のままで上半から内面にかけて黄緑色の釉をかけるが、釉の剥離が著しい。釉下に化粧かけがみられる。見込みに目跡が残る。口径16.2cm、器高6.1cm。6、底部は円盤状をなし外へ張る。体部は丸味をもってたちあがり、口縁部がわずかに外反する。外面の体部下半は露胎で、上半から内面にかけて釉がかけられるが剥離して不明。釉下に化粧かけがみられる。口径16.0cm、器高6.9cm。

6. SK-56

a. 造構 (Fig.49)

調査区の西側に検出した土坑である。SB-31の基壇、SK-62、SK-77と重複関係にあり、SK-77、SB-31の基壇を切り、SK-62に切られている。南側は江戸時代に削平され若干浅くなっている。検出面では、東西径4.15m、南北径3.85mの不整格円形プランを有する土坑と考えたが、発掘を進めると、底面が異なる三基の土坑が連なったような姿になった。埋土中には切り合ひ関係等を示す部分は検出することはできず、遺物の出土状況からも分離はできないので、同一の土坑として取り扱う。ただし、中央部の最も深い土坑(56-a)が埋まりきる前に北側の土坑(56-b)を新たに掘り込めば本坑の状況のような場合がおこるかも知れない。南側の長方形の振り出し部分も同様で、平面的にも、土層断面の観察においても切り合ひ関係はなく、土層的に同一時に埋っていたことを示している。

最も深い部分56-aは東西径4.15m×南北径2.3mの不整格円形プランで、深さ0.8m、56-bとの段差は0.4mである。56-bは東西径2.4m、南北径1.5m、不整格円形プラン。深さ0.4mである。56-cは東西径0.95m、南北径0.6mの長方形プラン。深さは削平のため浅くなるが、現状で0.2mである。

6. 第5次調査の概要

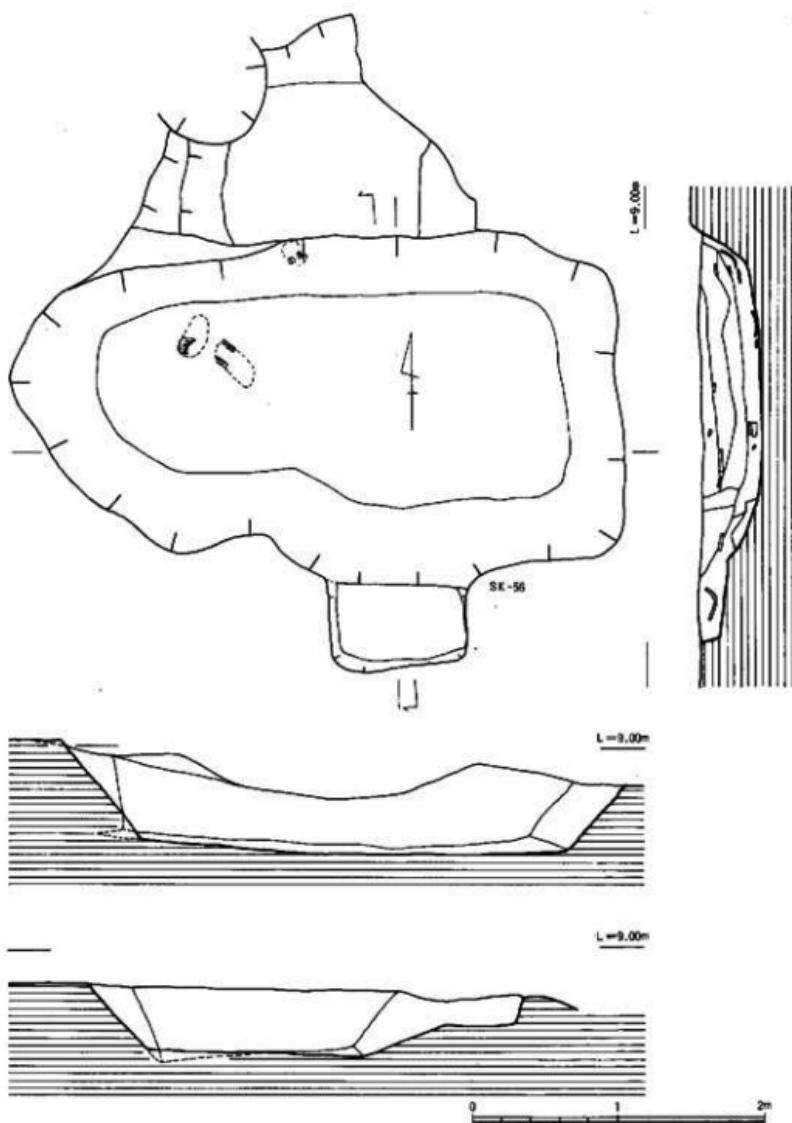


Fig.50 SK-56実測図

第3章 調査の概要

埋土は大きく上下の二層に分けられる。上層は赤褐色粘質土層で56-bのすべて、56-aの上層部があたる。下層は黒褐色粘質土層、56-cと56-bの下半部、厚さ30cmである。

出土遺物は上層と下層で若干の違いをみせる。上層では、越州窯系青磁器の優品が多く、すべてに使用痕がみられる。下層は目跡が残り未使用的青磁器で、上層のものと比較すると下手である。大部分が二次的に火を受けている。第4次調査のSK-38と同様の状態を示し、時期的にも同時期と考えられる。隣接するSK-61との間には接合関係がみられる。この土坑には食料残滓も多く、特に下層には馬の頭、四肢骨、鹿の骨が多い。上・下層から共に魚骨、炭化米などが出土している。

b. 出土遺物 (Fig.51~53)

瓦類、青磁器、土師器、須恵器、鉄器、銅鏡、ガラス小玉等の人工遺物の他、馬の頭骨、四肢骨、鹿の骨、魚骨（マダイ、クロダイ、イワシ等）、炭化米等の食料残滓である自然遺物がある。銅鏡、ガラス小玉は後からの混入品とみられる。出土遺物は上層と下層にわかれ、上層は優品が多く、すべてが使用痕があり、鴻臚館で使用されたもの、下層は重ね焼きの目跡が残り、大部分は二次的に火を受けた未使用品である。

1、2は輪花杯、1はあげ底状の平底、体部は下半でわずかに内湾し、外傾し口縁部にのびる。輪花は十輪花となり、体部は割線で5区画に分ける。黄味の強い淡オリーブ釉を全面に施釉、後、疊付きの釉を削りとる。見込みに9ヶ所、疊付きに8ヶ所の目跡が残る。口径15.0cm、器高4.4cm。2は底部は低い削出しの輪高台である。他は1と同様。3は杯。平底で体部は外傾しながら直線的にのびる。口縁部は肥厚し下縁状をなす。体部外面は口縁直下よりヘラケズリ調整。底部を除いた全面に淡オリーブ色の釉をかける。口径11.4cm、器高3.6cm。4、5は小型の碗。底部は削り出しの輪高台で低い。体部は丸味をもってたちあがり、口縁部はわずかに外反する。口縁部は刻みを入れ五輪花とする。刻みの下に割線を入れる。黄味の強いオリーブ色の釉を全面にかけ疊付き部分は削りとる。見込みと疊付きに目跡が5ヶ所残る。口径10.0cm、器高4.3cm。5は底部平底で体部は丸味をもってたちあがり、口縁部は屈曲し、真っすぐにたつ。外面体部上半から底部にかけてヘラ削り。黄味の強いオリーブ色の釉を全面に施釉。疊付きに目跡が5ヶ所に残る。口径13.7cm、器高3.9cm。6は皿。底部は削り出しの輪高台、体部は下半で屈曲し、そのまま直線的にたちあがる。口縁端部は丸くおさめる。褐色がかかった淡黄白色釉を全面施釉し、後から疊付きを削りとる。疊付に目跡7ヶ所が残る。口径13.7cm、器高3.9cm。7~9は五輪花碗、底は削り出で、体部は丸味をもってたちあがり、口縁部はわずかに外反する。輪花の刻みの下に割線を入れる。全面施釉し、疊付のみかきとる。7は釉色はアメ色、見込みに7ヶ所、疊付に9ヶ所の目跡が残る。口径17.5cm、器高7.5cm。8は淡オリーブ色の釉、疊付に6ヶ所の目跡が残る。口径16.7cm。10、11は碗、削り出しの輪高台、

6. 第5次調査の概要

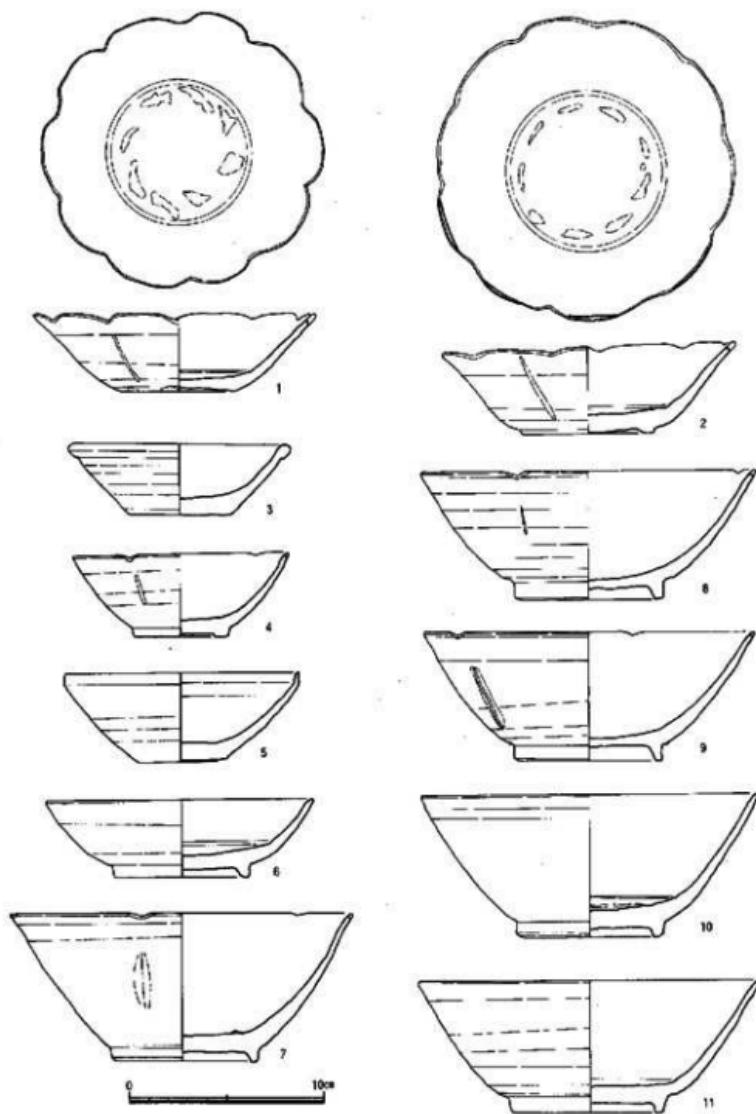


Fig.51 SK-56出土遺物実測図(1)

第3章 調査の概要

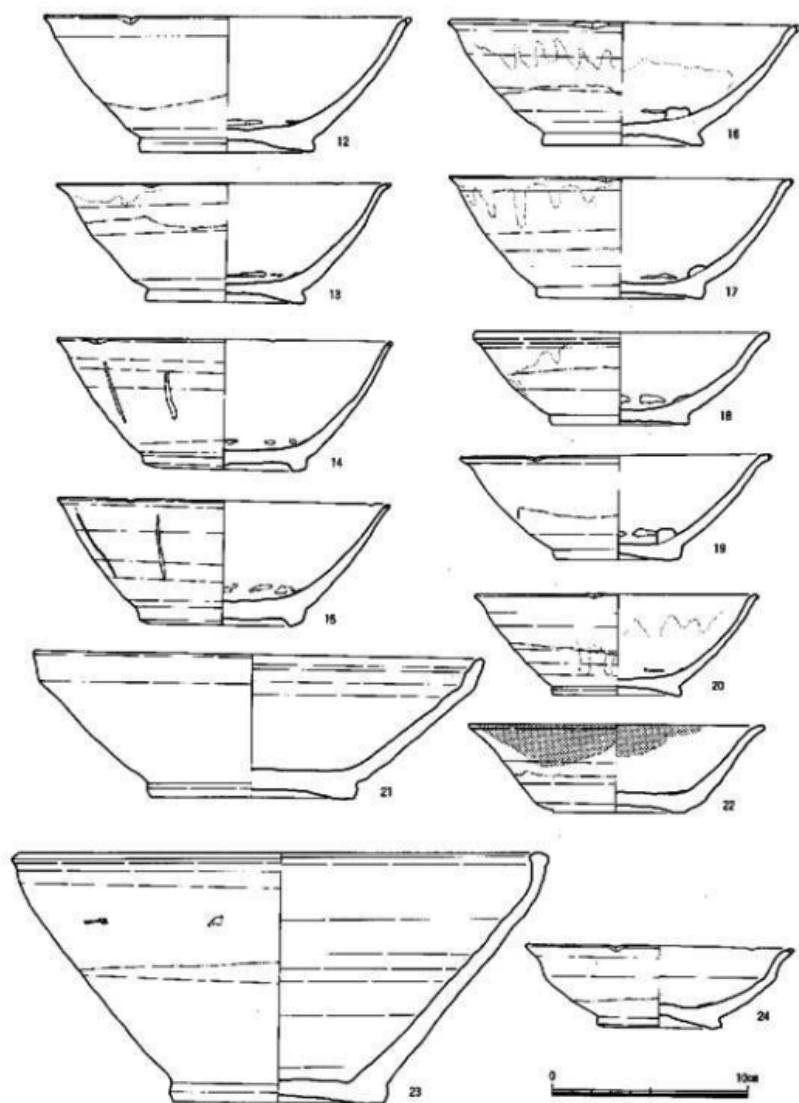


Fig.52 SK-56出土遺物実測図(2)

6. 第5次調査の概要

体部は下部で屈曲し、そのまま直線的にたちあがる。口縁端部は丸くおさめる。全面に黄味の強いオリーブ色の釉をかけ、あとから豊付の釉をふきとる。10は見込みに沈線をめぐらし目跡7ヶ所が残る。豊付の目跡は数不明。口径17.0cm、器高7.3cm。11は見込に浅い段がある。目跡8ヶ所。豊付に9ヶ所の目跡が残る。口径17.5cm、器高7.7cm。14、15は五輪花碗。底部は削り出しの低い、やや幅広の輪高台、体部は内湾気味にたちあがり、口縁端部はわずかに外反する。輪花の刻みは浅く、刻線も規則的でない。全面施釉で、豊付を難に削り取る。14は青味の強い淡オリーブ色釉。見込みと豊付に13ヶ所の目跡が残る。口径17.0cm、器高6.3cm。12、13、16、17は大型の粗製の五輪花碗、底部は円盤状をなす。底部端が外へ張り出るもの（12、13、16）垂直にたつもの（17）がある。体部は丸味をもってたちあがり、口縁部は外反する。口縁は輪花の刻みがある。体部外面下半は露胎で、上半から内面にかけて施釉される。釉下に化粧がけがみられる。12は見込に5ヶ所、豊付は個数不明の目跡がある。白色がかったオリーブ色の釉、口径18.5cm、器高7.0cm。13は暗黄白色釉、見込、豊付に6ヶ所の目跡が残る。口径17.0cm、器高6.0cm。16は黄味をおびた淡オリーブ色釉、見込みに7ヶ所、豊付は個数不明の目跡が残る。口径17.9cm、器高6.3cm。17は黄味をおびたオリーブ色釉、見込に7ヶ所、豊付は個数不明の目跡が残る。口径17.5cm、器高6.1cm。いずれも二次的に火を受け釉は変色している。18~20は中型の粗製碗、円盤状の底部をなす、体部はやや丸味をもってたちあがり、口縁部は外反する。19、20は五輪花の刻みがある。18は口縁部が肥厚し、玉縁状になる。体部下半は露胎で、上半部から内面にかけて施釉される。釉下に化粧土がかけられる。18は青味をおびた淡オリーブ釉、見込みに7ヶ所の目跡が残る。豊付は不明。口径14.7cm、器高4.7cm。19は青味をおびた淡オリーブ色釉、見込みに6ヶ所の目跡が残る。豊付は個数不明。口径15.8cm、器高5.3cm。20は黄味の強いオリーブ色釉であるが剥離が著しい。見込、豊付に6ヶ所の目跡が残る。口径14.4cm、器高5.2cm。22は杯、底部はあげ底状の平底、体部は外傾しながらたちあがり、口縁部は外反する。体部下半から内面にかけて黄味の強い淡オリーブ色の釉がかけられ、口縁部の3ヶ所の内外部に褐釉がかけられる。褐釉は剥離が著しい。見込みに6ヶ所の目跡が残る。豊付は数不明。口径14.9cm、器高4.5cm。24は粗製の五輪花皿、あげ底状の円盤状の底部、体部は外傾しながらたちあがり、中ほどで屈曲し、口縁部は外反する。端部は丸くおさめる。体部外面下半は露胎で、上半から内面にかけて青灰白色釉をかける。釉は剥離が著しい。見込に4ヶ所の目跡が残る。豊付きは数不明。口径13.7cm、器高4.1cm。21は無釉陶器の鉢、あげ底の円盤状の底部。体部は外傾しながらたちあがり、口縁部は屈曲し、垂直に近いたちあがりをみせ、内側に肥厚し、明瞭な稜をつくる。器面はナデ調整。口径22.7cm、器高7.5cm。23は鉢、あげ底の円盤状底部。体部は外傾しながら直線的にたちあがり、口縁部で屈曲し、内傾気味にたちあがる。端部は肥厚する。体部外面下半は露胎で、上半部から内面にかけて黄白色釉をか

ける、口縁部上端から内側にかけて12ヶ所、体部外面の上半に12ヶ所の目跡が残る。口径27.1cm、器高12.8cm。25は水注、底部は削り出しの輪高台、体部は球形で胴最大径は中位にある。瓜割形で割線は4本。頸部は段をつくり、直口し、口縁部は外反する。口縁端部は丸くおさめる。注口は肩部につけられる。断面は円形であるがヘラケズリで整形される。把手は粘土紐4本を束ねた状態で口縁端部と胴中位に貼り付けられる。オリーブ色釉を全面施釉するが、胴内部の一部に釉がかからない部分がある。疊付に10ヶ所の目跡が残る。口径8.7cm、器高18.6cm。同形同人の水注が他に3個体存在する。26は広口壺。底部はややあげ底の平底、体部は内湾しながらたちあがり、頸部で内傾し、口縁はくの字形にひらく。口縁端部は丸くおさめる。胴部の最大は肩部にある。口縁に2ヶ所に蓋とりつけの孔が穿たれる。淡灰褐色釉を底部を除いた全面に施釉する。内底部に5ヶ所の目跡が残る。口径16.9cm、器高9.7cm。27は双耳壺、底部はややあげ底。体部はやや長胴で、胴部最大径は上半にある。口縁部はくの字形に外反する。口縁端部は平坦に仕上げる。体部下半は露胎で上半から口縁内面に褐色がかかった黄緑色釉をかける。二次的に火を受けている。耳が2ヶ所につく。口径9.3cm、器高13.0cm。28は合子の蓋、天井部は丸味を持ち。天井部と体部の境で屈曲しまっすぐ下り、端部は平坦に仕上げる。外面に黄味をおびた淡灰白色の釉をかける。口縁端部に4ヶ所の目跡が残る。口径11.0cm、器高3.2cm。29は蓋、天井部は丸味をもつ。宝珠形のつまみをつける。天井部と体部の境は鋭い稜線をもつ。口縁端部は平坦である。外面に黄味の強い黄白色釉をかける。口縁端部に目跡が残るが数は不明。口径10.6cm、器高4.4cm。30、小鉢、わずかにあげ底で、外面から削り出した円盤状の底部、体部は丸味をもってたちあがり、口縁部はわずかに外反する。体部に2条の沈線をめぐらしている。体外面から口縁部内側にかけて黄味がかかったオリーブ色の釉をかける。見込みと疊付きに4ヶ所の目跡が残る。口径9.4cm、器高6.3cm。31は蓋、底部は平底で直線的に外にひらき、口縁部は折りかえす。口縁直下に1ヶの穿孔がみられる。黄味がかかった灰白色釉を口縁内面にかけて施す。口径11.2cm、器高3.7cm。32は大型の四耳壺、長胴で最大径は胴中位より上半にある。頸部は短く、内傾しながらたちあがり、口縁は2重U縁状になり、端部は平坦、体部外面下半は露胎で、上半から口縁内側に釉がかけられるが剥離し詳細不明。口径9.9cm、器高30cm以上である。

1～11、25、26、28、30は上層出土、他は下層出土である。

6. 第5次調査の概要

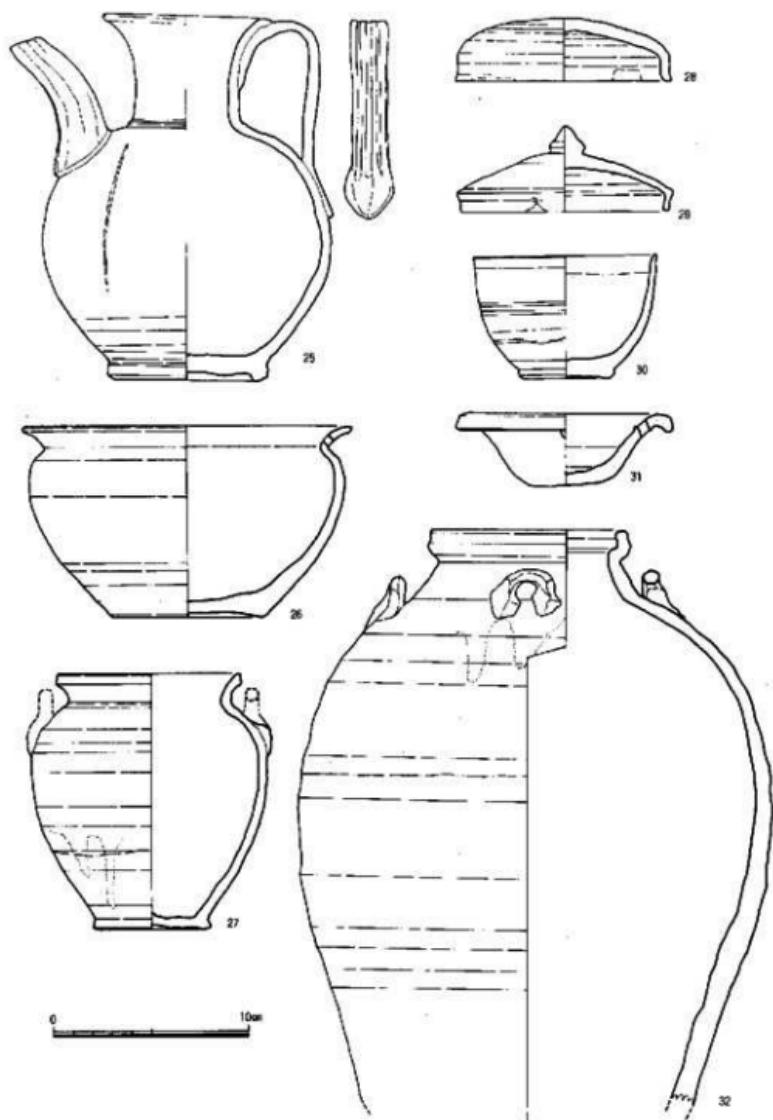


Fig.53 SK-56出土遺物実測図(3)

⑦ SK-61

a. 遺構 (Fig.54)

調査区北端の西側、SB-31とSB-50の接点コーナー付近に検出した土坑である。SB-31の基壇および礎石根固め穴、SB-150の布掘り遺構、SK-54と重複関係にあり、SB-31の基壇、礎石根固め穴、SB-150の布掘りを切り、SK-54に切られている。

南北径2.05m、東西1.65mの不整精円形プランをなす土坑である。深さは0.4m。内部から多量の瓦類が出土し、床面近くに青磁器が完形品に近い状態で一括（約50個体）廃棄されている。そのほとんどが焼で、二次的に火を受けている。埋土中には多量の炭を含み、食料残滓である獸骨片、炭化物、魚骨等も出土している。SK-56の下層陶磁器と接合関係にあり、同時期に存在していたことがわかる。第4次調査SK-38、今次調査のSK-56下層と同じ状態を示している。

b. 出土遺物 (Fig.55.56)

多量の瓦類、青磁器とわずかな白磁器、土師器、須恵器がある。青磁器は二次的に火を受け変色している。また食料残滓の獸骨や魚骨、炭化物等の自然遺物もある。

図示したのはすべて青磁器である。

1~3は杯、あげ底状の平底、体部は外傾しながら直線的にたちあがり、口縁部はわずかに外反する。口縁部は丸くおさめる。体部外面下半は露胎で上半から内面にかけて、黄白色~青味がかった淡オリーブ釉をかけ、口縁部の内外の3ヶ所（2は2ヶ所）に褐釉がかけられる。釉は剥離が著しい。1は疊付きに目跡が残るが、数は不明。口径13.7cm、器高4.4cm。2、3は見込みと疊付きに6ヶ所の目跡が残る。2は口径14.0cm、器高4.3cm、3は口径14.0cm、器高4.3cm。4~11は中型の粗製の碗。底部はあげ底の円盤状をなし、底部端は外へはり出しか、直立する。体部は丸味をもってたちあがり、口縁部はやや外反し、端部がわずかに肥厚し、小さな玉縁状をなす。体部外面の下半は露胎で上半から内面にかけて黄味をおびた灰白色~淡オリーブ色の釉をかける。釉下には白土によって化粧がかけがみられる。1は見込みに1ヶ所、疊付きに6ヶ所の目跡が残る。口径14.3cm、器高5.2cm。5、6は見込みと疊付きに6ヶ所の目跡が残る。5は口径15.1cm、器高5.4cm。6は口径14.8cm、器高5.1cm。7は見込みと疊付きに5ヶ所の目跡が残っている。口径14.9cm、器高5.2cm。9は見込みに4ヶ所、疊付きに9ヶ所の目跡が残る。口径14.8cm、器高5.5cm。10、11は癒着する。共に見込みと疊付きに5ヶ所の目跡が残る。窯出しのままで日本に持ち込まれたと推定される例である。10は口径14.0cm、器高5.2cm。11は口径14.0cm、器高5.4cm。12~14は大型の粗製の碗。底部はあげ底の円盤状をなし。端部は外方へ張り出す。体部は丸味をもってたちあがり、口縁部はわずかに外反する。底部は露胎で、体部下半から内面にかけて釉をかけている。釉は二次的に火を受けているので変

6. 第5次調査の概要

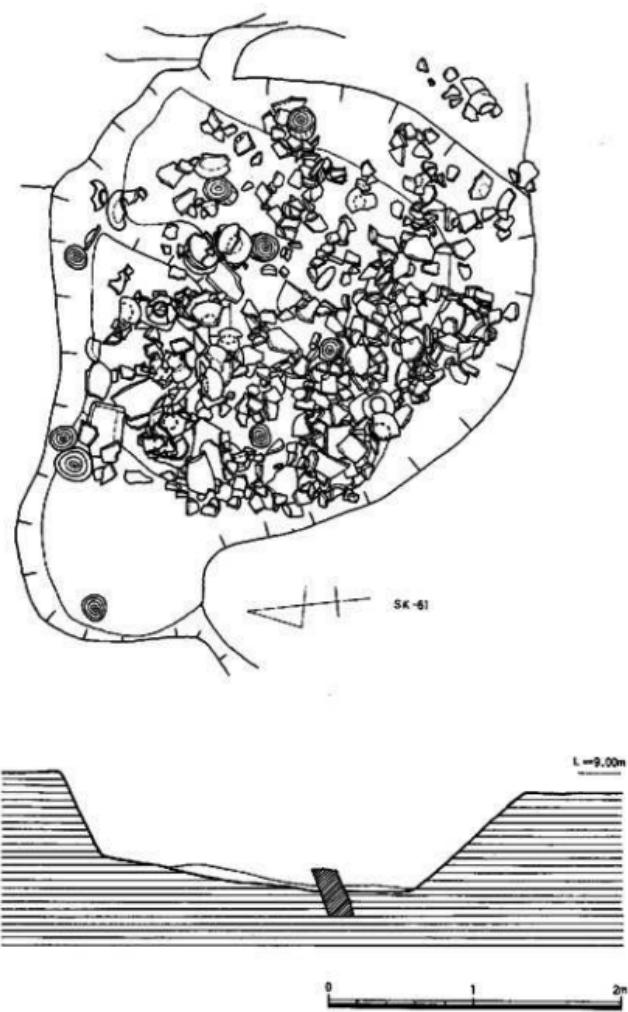


Fig.54 SK-61実測図

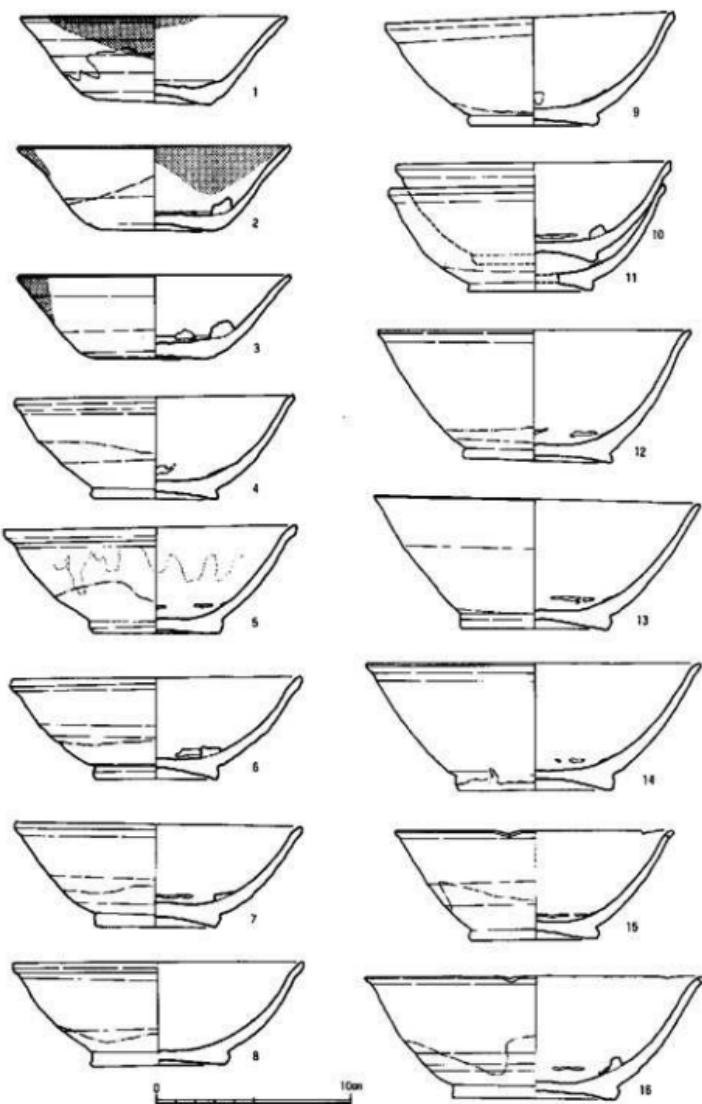


Fig.55 SK-61出土遺物実測図(1)

6. 第5次調査の概要

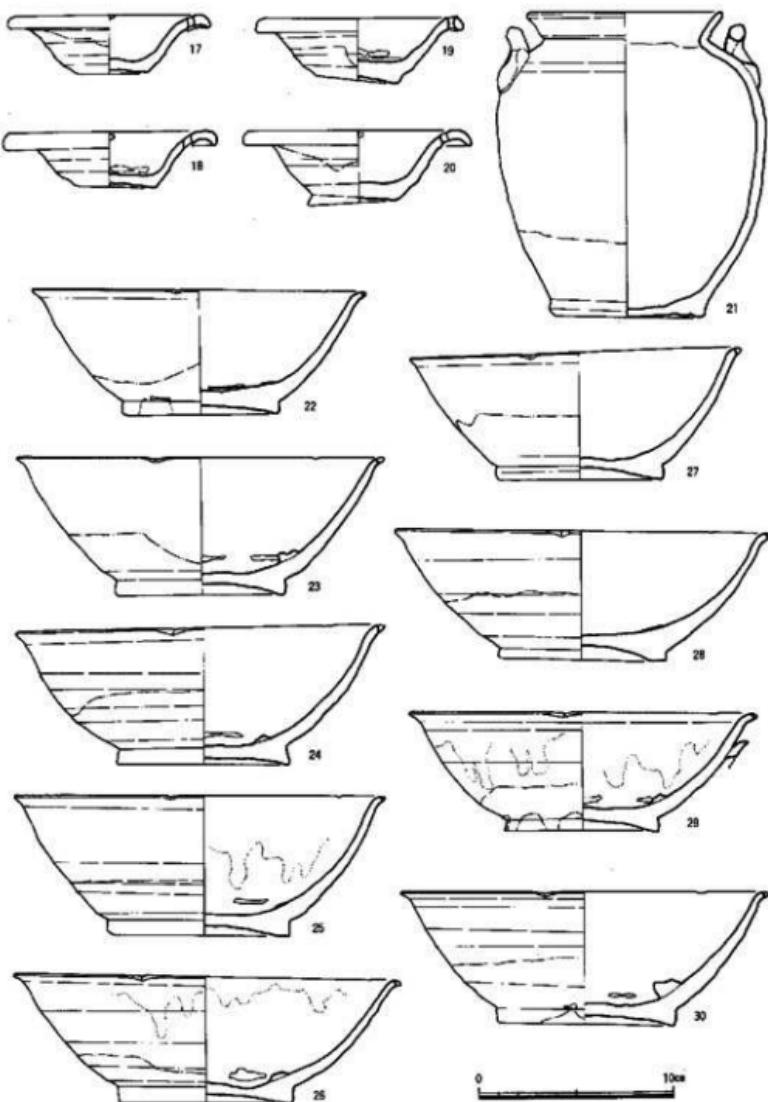


Fig.56 SK-61出土遺物実測図(2)

色し剥離が著しい。現状は黄白色を示す。12は見込みに7ヶ所の目跡が残る。疊付きに目跡の痕跡があるが数不明。口径16.1cm、器高6.6cm。13は見込み、疊付きに6ヶ所の目跡が残る。口径16.7cm、器高6.6cm。14は見込みに6ヶ所、疊付きに7ヶ所の目跡が残る。口径17.2cm、器高6.4cm。15は小型の粗製の五輪花瓶。底部はあげ底の円盤状をなし、端部は外へ張る。体部は丸味をもってたちあがり、口縁部は外反する。口縁部の輪花の刻みは深い。体部外面下半は露胎、上半から内面にかけて青味がかった黄灰白色釉を施す。見込みと疊付きに5ヶ所の目跡がみられる。口径14.3cm、器高5.5cm。17~20は蓋である。底部はあげ底の平底、体部は直線的にひろがり、口縁部は大きく外反し、端部は下に折り返され、丸くおさめている。口縁部に1個(17、18、20)ないしは2個(19)の孔が穿孔される。体部外面下半は露胎で、上半から内面にかけて青白色~黄白色の釉をかける。釉下には白土による化粧がけがみられる。17は口縁裏面に7ヶ所の目跡が残る。口径10.3cm、器高3.0cm。18は口縁裏面に6ヶ所の目跡が残る。口径10.9cm、器高2.8cm。19は見込みと底部に4ヶ所の目跡が残る。口径10.7cm、器高3.1cm。20は見込みに目跡が残るが数は不明。口径11.8cm、器高3.7cm。これらの蓋には目跡のつき方に2種類あり、蓋のみの重ね焼きと、壺にかぶせた状態で焼成したものがあると考えられる。21は小型の双耳壺。底部は平底で、難なヘラ削りを加える。体部は長胴で最大径は上位にある。頸部はしまり、口縁部は肥厚しくの字形に屈曲する。肩部に耳を2個つける。外面と口縁内側に施釉されるが、二次的に火を受けているため変色している。釉色は暗褐色を呈す。口径10.0cm、器高15.5cm。16、22、27は中型の粗製五輪花瓶。底部はあげ底の円盤状をなし、端部は外方に張る。体部は丸味をもってたちあがり、口縁部は外反する。輪花の刻みは浅い。体部外面の下半は露胎で、上半から内面にかけて黄白色~青白色をおびた釉をかける。釉下に白土で化粧がけがみられる。二次的に火を受けているために釉は変色、剥離が著しい。16は見込みに6ヶ所の目跡が残る。口径17.5cm、器高6.2cm。22は見込み、疊付きに7ヶ所の目跡が残る。口径17.1cm、器高6.3cm。27は見込みに5ヶ所の目跡が残る。口径17.0cm、器高6.7cm。29は見込みに7ヶ所、疊付きに8ヶ所の目跡が残る。体部外面の上部には重ね焼きの下位の器の口縁部が着して残っている。23~26、28、30は大型の粗製五輪花瓶。底部はあげ底で円盤状をなす。体部は内傾しながらたちあがり、口縁部は外反する。輪花の刻みはやや深い。体部外面の下半は露胎で、上半から内面にかけて黄味をおびた灰白色~淡オーリーブ色の釉をかける。23は見込みと疊付きに7ヶ所の目跡が残る。口径18.8cm、器高7.0cm。24は、見込み5ヶ所、疊付きに7ヶ所の目跡が残る。口径18.8cm、器高6.9cm。25は見込みに7ヶ所の目跡、疊付きは数不明。口径18.9cm、器高7.1cm。26、28は見込み、疊付きに7ヶ所の目跡が残る。口径19.8cm、器高6.4cm。28は口径19.2cm、器高6.5cm。30は見込みに7ヶ所、疊付きに8ヶ所の目跡が残る。口径18.9cm、器高6.7cm。

6. 第5次調査の概要

⑧ SK-62

a. 遺構 (Fig.57)

調査区の北端西側のSB-31の基壇上、SK-56とSK-61にはさまれた位置に検出した土坑である。SK-54、SK-56、SB-31の基壇部分および礎石根固め穴。SB-31とSB-50の間に作られた排水溝と切り合い関係にあり、SB-31開削遺構とSB-56を切り、SK-54に切られている。

東西径2.2m、南北径2.4mの不整方形の土坑で深さ0.5m。土坑内には玄武岩の大石3個（それぞれの大きさは $1.3m \times 0.85m \times 0.3m$ 、 $1.1m \times 0.8m \times 0.3m$ 、 $0.6m \times 0.75m \times 0.25m$ ）と花崗岩の礎（径40~20cm）3個が入れ込まれている。大石は礎石、礎は横固め石に使用されたとみられる。建物廃絶後に礎石等をかたづけるために掘られた土坑と考えられる。土坑の埋土はSK-56やSK-61と同様で食料残滓を含み、青磁器等、瓦類を多量に含んでいる。土層に

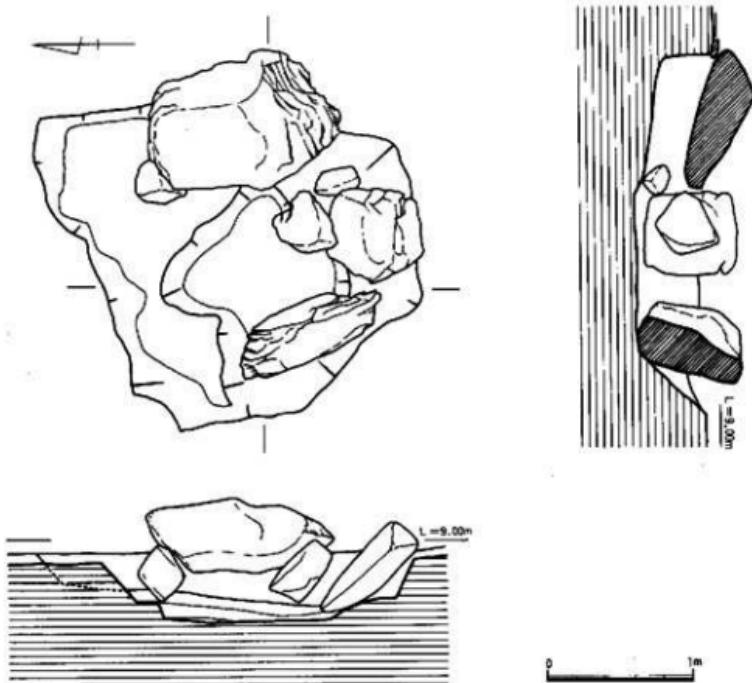


Fig.57 SK-62実測図

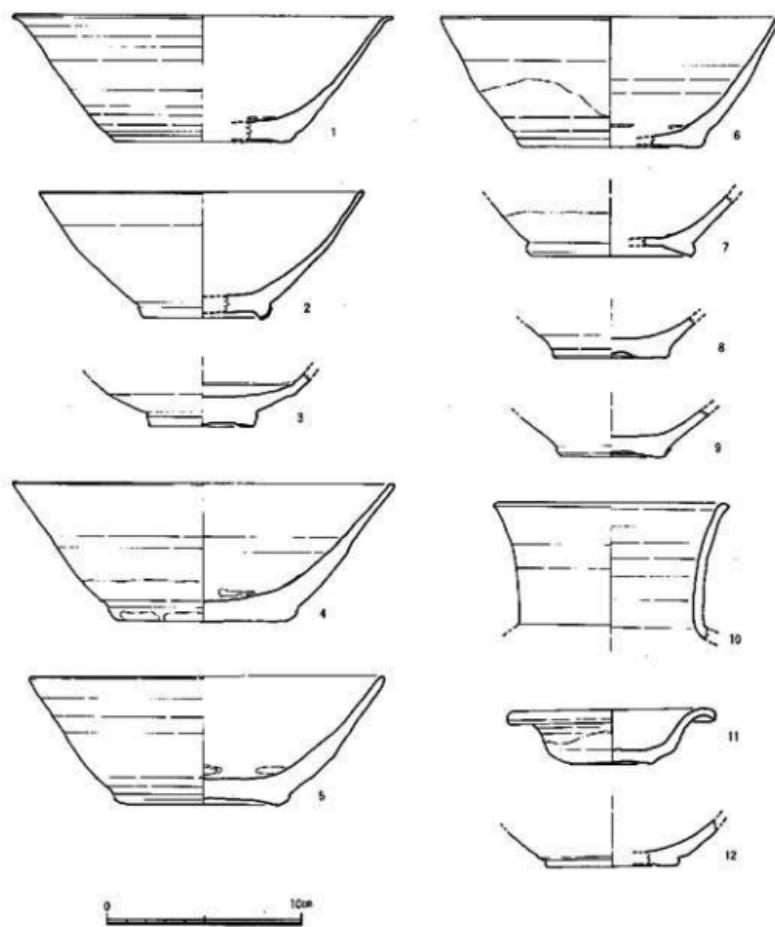


Fig.58 SK-62出土遺物実測図

6. 第5次調査の概要

亂れはなく建物が壊されて間もなく掘削されたものと考えられる。

b. 出土遺物 (Fig.57)

瓦類、青磁器、白磁器、土師器、須恵器の他、食料残滓である魚骨、歯骨、炭化物などの自然遺物も出土している。図示したのは青磁器、白磁器である。

1は大型椀、底部は削り出しの低い輪高台、体部は外傾して直線的にたちあがり、口縁部は外反する。体部外面の下半はヘラ削り調整。全面に青味あるいは黄味がかかったオーリーブ色の釉を施す。疊付きは後で削り取られる。見込みと疊付きに細い目跡が残るが、数は不明。口径19.4cm、器高6.4cm。2は椀。底部は削り出しの低い輪高台、体部はやや丸味をもってたちあがり、口縁部は丸くおさめる。体部外面の下半はヘラケズリ調整。黄味の強いオーリーブ色の釉を全面施釉する。疊付きに目跡が残るが数は不明。口径16.6cm、器高6.4cm。3は皿、底部は削り出しの輪高台。高台は高いが、内側の削りが浅く、輪状部は低い。体部は途中で屈曲してたちあがる。見込みに沈線をめぐらす。全面に淡いオーリーブ色の釉を施す。疊付きに目跡が6ヶ所残る。底径5.4cm。4は底部が円盤状をなし、丁寧なヘラ削り。体部は外傾しながら直線的にたちあがり、端部は丸くおさめる。体部外面下半はヘラ削り調整。底部直上から内面にかけて青味がかかったオーリーブ釉をかける。見込み部は釉が剥離し、釉下の化粧土が観察できる。見込みに10ヶ所、疊付きに9ヶ所の目跡が残る。口径19.6cm、器高7.0cm。5は椀、底部はあげ底で円盤状をなし、端部が斜にヘラ削りされる。体部は丸味をもってたちあがり、口縁端部は丸くおさめる。内外面共ナデ調整。器壁が厚く、粗いつくりである。底部を除いた全面に黄白釉をかけるが、二次的に火を受け剥離が著しい。見込みに8ヶ所、疊付きに10ヶ所の目跡が残る。口径18.2cm、器高6.5cm。6は椀、底部は円盤状をなす。体部は丸味をもってたちあがり、口縁端部は丸くおさめる。体部外面下半は露胎で、上半から内面にかけて青味がかった青灰色釉をかける。釉下に白土による化粧がけがみられる。見込みと疊付きに目跡が残るが数は不明。口径17.4cm、器高6.6cm。7は椀、底部は円盤状をなすが底部に沈線をめぐらし、蛇目高台様にしている。体部は丸味をもってたちあがる。体部外面下半は露胎、上半から内面にかけて黄釉をかけるが剥離が著しい。釉下に化粧土をかける。見込みに目跡が残るが数は不明。底径8.6cm。8、9は椀、底部は削り出しの蛇目高台、体部は外傾しながら直線的にたちあがる。全面にオーリーブ色の釉を施釉する。疊付きに6ヶ所の目跡が残る。8は底径6.0cm。9は底径5.5cm。10は水注の口頭部。頭部に段がある。頭部は垂直にたちあがり、口縁部は外反し、端部は丸くおさめる。内外面に淡いオーリーブ色の釉をかける。釉下は化粧を施す。口径10.8cm。11は蓋、底部は平底、体部は丸味をもってたちあがり、口縁部は大きく外反したりまげられる。体部下半は露胎、上半から内面にかけて黄釉がかけられるが、ほとんど剥離している。釉下に白土によって化粧している。口縁部裏面に目跡が残るが数は不明。口径10.6cm、器高2.8cm。

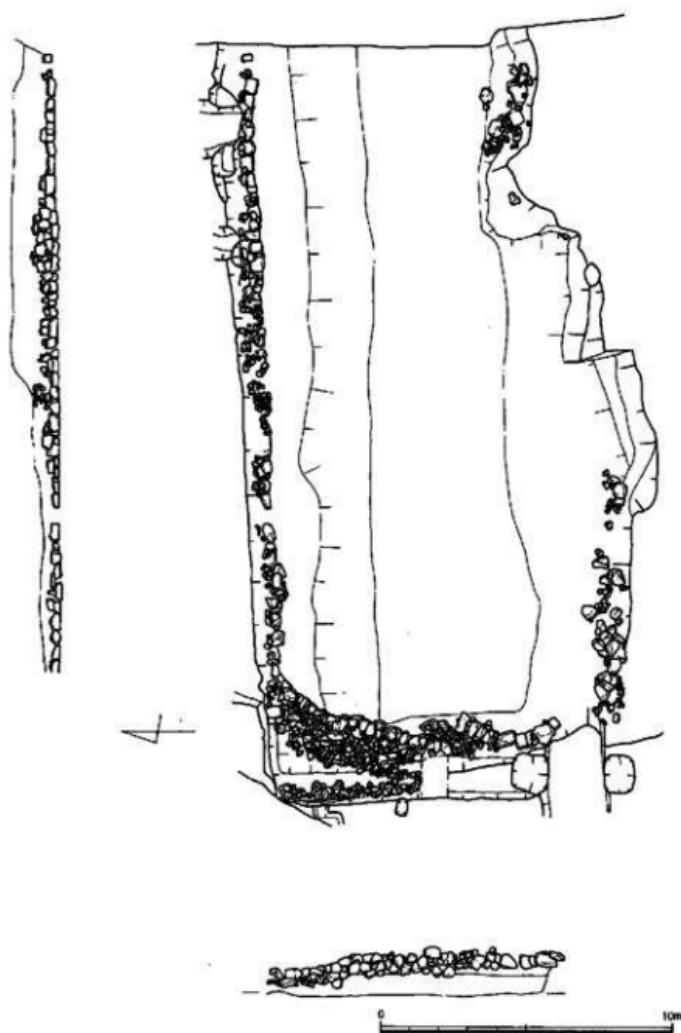


Fig.59 SG-51実測図

6. 第5次調査の概要

11は白磁器の椀である。底部は削り出しの蛇目高台、体部は丸味をもってたちあがる。底径6.9cm。全面に白釉をかけた後、墨付きをヘラ削りする。

⑨ SG-51

a. 遺構 (Fig.59)

この遺構は調査区中央に掘り込まれた堀あるいは池とみられるものである。二段に掘り込まれ、その掘り方は肥前堀に良く似ている。周囲に石垣がめぐる。1段目掘り方の周囲には石垣が築かれ、現状で最も残りが良いところで石積み三段が残っている。南側は破壊されたとみえ石材が散乱しているが、原位置を保っているものはない。これは調査区の南半が、約1m削平されていることと無関係ではない。西側は石垣全体がずれ込んだ状態を示している。南北には幅1.5m前後の犬走り状の平坦面があり、そこよりさらに二段目が掘り込まれている。断面形は逆台形をなし、内部は泥土で埋っている。深さ約1m、遺物は少ない。東西25.7m、南北13mの規模を有する。なお、この遺構は元来L字形に掘り込まれたもので、西側の掘り方から南に向う幅7.5m、深さ約1m、断面逆台形をした溝が掘削される。配量からSG-51と同時に掘り込まれたことが推測される。しかし、この遺構は埋土中からは鴻臚館関連の遺物のみが出土するので掘削は築城段階におこなわれ、すぐに埋め込まれたと考えることができる。このことは、南側石垣がこの埋土上に乗ることからも推測できる。何故にこのような現象がおこったかは明らかでないが、築城の繩張りの変更があったのではないかともみることができる。

南半部の削平の時期は、出土遺物から明治時代以降と考えられる。兵営の設置と無関係ではなかろう。

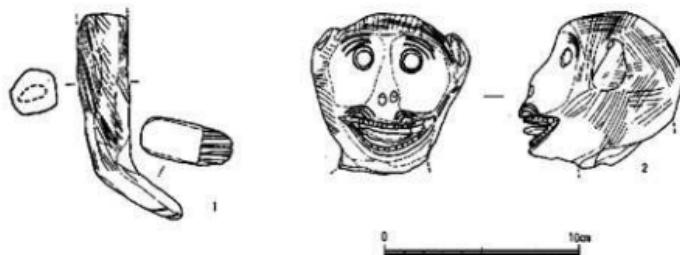


Fig.60 SG-51出土遺物実測図

b. 出土遺物 (Fig.60)

出土遺物は少なく、堀の床面に接して出土した猿の頭部と手を形づくった土製品があるのみである。共に瓦質の焼きで軟質、同一個体と考えられる。頭部は高さ8cm、顎幅8cm。顎から後頭部までが8cmを測る。耳は粘土板を頭部の上方に左右対称に貼り付け折り曲げる。鼻は高くすじがとうる。鼻孔は棒状の工具で刺突する。鼻孔はやや上をむく。左右の口の部分から顎にかけては凹ませ、眉は3本単位の刷毛目で円弧状に描かれる。口は前方に突き出し、半開きである。口内には上下の歯をつくり、中に舌を作り出している。齒は縦の沈線を入れ表現しているが、実際より歯の数が多く表わされている。鼻の下には3本単位の刷毛目で左右対称にU字形が描かれ、ひげを表現している。また頭部から後頭部にかけては不定方向の刷毛目を入れて毛の表現をしている。全体に猿の特徴を良く表現している。中空で、壁は厚さ1cm前後である。手は、手首をまげ、手の背が表現されている。沈線5本を施し指を表現しているが、指は6本になっている。上腕部はゆるやかにまがり、間接部で大きく屈曲すると考えられるが欠損する。腕は頭部同様刷毛目を入れ、毛を表現している。

3 猿（見ざる、聞かざる、言わざる）のどれかを表現した猿と考えられる。

⑩推定南門調査区

a. 遺構 (Fig.60)

昨年度の堀の調査において、テニスコート南側の上堀南斜面下に鴻臚館時代の包含層がブライマリィーな状態で存在しているのを確認し、包含層下の地盤面に遺構らしい部分が存在していた。

今年度はそれを確認すべく、樹木をさけて最大限のトレンチの拡張を行った。その結果、基壇状の高まりとそれに伴う雨落ち溝らしき遺構を検出した。基壇状の高まりは東南部コーナー部にあたっており、検出した範囲は南北2m、東西8m、である。基壇状高まりの端は崩壊してゆるやかな斜面をなしている。高まりにそって溝が掘られており、南北溝は幅50cm、深さ約20cmで断面U字形をなす。東西部分は幅60cm、深さ10cm、断面形はU字形をなしている。長さ2.5mが残在しており、延長部分は江戸時代の地すべりによって失われている。基壇状遺構の南側に検出した石塁は、この地すべりの修復工事によってつくられたものである。雨落ち溝の合流点ではわずかにコーナーをつくり、溝はさらに東にのびている。この溝は南門に接する回廊ないしは築地の雨落ち溝となるものと考えられるが、検出できたのは極わずかであるので判断できない。

基壇状遺構の南北幅を知るために、土塁の反対側（北斜面）にトレンチを設定した。この部分は、上堀に造作し、國体の時観覧席が設定されていたので、攪乱が著しい。遺構は土塁下に

6. 第5次調査の概要

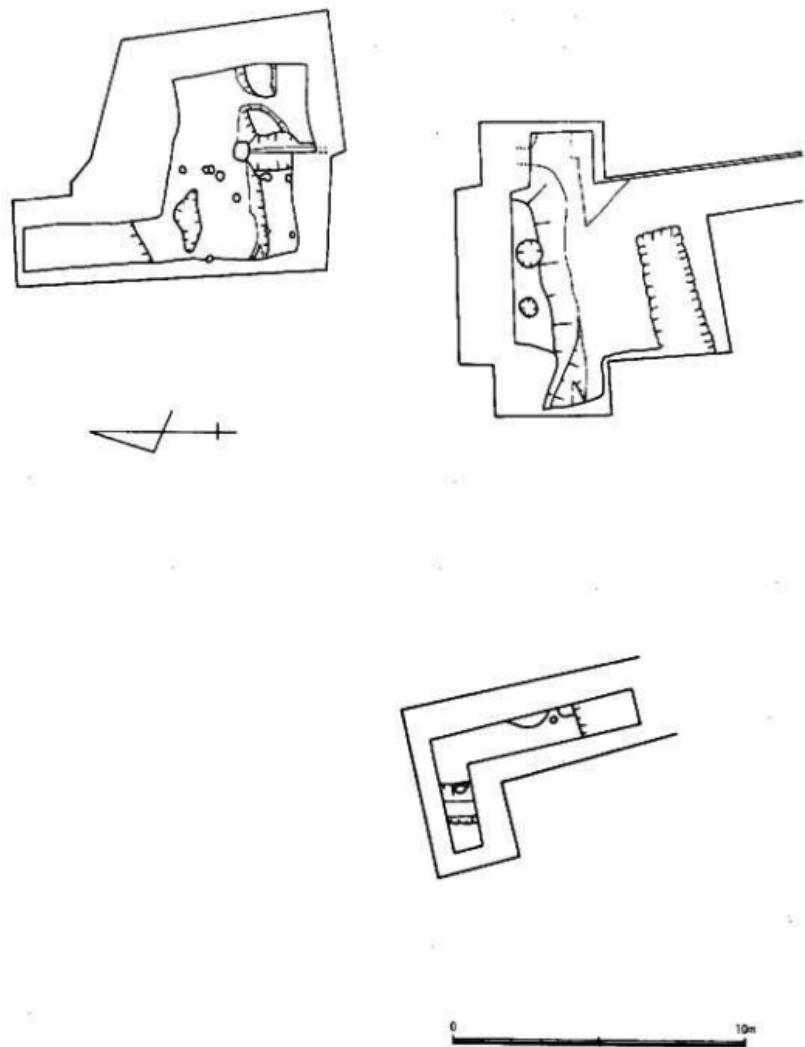


Fig.61 推定南門調査区実測図

検出した。南北方向の雨落ちの溝（排水溝）3mを確認した。基壇の北側を限る明確な造構は削平のため検出できなかったが、1ヵ所、長さ2m、幅0.8mの細長い瓦滴めの土坑を確認した。この土坑は方向的には南北の排水溝と直交する。土坑が東西方向の雨落ち溝の残存としてみた場合、南北の基壇幅は12.4mを測ることになる。また東西幅を知るために、最初のトレンチの西側の土壘の南斜面にL字形のトレンチを設定した。このトレンチでは南側に基壇の段落ちを確認し、西側において、幅1.3m、深さ10cmの溝を確認した。この溝が西側の雨落ち、あるいは排水溝になると考えられ、基壇の東西幅は21mと推測することができる。よって南門と推定される部分の基壇は東西21m、南北12.4mと推測されるが、この土壘には樹木があり、肝心な部分にトレンチが設定されず、不明確さを欠く。将来、全面調査によって正確を期すべきである。

b. 出土遺物 (Fig.61)

推定南門部の古代の包含層（表土か）および盛土から出土した遺物である。瓦類、青磁器、白磁器、須恵器、土師器、イスラム陶器がある。混入したと考えられる遺物には、銅鏡、銅鏡がある。銅鏡は小破片であるが、鏡背に赤色顔料、布痕が付着しているので古墳の副葬品であったことは間違いない。これらの遺物は鴻臚館の建設に先立つ造成によって古墳が破壊されたことを示唆するものであろう。

1は小瓶、底部は平底。体部は丸味をもつてたちあがる。オリーブ色の釉を全面に施釉し、豊つきの一部を後で削る。豊付きに目跡が残るが数は不明。底径5.0cm。2は瓶。底部は削り出しの蛇目高台。体部は外傾しながら直線的にたちあがる。青味がかったオリーブの釉を全面施釉する。豊付きに4ヵ所の目跡が残る。底径7.6cm。3は瓶。底部は削り出しの高い輪高台。体部は湾曲しながらたちあがる。見込みに沈線をめぐらす。沈線は一部重なり二重になる部分がある。全面に青味の強いオリーブ色の釉を施釉する。高台内側に目跡が残るが数は不明。底径7.6cm。4は瓶。底部は削り出しの高い輪高台。体部は丸味をもつてたちあがる。体部に割線が入れられるが数不明。体部外面は丁寧なヘラ削り調整。オリーブ色の釉を全面施釉し、後に豊付き部分を削り取る。豊付きに目跡が残る。数は不明。口径7.6cm。5は瓶。底部は削り出しの低い輪高台。体部はやや丸味をもつてたちあがる。全面にくすんだオリーブ色の釉がかけられるが、剥離が著しい。豊付きは後から削りとられる。見込みと豊付きに目跡が残るが数は不明。底部径7.9cm。6は大型の瓶。底部は削り出しの低い輪高台。体部は丸味をもつてたちあがる。全面にくすんだオリーブ色の釉を施す。高台内側に目跡が残るが、数は不明。底部径10.5cm。7は皿。底部は削り出しの低い輪高台。体部は途中で屈曲したちあがる。オリーブ色の釉を全面施釉する。見込みに段がある。見込みと豊付きに8ヵ所の目跡が残る。底径7.4cm。8は粗製の瓶。底部はあげ底で円盤状をなす。体部は丸味をもつてたちあがり、口縁

6. 第5次調査の概要

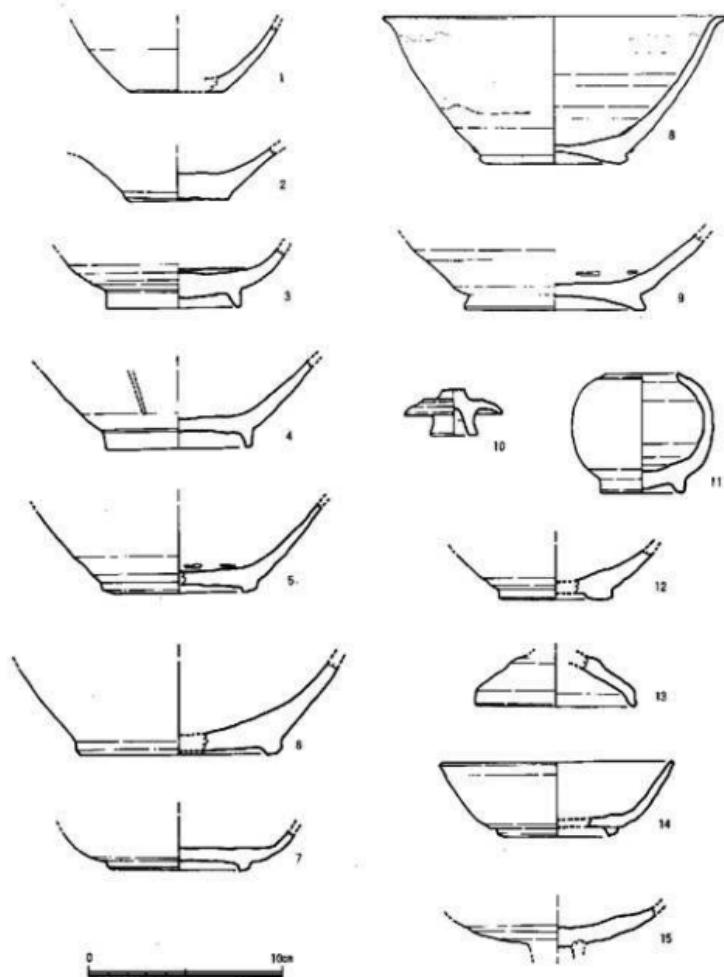


Fig.62 推定南門調査区出土遺物実測図

部は外反する。体部外面の下半は露胎で、上半から内面にかけて、青味がかった黄白釉をかける。釉下に白化粧。口縁部に輪花の刻みがあるのでたぶん五輪花になろう。見込みと疊付に目跡が残るが数は不明。口径17.6cm。器高7.5cm。9は粗製椀。底部はあげ底で円盤状をなす。体部は丸味をもってたちあがる。外面下半は露胎で、上半から内面にかけて黄白釉をかける。見込み、疊付きに7ヶ所の目跡が残る。底部径9.4cm。10は小型の蓋。11のような堆形合子の蓋と考えられる。天井部に段をつくり円座状をなす。中心に円柱状の小さなつまみをつける。口縁部はゆるやかに下がり、端部は丸くおさめる。天井内面には輪状のつくりだしがあり、端部は平坦。全面にオリーブ色の釉を施し、後から輪状部の釉を削りとる。輪状部の端に目跡4個が残る。蓋部径5.0cm。器高2.3cm。11は無頸の堆形合子、底部は削り出しの輪高台。体部は球形をなす。口縁部端は尖り気味におさめ口縁直下に沈線をめぐらす。全面に青味がかったオリーブ色の釉をかける。疊付き部分は後から釉が削り取られる。目跡が残るが数は不明。口径3.1cm。器高6.1cm。

12は白磁器の椀。底部は削り出しの蛇目高台。体部は丸味をもってたちあがる。体部外面から内面にかけて白釉をかける。底径9.8cm。

13は須恵器の蓋。天井部はヘラ削り。体部との境は屈曲し、口縁端部は丸くおさめる。口径8.2cm。14は杯、底は細い貼りつけの高台。体部は底部近くで屈曲し、直線的にたちあがる。口縁端部は丸くおさめる。11径12.0cm。器高4.0cm。15は高杯。杯部破片。脚は径3.0cmである。杯の底部と体部のさかいは明瞭でない。内外面共ナデ調整。内底部にヘラ記号がある。

7. 第6次調査の概要

(1) 調査の概要

第6次調査区は第4次、第5次調査の成果から、第5次調査区の東側に位置するテニスコートと第5次調査のテニスコートの間に存在する休憩場である藤棚の周辺、南側の福岡城土壘の東端部を予定した。目的はSB-50の延長部分がどのようになるか、南門を軸線として対象的に建物が存在するか否か、また、推定南門に連接する遺構の性格、およびコーナー部分の検出によって規模の推測を容易にすることにあった。しかし、結果的には、土壘部分は樹木等の問題があり発掘を断念し、将来にゆだねることとした。また、昨年度調査で検出した土坑で未発掘であったものの調査も行った。

昨年度調査区内の土坑で注目されるのはSK-57、69、70と呼んでいるもので、中より多量の木製品が出土し、その中に約70点の木簡が含まれていたことであろう。鴻臚館における最初

7. 第6次調査の概要

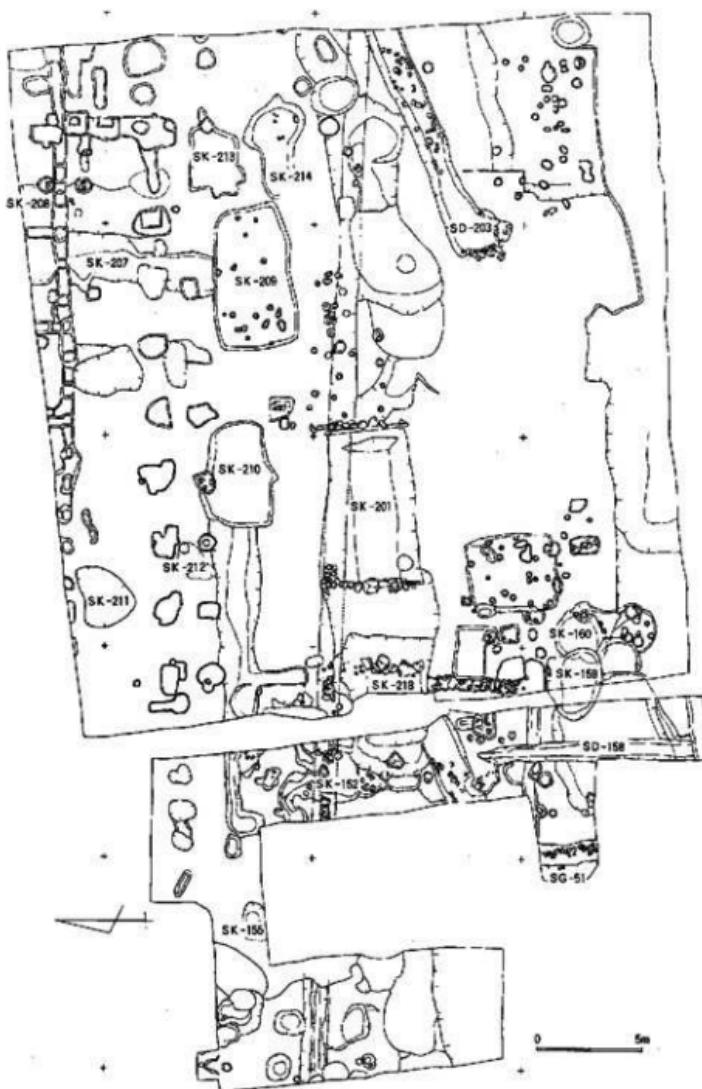


Fig.63 第6次調査区全体図

の木簡例である。これらの土坑は考古学的所見や、脂肪酸分析結果から便所であったことが判明し、古代の便所例としてきわめて重要な問題を提起するものと考えられる。この他、多数の土坑からは中国産陶磁器が出土した。唐三彩の例がさらに増加したことでも注目される。

第6次調査区の遺構は他の調査区同様表土下すぐには検出できるが、他の調査区に比較して、全体的に鴻臚館関連の遺構は残存状態が悪い。建物関連遺構ではSB-32の東側礎石抜き穴の延長部分、SB-50の東側延長部分を確認した。SB-32については今次調査でもSB-50より南側に延長するか否かについては堀の掘削がこの部分まで延びていることから確認できなかった。ただし、SB-32とSB-50の接点部、SB-50の北側雨落ち溝の延長部分に排水溝が設置されていることがわかった。建物基壇内にあるのでSB-32やSB-31とSB-50の接する部分に存在する排水溝と同様のものと考えられるが、石材は抜かれて存在していない。また、暗渠か開渠かは判断できない。SB-50は5間分(15m)の延長を確認したが、藤棚部分が未発掘のため部分的には不明。藤棚と東側テニスコートの間で、排水溝の延長部分が検出できた。延長部分は他の土坑と切り合いがあるために部分的に破壊されているが、良好な部分では、その構造がよくわかる。溝は花崗岩礎を立てて側壁とし、底には瓦を敷きつめ、蓋として砂岩、花崗岩の板石を使用していて暗渠であることがわかる。南側にはSB-50の雨落ち溝が検出できた。この雨落ち溝は西側の藤棚の下でとまり、北側に屈曲すると考えられる。また、この部分の雨落ち溝と礎石抜き穴の距離が約2mあり他より長くなっている事等を考えれば、この部分に他の建物、位置関係からすれば中門、あるいはそれに相当する馬道の存在を想定できるが確定できない。なお、すぐ東側には南北方向の排水溝の一部を確認した。先の東西方向の排水溝と直交するとみられるが、江戸時代の土坑によって北側が破壊されている。構造に若干の違いがある。この排水溝は底面、側壁共に花崗岩の礎を用いている。

東側テニスコート部分には、鴻臚館関連の遺構は少ない。推定南門の輪線を建物配置の輪線とした場合、SB-32に対応すると考えられる東側建物の西側雨落ち溝にあたる部分に、溝状に瓦が堆積しているが建物に伴う雨落ち溝であるか否かは判定できない。他に数ヶ所の瓦溜めの土坑を検出した。また、藤棚の南東部に存在する土坑からは数十点のイスラム陶器が出土し、イスラム陶器がかなり鴻臚館にもたらされていることがわかった。

東側テニスコート部分は、江戸時代の遺構が良く残っている。調査区北半部には堀立柱建物3棟以上が検出できた。柱穴には柱痕が残っている部分がある。城内における建物に堀立柱建物があることは新知見であり、また堀立柱の裏り方に布堀りが採用されていることは注目される。また、地下式横穴1基を追加確認した。現在調査中であるので詳細は不明。なお他の土坑では五輪塔等の風輪部分等があり、第3次調査の地下式横穴、かつて出土した板碑等から中世には墓地になっていたことが想定される。調査区中央部には方形の堅穴3基、方形の石垣を伴

7. 第6次調査の概要

う深い土坑2基などを検出したが、用途等は明らかではない。調査区南半部には遺構は少ないが、池状の石組みやそれに連なる溝などを確認している。

以上、第6次調査では遺構の保存状態が悪かったとはいえる、第5次調査区のSK-57から多量の木簡が出土し、その土坑の使用用途が解明されたこと、建物配置の追求に一歩前進したことと、江戸時代の城内における建物の実態の新知見がえられたことなどの成果を得ることができた。

(2) 遺構と遺物の概要

① SK-57

a. 遺構 (Fig. 64)

第5次調査区の南西部に検出した土坑である。SK-69、SK-70と等間隔で一直線に並び深さもほぼ同じである。3基の土坑は同一の機能を有していたと考えられる。SK-57は一番南に位置している。すぐ北側にあるSK-70と約1.8m離れている。土坑は鴻臚館の遺構検出面から約1m削平された面で検出した。

土坑はほぼ真北に主軸を向いている。検出面で南北径3.95mの東西径1.1mの隅丸長方形プランをなす。地山である頁岩の岩盤に掘り込まれている。掘削は85度の急傾斜で掘り込まれている。坑底は南北径2.6m、東西径0.6mの隅丸長方形で底は平坦である。深さは現状で3.1m、元来は4m以上あったと思われる。頁岩の岩盤を貫通し、砂層まで達している。砂層からは湧水があったような痕跡はない。

埋土の状態は、上から深さ1.4m付近までは自然に流れ込んだレンズの堆積である。下半の下層は水平に同一土層が堆積した状態で埋まっている。上層の状態は第1層、黄褐色粘質土層、炭、炭化材、焼土を多量に含み、炉址等を破壊し、凹みに投げ込んだ状態の土層である。第2層、黄褐色土と灰色粘土層が混在した土層。第3層～5層は壁周辺にみられる土層で中央部にはいたっていない。第3層は灰色の砂質土層。第4層、黄褐色粘質土層。第5層、黒色粘質土層となっている。下層の第6層は水平に堆積する土層で、漆黒色粘質土層、厚さ155cmである。下層上層では上部と下部の2層にわたってウリの種を多く含む土層がある。また、第6層は多量の木製品が存在する。最下層には若干の砂層があり、木の削りくずが若干存在した。出土遺物は他に、上層、下層共に瓦類が含まれ、上層からは青磁四耳壺、下層からは木製品の他、須恵器、土師器、新羅陶器、自然遺物が出土している。

b. 出土遺物 (Fig. 65-67)

出土遺物には多量の木製品、須恵器、土師器、新羅陶器、瓦類があり、上層から青磁器の双

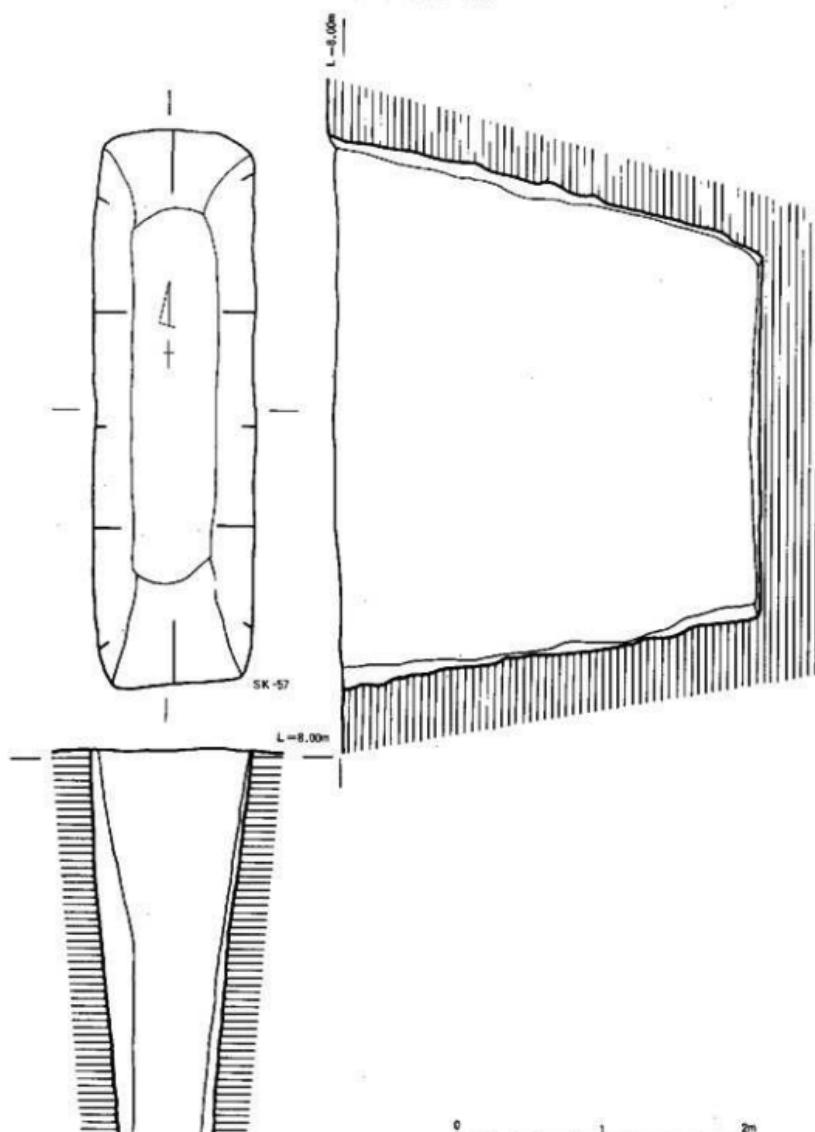


Fig.54 SK-57実測図

7. 第6次調査の概要

耳壺が出土している。木製品は木筒、刀子、錐の柄、曲物の底板、不明木製品があり、大部分を占めるのは、ヘラ状に加工された籌木である。その他、ケリや木の実等の自然遺物がある。

1は土師器高杯。杯部は浅い盤状をなす。底部と体部の境は不明瞭。口縁端部は丸くおさめる。脚は短く、脚下半部は屈曲し外方にひろがる。脚端部はやや肥厚し、丸くおさめる。杯部はヘラ磨き、脚部は横ナデ調整。胎土は砂粒を含むが精良、焼成はやや不良、色調は暗褐色をなす。口径22.8cm、器高7.5cm、脚端部径9.6cm。2は須恵器の盤、底部はヘラ切りで、ややふくらみをもつ。体部は外傾して直線的にたちあがり、口縁部は外反する。底部と体部の境は明瞭で棱線がつく。体部および内底部はヨコナデ調整。ロクロ回転は逆時計まわりである。底部の中央をややはすれて「城」の墨書きがある。胎土は砂粒を含むが精良、焼成は堅緻、色調は灰褐色をなす。口径20.4cm、器高3.0cm。3、4は土師器の甕、3は底部が丸底、体部は丸味をもってたちあがり、上半部でやや内傾し、口縁部は大きく外反し、くの字形をなす。口縁部はやや肥厚する。内底部は指で押した調整。内面には下からかきあげた斜方向のヘラ削りを加えている。体部外面は上半が縱方向、下半が横方向のハケ目調整。口縁部の内外面はヨコナデ調整である。胎土は砂粒を含み粗い。焼成は不良で、外面は淡褐色、内面は黒褐色でススが付着する。口径17.2cm、器高15.0cm。4は口縁部破片。口縁部は外反しくの字形をなす。体部外面は縱方向のハケ目調整、口縁部の内外面はヨコナデ調整。体部内面は下からかきあげた斜め方向のケズリを加える。胎土は砂粒を含み粗い。焼成不良で、外面が黄褐色、内面は暗褐色、口径21.5cm。

5は新羅陶器、椎形をなす瓶。短側の平坦面を下にして、椎形に形成し、側辺の1ヶ所に穿孔、口頸部をとりつけたもので、頭部は内傾しながらたちあがり、口縁部は外反し、途中屈曲し、やや内傾気味に直立する。端部は平坦におさめる。全体は横ナデ調整。口縁下およびその左右3ヶ所に2重に沈線をめぐらす。沈線は一部3重になる部分がある。胎土は精良、焼成良好で、赤味をおびた灰色を呈する。口径6.4cm。

木筒は73点ある。文書木筒と付札があるが大部分は付札である。以下代表的な木筒を示す。
(Fig. 65-66) なお図面の番号は鴻臚館出土木筒番号。木筒の形式分類は奈良文化財研究所の分類によった。

1は鴻臚館で最初に文字を確認した木筒である。「肥後國天草郡志記里□」の文字がある。文字の場所は現在の熊本県天草郡大町志岐にある。長さ155mm、幅31mm、厚5mm、6039型式。48は完形品「鹿脯□」の文字がある。長さ186mm、幅24mm、厚7mm、6032型式。38、55、半較されたものが接合した。頭部が圭頭状をなす。「讃岐國三木郡□□六斗」の文字がある。長さ213mm、幅21mm、厚4mm、6031型式。24、再加工され文字が一部削られている。表裏に文字が残る。「□目大夫所十四□□□」「□□十隻」、長さ152mm、幅20mm、厚5mm、現状で6011型式。66は再加工されていてもとの形、文字を失う。「□□玄米二升 五十入 □二合」の文字が判

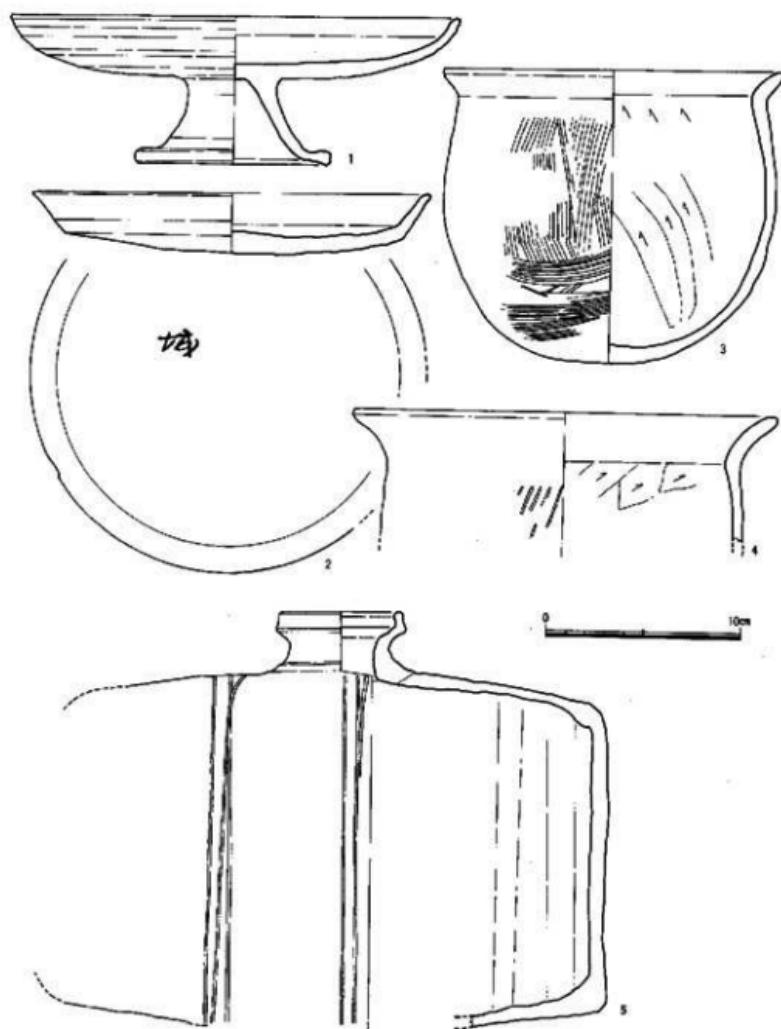


Fig.65 SK-57出土遺物実測図(1)

7. 第6次調査の概要



Fig.66 SK-57出土遺物実測図(2)

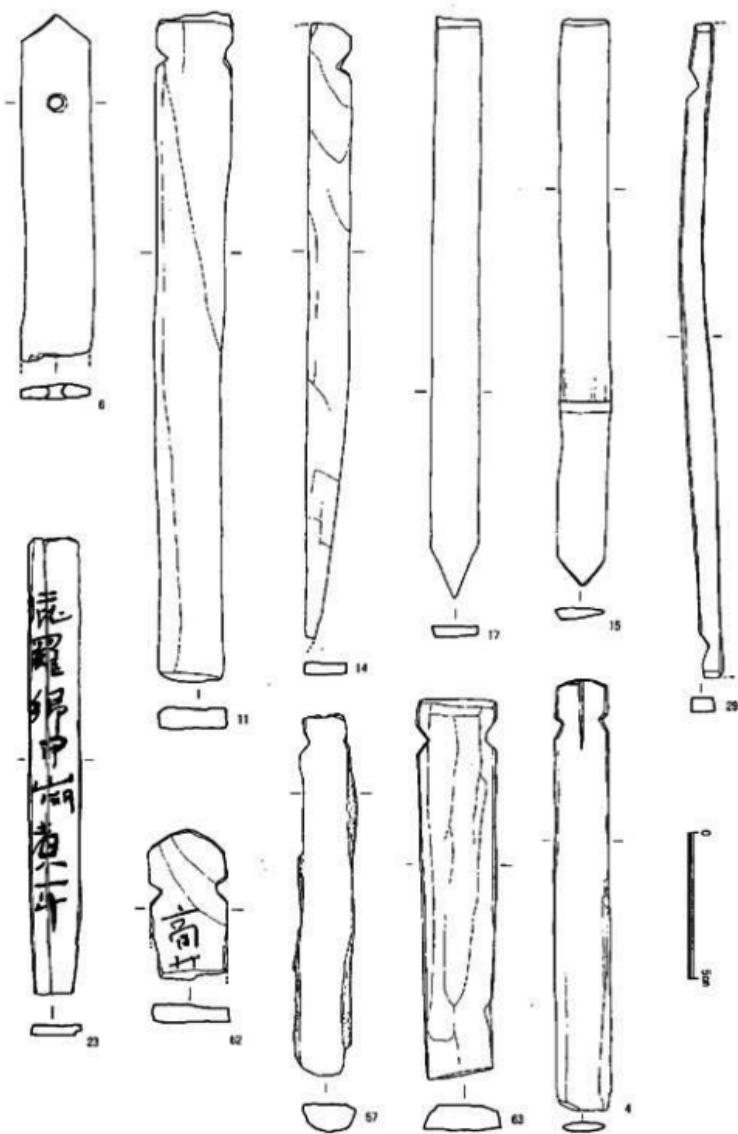


Fig.67 SK-57出土遺物実測図(3)

7. 第6次調査の概要

読できる。長さ181mm、幅12mm、厚9mm、6081型式、文書木簡か。8. 丸太の表皮部分を残す。「京都郡庸米六斗」の文字がある。頭部は主頭をなす。京都郡は現在の福岡県（豊前国）京都郡である。長さ110mm、幅21mm、厚5mm、6032型式。7は頭部が主頭状をなす。「魚「汁九斤」」の文字がある。長さ97mm、幅24mm、厚4mm、6059型式。25は両端部が主頭状をなす。「□網最上」の文字がある。長さ98mm、幅24mm、厚7mm、6031型式。12は頭部が主頭状をなす。表裏に文字がある。「京都郡庸米六斗」「□□□二口□月」長さ186mm、幅21mm、厚8mm、6032型式。70. 再加工されて細くなる。「二物大口」の文字がある。長さ73mm、幅11mm、厚4mm、6081型式。6. 頭部が尖り頭部に一孔を有する。長さ116mm、幅23mm、厚5mm、6051型式。23. 縦に3斤に割れている。2片が接合した。「庇羅郡甲□煮一斗」の文字がある。庇羅郡は現在の長崎県平戸市（平戸島）である。長さ156mm、幅17mm、厚4mm、6032型式。11は出土品中最も長い。長さ228mm、幅26mm、厚7mm、6032型式。62は頭部が主頭状をなす。「高□」の文字がある。長さ51mm、幅26mm、厚6mm、6032型式。14は半截されている。頭部は主頭状をなす。文字、墨痕はない。長さ210mm、幅14mm、厚4mm、6033型式。57. 丸太を半截してつくられる。樹皮を残している。長さ142mm、幅18mm、厚9mm、6032型式。17. 文字、墨痕はない。長さ198mm、幅16mm、厚4mm、6051型式。63. 肉眼では文字はみえない。赤外線で「鞍手郡□」の文字がみえる。鞍手郡は現在、福岡県（筑前）鞍手郡である。長さ130mm、幅27mm、厚9mm、6032型式。15は竹筒、他に1例ある。文字、墨痕はみられない。1ヶ所節がある。長さ193mm、幅17mm、厚4mm、6051型式。4. 文字なし、長さ147mm、幅19mm、厚3mm、6032型式。29. 半截されている。長さ224mm、幅10mm、厚5mm。

木簡は記載から、里制と郷里制あるいは郷制のものを含み、715年を前後するものであるが、出土上器とは年代的に若干のへだたりがある。木簡の年代を即、遺構に比定できない例である。木簡の中には半截されたものが非常に多く、これらの木簡が櫛木として再利用されたことを語るものであろう。遺構の性格と合わせて注意される。

② SK-69

a. 遺構 (Fig. 68-1)

三基並んだ土坑の中で一番北側に検出した土坑である。SK-70とは1.8m離れている。SB-31、SG-51と重複関係にある。SG-51には土坑の上部が破壊され、SB-31との直接の前後関係はわからないが、SB-31の検出面と同じ面から堀り込まれていることは、SG-51の壁面に堀り方がわずかに残っていることから明確である。

土坑は東西径1.4m、南北径1.3mの隅丸方形プランをなし、深さ4m。底面は南北0.6m、東西0.5mの梢円形で、底は平坦である。83度の傾斜で掘り込まれている。SK-57同様、

第3章 調査の概要

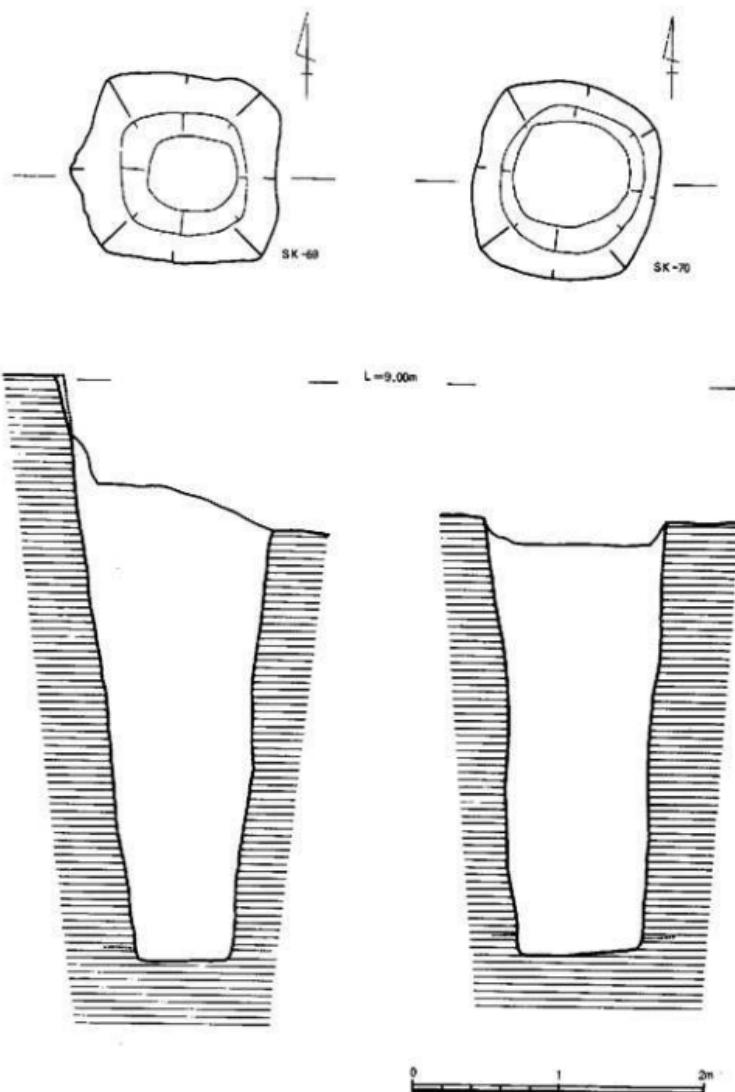


Fig.68 SK-69,70実測図

7. 第6次調査の概要

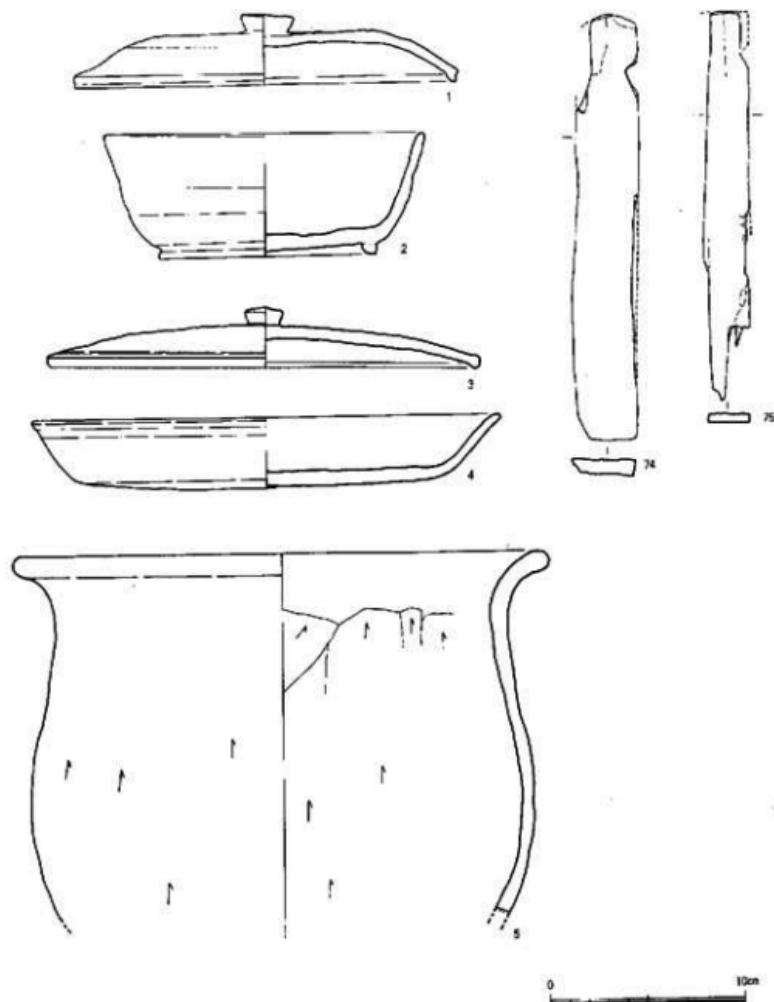


Fig.69 SK-69出土遺物実測図

岩盤の頁岩層を掘り抜き下の砂層まで達している。一見、井戸状をなしているが、底に湧水があった痕跡はない。

土層の堆積は、大きく上層と下層に分かれ土層堆積のあり方はSK-57と同様である。下層から多量の木製品が出土することも同様であるが、木製品の中に木簡状の板材が非常に多いことが注意される。ただし、この板材には文字や墨痕を認めるることはできない。上層からは漆器の整が出ている。木質部は現存せず、皮膜のみである。木簡2点が存在する。

b. 出土遺物 (Fig.69)

出土遺物には多量の木製品、須恵器、土師器、瓦類がある。木製品の大部分は、ヘラ状、板状に加工された籌木である。上層から漆器の皮膜が出土し、「二坊」の針書がある。

1、2は須恵器。1は壺。天井部は平坦で、天井部と体部の境は不明瞭。口縁部は短くおりまげ嘴状になるが増幅は丸くおさめる。天井部に擬宝珠形のつまみをつける。天井部の刃がヘラケズリ、他はヨコナデ調整である。胎土は砂を含むが精良、焼成は良好で白灰色を呈する。口径19.3cm、器高3.6cm。2は高台付杯、底部は低い貼り付けの高台をつける。体部は底部から屈曲して外傾しながら直線的にたちあがる。口縁端部は丸くおさめる。内底部は不定方向のナデ、他はヨコナデ調整である。胎土は砂粒を含むが精良。焼成は良好で灰白色を呈す。口径16.4cm、器高6.3cm。

3～5は土師器。1は壺、天井部は丸味をもち、体部との境は不明瞭。口縁部は短かく下方は折りまげられ、嘴状をなすが端部は丸くおさめる。天井部に擬宝珠形のつまみをつける。内底部の一部がナデ調整で、他はヘラ磨き調整である。胎土は精良。焼成は良好、色調は淡黄褐色を呈す。口径21.8cm、器高3.0cm。4は盤。底部はヘラ切り。体部は直線的にひらき、口縁部はわずかに外反する。端部は丸くおさめる。体部の内外面、内底部はナデ調整である。胎土は精良。焼成はやや不良で、色調は淡褐色～暗褐色を呈す。口径23.8cm、器高3.6cm。6は壺。口縁部は大きく外反し、肥厚する。体部は中位でややふくらみをみせる。体部外面は下から上へのヘラナデ調整、内面は下から上へのヘラケズリ調整である。口縁部の内外はヨコナデ調整。胎土には砂粒を含み粗い。焼成はやや不良で色調は淡褐色を呈す。口径26.7cm。

木簡2点がある。2点共に付札である。文字、墨痕は確認できない。74は長さ145mm、幅22mm、厚さ5mm、6032型式。75は破損が著しい。長さ133mm以上、幅16mm、厚さ3mm、6039型式。

③ SK-70

a. 遺構 (Fig.68-2)

三基並列した土坑の中央に位置する。SK-70、SK-57とはそれぞれ1.8m離れている。上面が削平されているために他の遺構との重複関係はみられない。

7. 第6次調査の概要

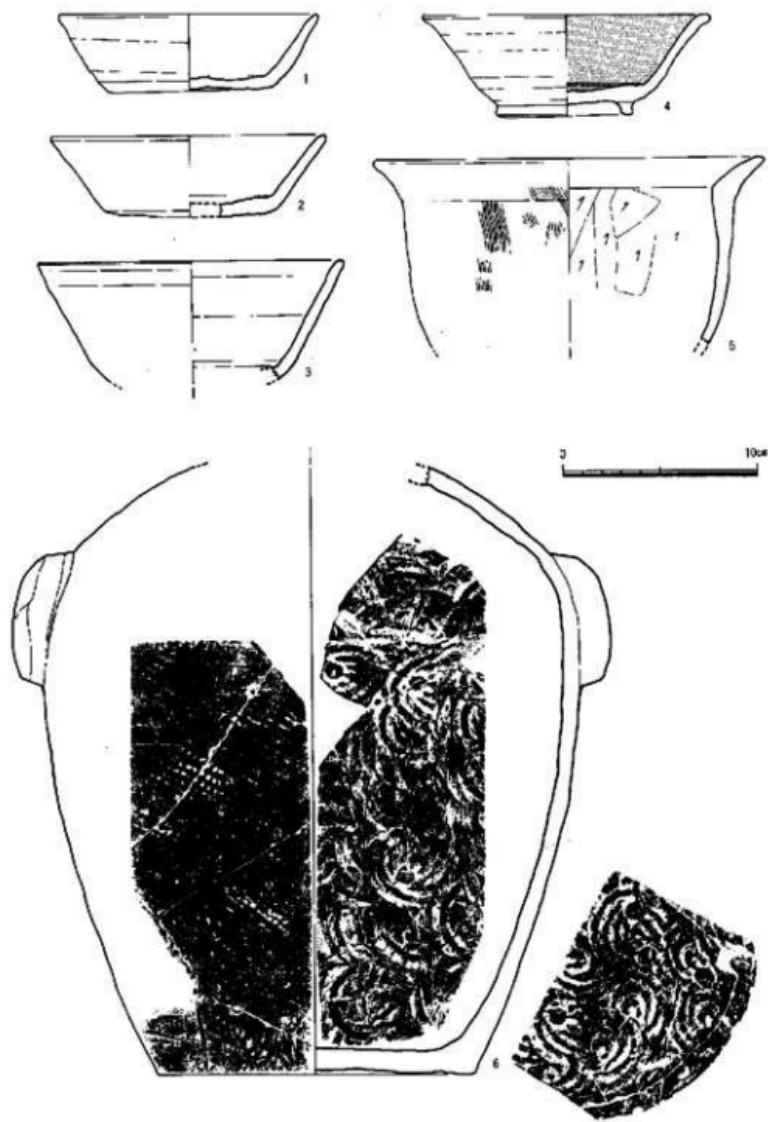


Fig.70 SK-70出土遺物実測図

土坑は東西径1.25m、南北径1.35mの円形に近い構丸方形プラン。底面は東西径0.8m、南北径0.73mの橢円形で平坦である。現状で深さ3m。85度の傾斜で掘り込まれている。SK-57、SK-69同様、岩盤の頁岩を堀り抜き下の砂層まで達している。一見、井戸状をなすのはSK-69と同様であるが、この土坑にも湧水があった痕跡はない。土層堆積のあり方もSK-57、SK-69と同様である。上層から土師器、黒色土器が出土している。下層には多量の木製品が含まれる。

b. 出土遺物 (Fig. 70)

出土遺物には瓦類、土師器、須恵器、黒色土器、木製品がある。土器類はいずれも上層出土で、木製品は下層出土である。木製品の大部分はヘラ状に加工された櫛木である。

1、2、5は土師器である。1、2は杯、底部はヘラ切りで体部は外傾しながら直線的にたちあがる。口縁端部は丸くおさめる。体部の内外面、内底部はヨコナデ調整である。胎土は小さな砂粒を含むが精良。1は焼成は良好で淡褐色をなす。口径13.2cm、器高3.9cm、2は焼成不良。淡赤褐色をなす。口径14.0cm、器高4.1cm。5は壺、体部は胴が張らず円筒状をなす。口縁部は外反し肥厚する。口縁内側に稜線が明瞭につく。体部外面は縱方向のハケ目調整。内面は下から上にかけてかきあげたヘラ削り調整。口縁部の内外はヨコナデ調整である。外面にススが付着する。胎土は砂を含み粗い。焼成はやや不良。色調は暗白褐色を呈する。口径19.9cm。

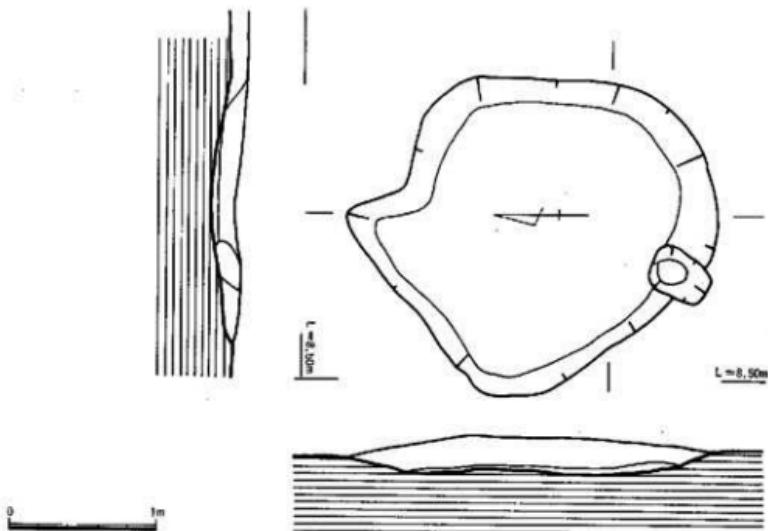


Fig.71 SK-59実測図

7. 第6次調査の概要

3、6は須恵器、3は杯、底部を失う。体部は外傾しながら直線的にたちあがり、口縁端部は丸くおさめる。体部外面はヨコナタ調整。胎土は砂粒を含むが精良、焼成は良好で、色調は白灰色。口径15.6cm。6は双耳壺。底部はわずかにあげ底をなす平底、体部はゆるやかに内湾しながら外側にひらきながらたちあがり、上位で大きく屈曲して頭部にいたる。頭部から口縁部は欠失する。体部は長胴で最大径は上位にある。上位に縫合が2ヶ所につく。外面は格子目のタタキを加えているが丁寧なナデによって大部分が消される。内面は同心円のあて具痕が残る。外底部も同様のあて具痕が残る。胎土は砂粒を含むが精良。焼成は不良で軟質である。色調は淡黄褐色をなす。底径16.6cm、器高は30.8cm以上である。

④ SK-59 (Fig.71)

調査区の削平された南部東側に検出した土坑である。この地図は近世において約1m削平されているので、この土坑は元来は1m以上の深さを有していたことになる。SK-60は約1.5m離れた東南に位置している。

土坑は南北径2.55m、東西径2.2mの不整規円形プランをなす。深さは浅く約20cmを残すのみである。底は平坦である。土坑内からは瓦類はじめ青磁器が出土している。遺存状態の良好な土坑との比較をすれば、ゴミ捨て用の土坑とみられる。

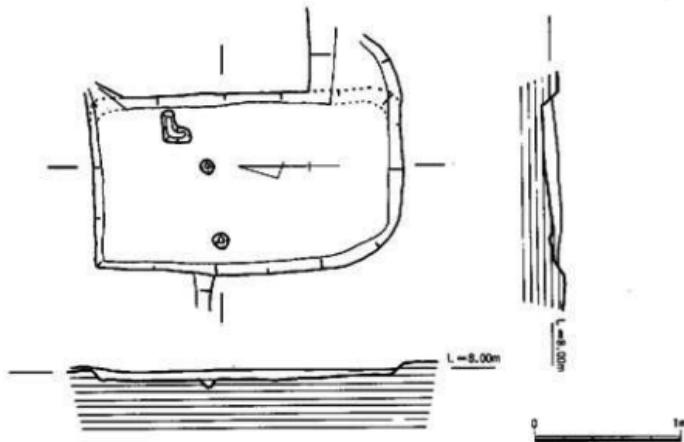


Fig.72 SK-60実測図

⑤ SK-60 (Fig.72)

SK-59と同様、調査区の削平された南半部の東側に検出した土坑である。SK-59は北西1.5mの位置にある。

上坑は南北径2.15m、東西径1.25mの長方形プランをなす。深さは10cm前後、上部の削平を考慮すれば1m以上の深さを有する。底面は平坦である。土坑の平面形や方向からすれば、SK-53、SK-54との共通点がうかがえ、単にゴミ捨て用に掘られたものとは考えられない。内部より瓦類、青磁器、土師器が出土している。

⑥ SK-75

a. 造構 (Fig.72)

調査区の北半部の東側に検出した大型の土坑である。他の造構との重複関係が多い。筑紫館に相当すると考えられる布掘りの構列（SB-150）の上部につくられ、SB-150の壁を破壊し、一部壁面をそのまま利用している。また北側に存在するSK-92、SK-93を切り、大型礎石建物であるSB-32の礎石根固め穴を2ヶ所で切り破壊している。南側ではSK-74に切られ、近世の搅乱土坑に2ヶ所で搅乱されている。埋土上にはピットが上面から掘り込まれているが、ピットの時期は明確にできない。大型礎石建物SB-32より後出する造構であることは明確である。

土坑は東西径5.55m、南北径2.35m、不整の長楕円形プラン、深さは1.1m～1.6m、底は平坦でなく凹凸がある。埋土は一部を退いて自然堆積の状態を示す。層位は以下のようになる。

第1層、赤褐色粘質土層、厚さ40cmで全体を覆う。第2層、淡茶砂質土層、第3層、岩盤である頁岩の破碎層で、この層は人為的に埋め込まれた可能性がある。第4層、焼土粒が混入した、暗赤褐色粘質土層。第5層、黒灰色粘質土層。第6層、赤褐色粘質土層。第7層、頁岩粒を含んだ茶褐色粘質土層。第8層、炭を多量に含んだ黒褐色粘質土層。第9層、炭、頁岩粒を含んだ暗褐色粘質土層。第10層、黒褐色土層。第11層、頁岩破碎層。第12層、灰、頁岩粒あまりの暗褐色土層。第13層、暗灰褐色粘質土層となっている。

土坑内から瓦類、青磁器などが多量に出土し、馬歯などの獸骨、炭などが多量に含まれることから、ゴミ捨て用の穴として掘り込まれたものと思われる。

b. 出土遺物 (Fig.74)

瓦類をはじめ青磁器、白磁器、土師器、須恵器、二彩、イスラム陶器、ガラス小玉等の他、食料残滓である獸骨、炭化物等が存在する。

1～5、6、7は椀、1は小型品、底部は削り出しの低い輪高台、体部は外傾しながら直線

7. 第6次洞査の概要

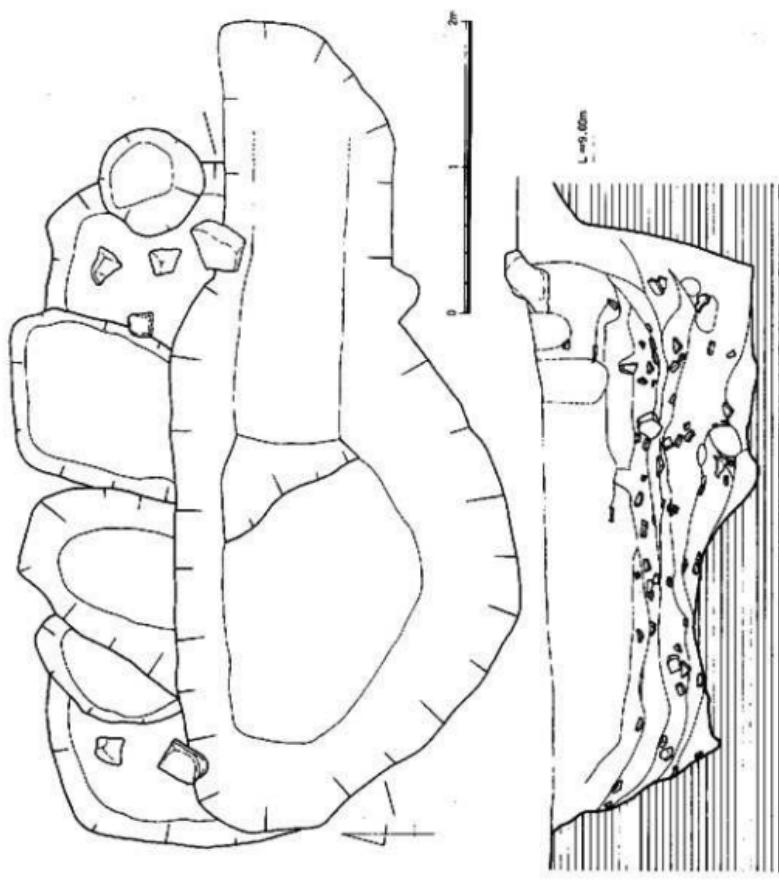


Fig.73 SK-75実測図

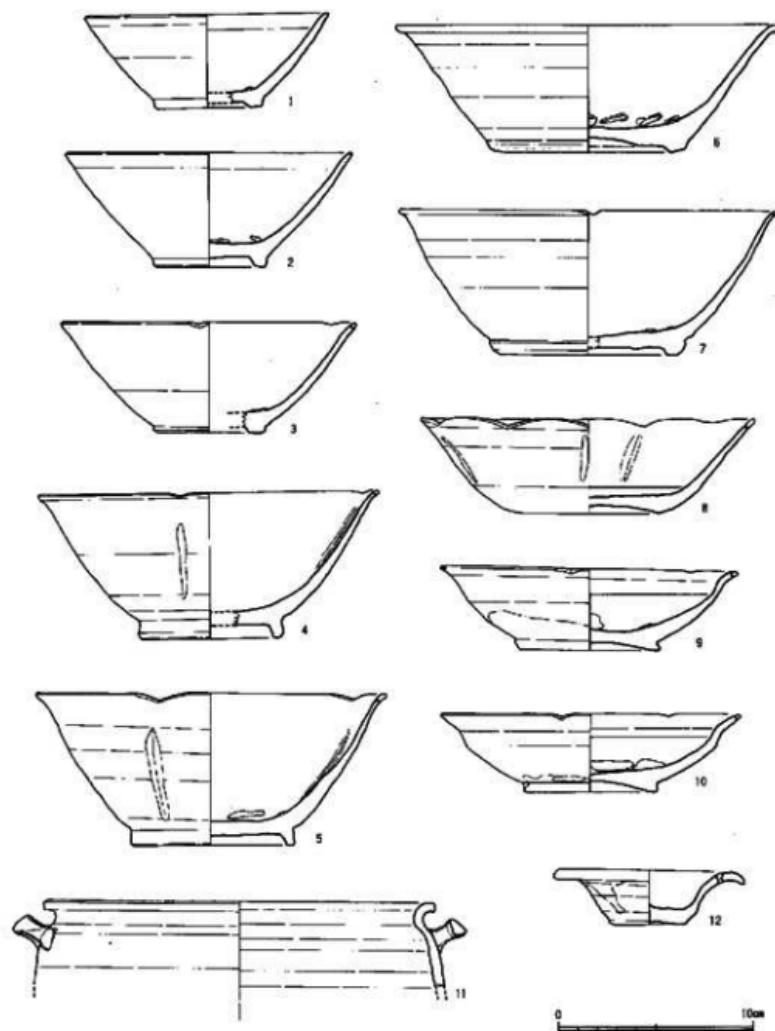


Fig.74 SK-75出土遺物実測図

7. 第6次調査の概要

的にのび、端部は尖り氣味に丸くおさめる。全面に黄土色の釉をかける。見込みと疊付きに目跡が残るが、数は不明、口径12.3cm、器高4.8cm。2. 底部は削り出しの輪高台、体部は底部から外傾しながら直線的にたちあがり、口縁端部は尖り氣味におさめる。全面に青味がかったオリーブ色の釉をかけるが、下半部は二次的に火を受けていたために白灰色になる。見込みと疊付きに目跡が残るが数は不明。口径15.6cm、器高5.8cm。3は五輪花碗である。底部は削り出しの低いやや幅広の輪高台、体部はやや丸味をもってたちあがる。輪花の刻みは浅い。刻みの下方に割線がかすかに認められる。全面にオリーブ色の釉がかけられる。見込みと疊付きに目跡が残るが数は不明。口径15.0cm、器高5.7cm。4は五輪花になる。底部は削り出しの高い輪高台、体部は丸味をもってたちあがり、口縁部は外反する。輪花の刻みは浅いが、下方の割線は深く長い。全面に青味の強いオリーブ色の釉を施釉する。疊付きに目跡が残るが数は不明、口径17.2cm、器高7.4cm。5も五輪花をなす。底部は細い削り出しの輪高台。体部はやや丸味をもってたちあがり、口縁部は外反する。輪花の刻みは深い。割線は細く長い。釉薬は二次的に火を受けているため変色し、灰白色をなす。全面施釉され、疊付きが削り取られる。見込みに6ヶ所、疊付きには数不明の目跡が残る。口径17.8cm、器高7.8cm。6. 底部は削り出しの低い輪高台。体部は外傾しながら直線的にたちあがり、口縁部は外反する。口縁端部は丸くおさめる。体部外面の下半はヘラ削り調整。青味の強いオリーブ色の釉を全面施釉する。疊付きは後から釉が削りとられる。見込みと疊付きに細かい目跡が右まわりに多く残るが数は不明。口径19.7cm、器高6.5cm。7は五輪花碗、底部は削り出しの輪高台、高台外面が斜に削られる。体部は丸味をもってたちあがり、口縁部は外反する。体部外面下半はヘラ削り調整、輪花の刻みは浅い。全面に施釉されるが、釉は二次的に火を受け灰白色～暗黄色を呈する。疊付きは釉が削りとられる。見込みと疊付きに小さな目跡が数多く残るが数は不明。口径19.2cm、器高7.3cm。8～10は皿、8は十輪花になる。底部はあげ底をなす平底。体部は丸味をもってたちあがり、口縁端部は尖り氣味に丸くおさめる。輪花の刻みは深く、輪花の下の割線は1つおきで五区分する。全面にオリーブ色の釉を施釉する。疊付きに目跡が残るが数は不明、口径17.1cm 器高4.8cm。9、10は五輪花皿。底部は上げ底の円盤状をなす。体部はひらき氣味にたちあがり、体部上半で屈曲し上方にのび口縁部は再度大きく外反する。輪花の刻みは深くない。体部外面下半は露胎、上半から内面にかけて青味がかったオリーブ色の釉をかける。釉下に白化粧がみられる。9は見込みと疊付きに5ヶ所、10は見込みと疊付きに6ヶ所の目跡が残る。見込みの目跡はそのままであり、使用痕もないで9、10は共に未使用品である。9は口径15.2cm、器高4.2cm。10は口径15.2cm、器高4.0cm。11は双耳壺。体部は長胴をなすと考えられ、最大径は上位にある。頸部は短く、口縁部は大きく外反し、口縁端部は平坦に仕上げる。内外面に青味の強いオリーブ釉をかける。肩部に横耳をつける。口径20.0cm。12は蓋、底部は平底で体部

は外傾しながらたちあがり、口縁部は大きく外反し折り返され、端部はとがり氣味におさめる。口縁に孔一個をあける。内面と外面の一部に黄白釉をかける。底部に目跡が残るが数不明。口径9.8cm、器高2.8cm。

① SK-80

a. 造構 (Fig.74)

調査区北半部の東端に検出した溝状の土坑である。SB-32の基壇、SB-150と重複関係にあり、SB-32とはSK-80が基壇内でおさまり、直接SB-32に伴う遺構と切り合うことがないため不明であるが、出土遺物や他例からするとSB-32を切り込んでSK-80がつくられたと推定される。

土坑は南北径4m以上、東西径0.7mの溝状遺構に、南北径3.0m、東西径1.3mの上坑が切りあったような状況を示すが、土層に切り合ひ関係はみられないことや、青磁器が溝状遺構の底面に接して存在し、さらに土坑状遺構の底面まで拡大して存在することなどから同一の遺構と推定した。ただし、次のような想定も可能である。溝状遺構が最初に堀削され、それがまだ使用中ないしは、廢棄された直後の埋まりきらないうちに、土坑状遺構を重なり合うよう堀削し、青磁器類を投棄したとする考え方である。いずれにしても、時期が大きく変わるものではない。

土坑内には完形品に近い青磁器、(碗、皿を主体とする)約200個体が重なりあうように捨てられている。青磁器の大部分は二次的に火を受け、目土がそのまま残っている未使用品ばかりである。SK-38、SK-56の下層、SK-61と同様の現象で、出土青磁器も同一様式のものである。この青磁器には極少量であるが優品の白磁器が伴う。

b. 出土遺物 (Fig.76)

約200個体の青磁器が重なり合って出土した。極少量の白磁器が伴う。青磁器はいずれも目土が焼成時そのままで残り、器面にも使用の痕跡はみられずその大部分が二次的に火を受けている。SK-38、SK-56の下層、SK-61と同様の出土のあり方で、出土する青磁器の種類、時期は同じである。17個を図示した。

1~4は五輪花の皿。底部はややあげ底の円盤状をなし、端部は外方へ張る。体部はふくらみ気味に外に開き、中位で屈曲し、口縁部で大きく外反する。体部外面の下半は露胎で、上半から内面にかけて黄味をおびた青白色~淡オリーブ色の釉をかけるが剥離が著しい。釉下に白土で化粧がけをする。1、3、4は見込みと墨付きに6ヶ所の目跡、2は見込みと墨付きに8ヶ所の目跡が残る。1は口径14.8cm、器高4.0cm、2は口径15.0cm、器高4.4cm、3は口径15.3cm、器高4.0cm、4は口径15.2cm、器高3.9cm。5、6は杯、底部はあげ底状の平底、体部は外傾し

7. 第6次溝金の概要

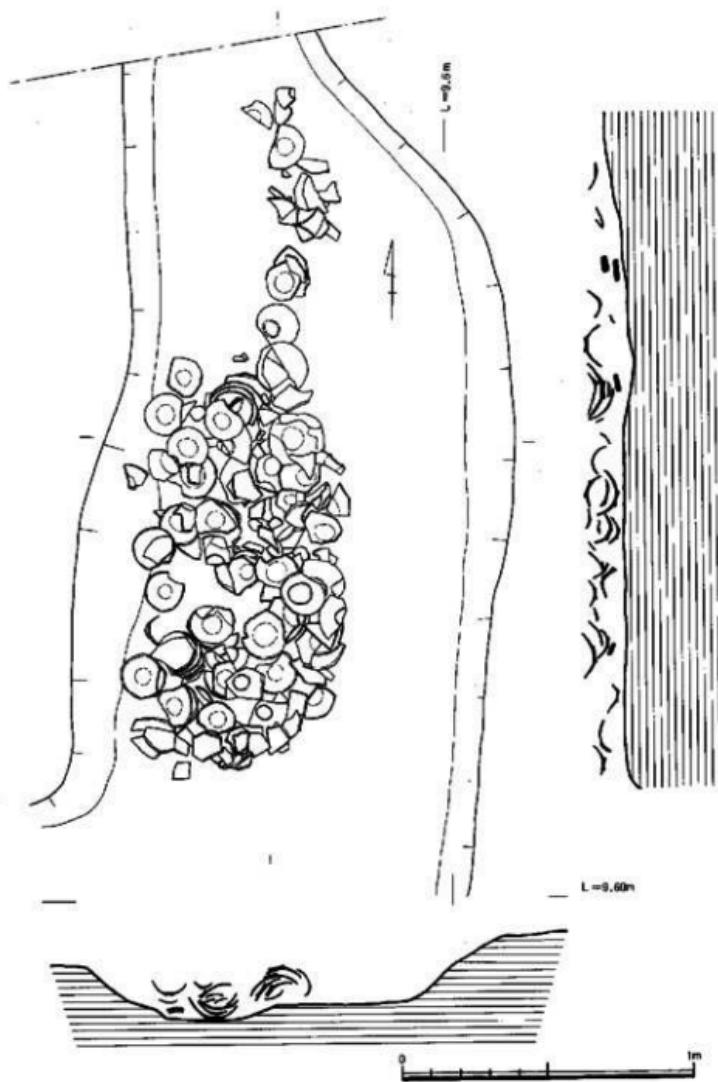


Fig.75 SK-80実測図

第3章 洪査の概要

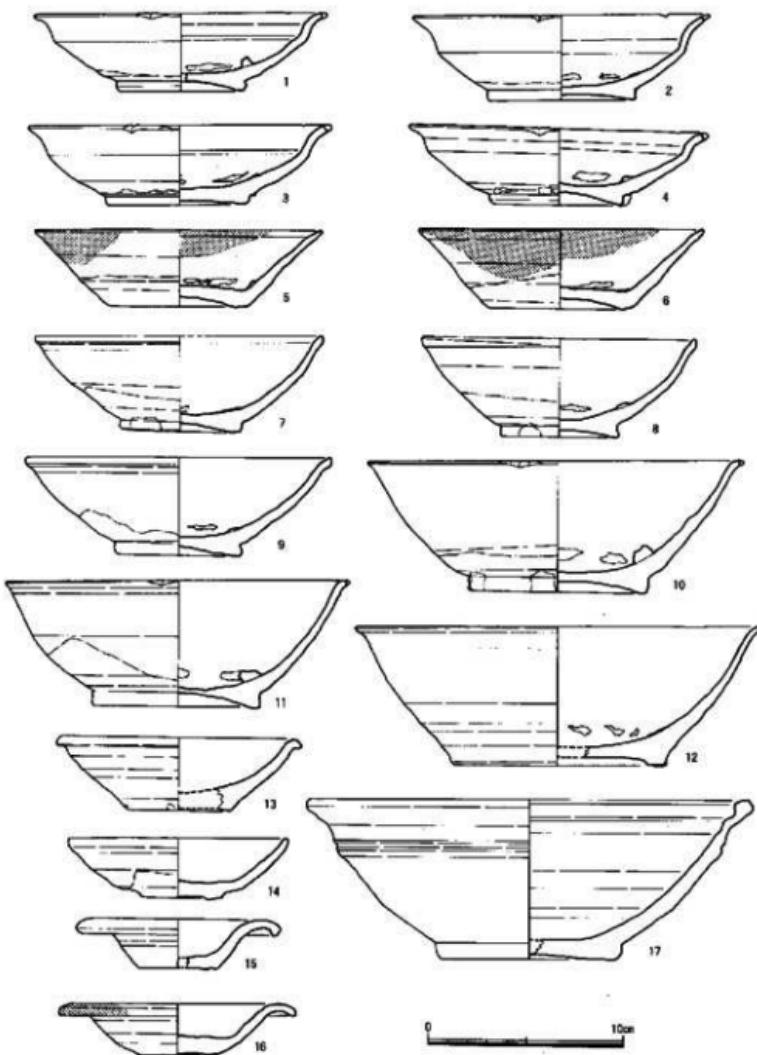


Fig.76 SK-80出土遺物実測図

7. 第6次調査の概要

ながら直線的にたちあがり、口縁端部は丸くおさめる。体部外面は露胎で、上半から内面にかけて釉をかけるが、釉は剥離し不明。口縁部3ヶ所の内外に褐釉をかける。釉下に白土による化粧がけがみられる。5は見込みに5ヶ所、疊付きに8ヶ所の目跡が残る。口径14.5cm、器高3.9cm。6は見込みと疊付きに6ヶ所の目跡が残る。口径14.4cm、器高4.1cm。7～9は中型の碗、底部はややあげ底をなす円盤状。体部は丸味をもってたちあがり、口縁部はやや外反し肥厚する。小さい玉縁状をなす。体部下半は露胎、上半から内面にかけて青味がかった黄白色～やや赤味をおびたオリーブ色の釉をかける。釉下に白土による化粧がけがある。7は見込みに3ヶ所、疊付きに5ヶ所の目跡が残る。口径14.6cm、器高4.9cm、8は見込みと疊付き5ヶ所の目跡が残る。口径14.6cm、器高4.9cm、8は見込みと疊付きに5ヶ所の目跡が残る。口径13.9cm、器高5.0cm。9は見込みと疊付きに6ヶ所の目跡が残る。口径15.5cm、器高6.2cm。10、11は五輪花碗、底部がややあげ度で円盤状をなす。体部は丸味をもってたちあがり、口縁部は外反する。輪花の刻みは浅い。体部外面下半は露胎、上半から内面にかけて10が黄味の強い淡オリーブ色、11が淡黄緑色の釉をかける。10は見込みに7ヶ所、疊付きに8ヶ所、11は見込みと疊付きに7ヶ所の目跡が残る。10は口径19.4cm、器高6.7cm、11は口径17.7cm、器高6.4cm。12. 底部は削り出しの低く幅広い輪高台。体部は丸味をもってたちあがり、口縁部は外反する。体部外面下半はケズリ調整。全面施釉され、疊付きのみ釉が削りとられるが、釉は剥離し不明。見込みと疊付きに小さな目跡が多数残るが数は不明。口径20.5cm、器高7.1cm。13は小型の杯、底部はわずかなあげ底の平底。体部はふくらみながらたちあがり、口縁部は外反気味に肥厚し、玉縁状をなす。体部外面下半は露胎、上半から内面にかけて青灰色の釉を施す。疊付きに目跡が残るが数は不明。口径12.5cm、器高3.7cm。14は褐釉の灯蓋、平底で体部との境に段がある。体部は開き気味にたちあがり、口縁端部は尖り気味におさめる。体部外面下半は露胎、上半から内面にかけて褐釉が施され、部分的に剥離する。内面に灯台がつけられるが欠失している。口径11.2cm、器高3.1cm。15、16は蓋、底部は平底で、体部は外傾しながらたちあがり、口縁部は大きく外反し折れ曲がる。口縁端部は丸くおさめる。内面に15は黄白色、16は青灰色と口縁部に部分的に褐釉がかけられる。口縁部裏面に目跡が残るが数は不明。15は口径10.5cm、器高2.5cm、16は口径11.9cm、器高2.6cm。17は無釉陶器の鉢、底部はわずかにあげ底の円盤状。体部は外傾しながらたちあがり、上位で屈曲し反る。口縁端部は丸くおさめる。口縁内側に凹線2条がめぐらされる。口径22.6cm、器高8.1cm。

⑧ S K - 82

a. 遺構 (Fig.77)

第5次調査区北半部の中央に近い東端で検出した土坑である。S B - 50の基壇に掘削されて

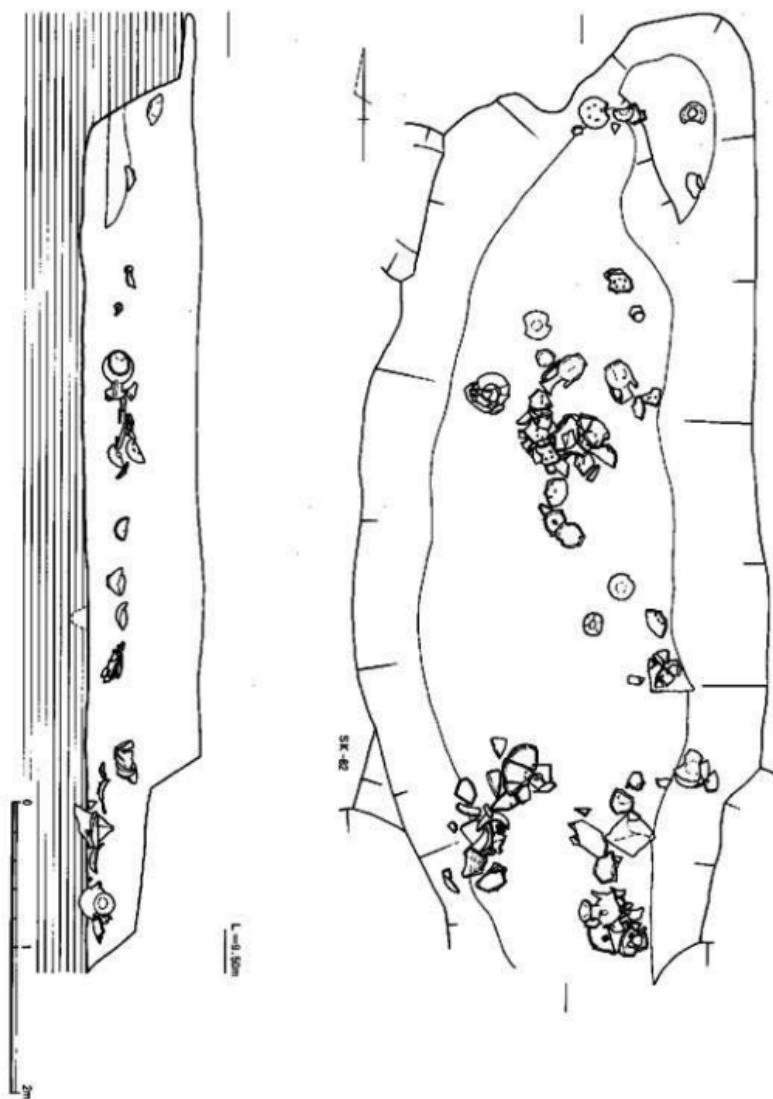


Fig.77 SK-82実測図

7. 第6次調査の概要

いて、SB-50をはじめ、SK-83、SK-85、SK-89、SK-90、SK-100と切り合い関係にある。SB-50とは礎石根固め穴二個との直接の切り合いがある。一個は完全に坑内にはいっており、土坑の掘削によって消滅し、他の一個は一部が切られていて、SB-50より新しい。SK-83とSK-90とSK-82に切られている。SK-83とSK-90は元米同一の土坑と考えられる。SK-89との切り合い関係は平面的にも土層断面においても判断できなかった。SK-85とSK-100はSK-82を切っていて後出である。

土坑は、東西径4.95m、南北径2.1mの長方形円形プランをなす。深さは65~70cm、わずかに凹凸がある。壁は垂直に近いたちあがりを見せる。

埋土の状態は自然堆積、層序は以下のようになっている。第1層、赤褐色粘質土層、第2層は褐色砂質土を含んだ灰色砂質土層、第3層、暗褐色土層、第2、3層は部分的な層の堆積、第4層、岩盤の頁岩の粒子を含んだ赤褐色粘質土層、第5層は赤褐色粘質土層、第6層、黒褐色粘質土層となっている。

埋土中からは多量の遺物が出土する。瓦類は全層まんべんなく出土するが、青磁器は第5層中に含まれている。完形品に近いもので約50個体がある。いずれも二次的に火を受けていて、目土がそのまま残った未使用品である。SK-38、SK-56、SK-61、SK-80と同様のあり方で、時期も同じである。この土坑の特徴としては、水注が5個体と多く、器種によって倉庫への収納が異なっていたことを示唆するものかもしれない。なお、埋土中からは馬歯など獸骨を出土しているので、ゴミ捨て用の穴として利用されていることがわかる。

b. 出土遺物 (Fig. 78, 79)

出土遺物には瓦類、青磁器、土器器、貨幣（開元通宝）、食料残渣の自然遺物等がある。この土坑出土の青磁器も目土がそのまま残り、使用痕がみられず、大部分が二次的に火を受けている点などは、SK-38、SK-56、SK-61、SK-82出土青磁器と同じ現象である。出土青磁器も同時期のものである。この土坑に水注が多いことは注意される。

水注は5個体である。それぞれに大きさや細部に違いがある。1. 底部はあげ底の円盤状をなす。胴部は卵形をなし、最大径は中位にある。頸部はあまりしまらず直立し、口縁部は外反し端部は丸くおさめる。注口は胴中位より上部につけられ、やや外傾しながらたちあがり、先端部でさらに外反する。注口部の断面は円形、ヘラ削りで調整している。注口の反対側に把手がつけられる。把手幅2.6cmの粘土板を口縁直下と胴中位とに環状にとりつけたもので、外面に沈線5条を縱位にいれている。他の相対する部分には頸部と肩部を結ぶ粘土板の縦耳がつく。体部下半から頸部内面に青味をおびた灰白色の釉を施す。縦耳の下の胴中位に長方形の楊柳の斑を施し、縦い線で結ぶ、口縁部に3ヶ所、把手、注口の一部にも楊柳がかけられる。袖下

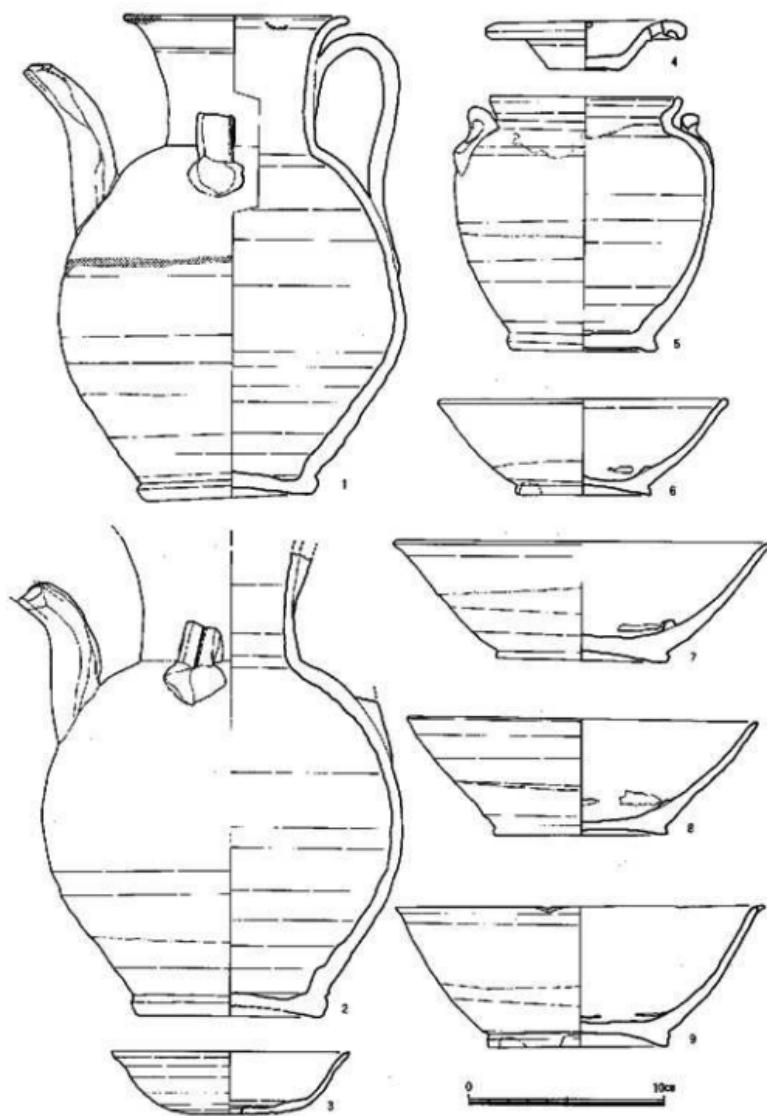


Fig.78 SK-82出土遺物実測図(1)

7. 第6次調査の概要

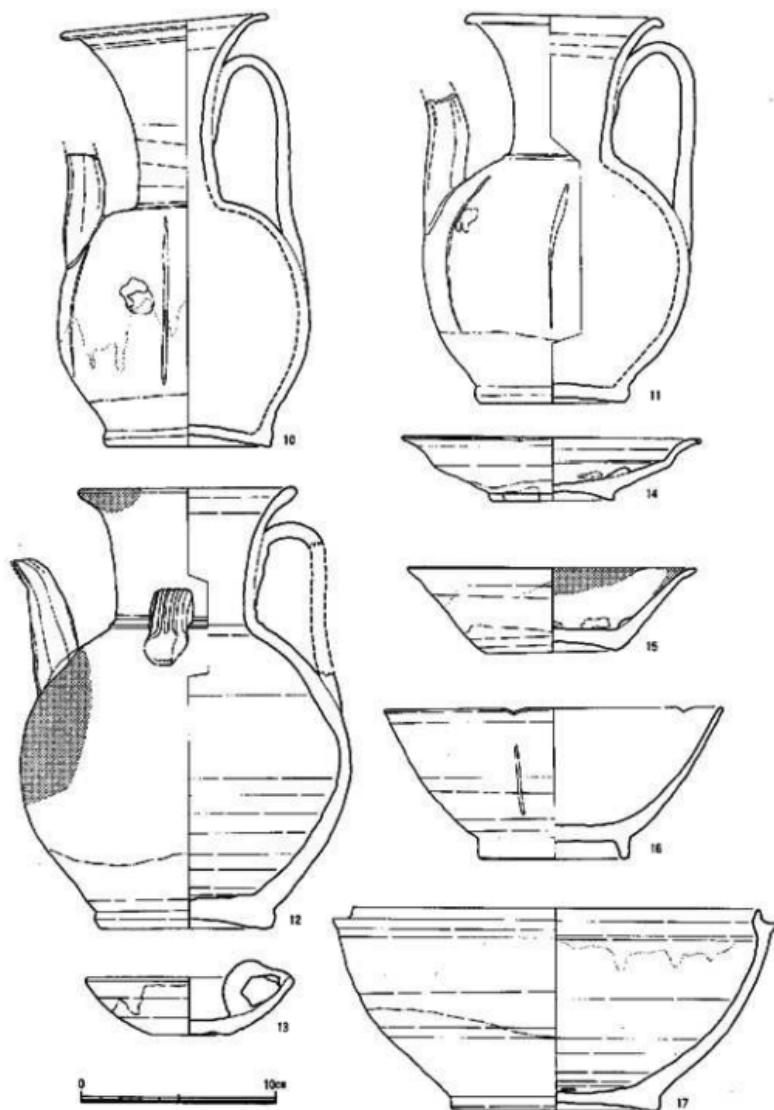


Fig.79 SK-82出土遺物実測図(2)

第3章 調査の概要

に白土による化粧がけがみられる。底辺付近は露胎である。口縁部に目跡が7ヶ所残っている。口径11.6cm、器高24.5cm、底部径8.5cm、胴部最大径17.5cm。2は口縁と把手の一部を失う。器形の特徴は1と同様である。縦耳には縦位に一条の沈線を入れる。釉は変色しているが黄味がかった淡オリーブ色。施釉の範囲、褐釉のかけ方、化粧土は1と同様、底部径9.0cm、胴部最大径18.4cm、器高は24.3cm以上で1よりやや大きい。10は小型品、底部はあげ底の円盤状をなし、体部は珠形で、瓜割（6区画）、頸部はしまり、ラッパ状にたちあがり口縁部は大きく外反し、端部は丸くおさめる。体部と頸部の境、注口部は肩につけられ、垂直にたちあがり、屈曲して先端が外傾するとおもわれるが、先端部を欠く。ヘラ削りによって調整されている。断面形は円形。注口の相対するところに把手がつけられる。把手は口縁下と胴中位を環状に粘土板で結んだものである。把手の外面には3本の縦位の沈線が施される。体部下半から頸部内面にかけて黄味がかった淡オリーブ色の釉がかけられる。釉下に白土による化粧がみられる。口径10.7cm、器高21.6cm、底径8.4cm。胴部最大径は12.8cm。11も小型品である。器形の特徴は10と同様であるが、より端整である。注口は中位よりやや上位につけられる。垂直にたちあがり、屈曲して外傾しながら先端にいたるが先端を欠く。断面は円形、ヘラケズリによって調整される。反対側に把手がつく。把手は幅2.5cmの粘土板で口縁下と胴中位とを環状に結んでいる。把手の外面には沈線を縦位に4本入れている。底部付近は露胎で、体部下半から頸部内面にかけて、ややくすんだ黄白色の釉をかけるが、剥落が著しい。釉下に白土で白化粧する。口径10.1cm、器高19.8cm、底径7.3cm、胴部最大径13.6cm。12は1、2と同様の器形や特徴をもつ。注口はわずかに外傾しながらたちあがり、先端部がわずかに屈曲し外反する。把手は一部を欠いている。縦耳には縦位に4本の沈線が入れられる。釉は褐色をおびた灰白色で体部下反から頸部内面まで施される。口縁部3ヶ所、体部2ヶ所に斑文を入れ細い線でつないだように褐釉を施す。口径11.1cm、器高22.6cm、底径8.5cm、胴部最大径16.7cm。4は蓋、底部はわずかにあげ底をなす平底。体部は外傾しながらたちあがり、口縁部は大きく外反し、折れ込む。端部は丸くおさめる。口縁部に1孔が穿たれる。内面から口縁外面の一部にかけて、黄味がかった乳白色の釉をかける。釉は剥落が著しい。口縁裏面に目跡が残るが、数は不明。口径10.2cm、器高2.5cm。5は双耳壺、底部は平底で、端部は外に張り出す。体部は丸味をもってたちあがり肩部で屈曲する。胴部最大径は上位にある。頸部は短く内傾し、口縁部は内側に段をもつ。口縁端部は丸くおさめる。肩部に横耳がつくが対称でなく、やや片寄っている。体部外面上半から口縁部内側に黄味の強いオリーブ色の釉をかける。釉下に白化粧はない。口径9.7cm、器高12.9cm、底径7.1cm。6～8は碗、底部をあげ底で円盤状をなす。体部は丸味をもってたちあがる。6は口縁部がわずかに肥厚する。7はわずかに外反する。体部外面の下半は露胎、上半から内面にかけて釉をかける。釉下に白上で化粧する。6は灰黄色の釉で見込みに5ヶ所、

7. 第6次調査の概要

壺付きに6ヶ所の目跡が残る。口径9.4cm、器高6.1cm。7は黄味がかった灰白色の釉、口縁と見込みの釉の剥離が著しい。見込みに8ヶ所、壺付きに数不明の目跡が残る。口径19.2cm、器高6.1cm。8は黄味の強い淡オリーブ色の釉、全体に剥離が激しい。見込みと壺付きに7ヶ所の目跡が残る。口径17.8cm、器高6.0cm。9は五輪花紋、底部はあげ底で円盤状をなす。体部は丸味をもってたちあがり、口縁部は外反する。輪花の刻みは浅い。体部外面の下半は露胎。上半から内面にかけて、白味がかった淡オリーブ色の釉をかける。釉下に白土による化粧がみられる。見込みに8ヶ所、壺付きに7ヶ所の目跡が残る。口径18.7cm、器高7.2cm、13は灯盞、底部は小さなヘラ切りの平底、体部は丸味をもってひらき、口縁端部は丸くおさめる。灯台は粘土組を環状に貼り付けたものである。体部外面の下半は露胎、上半から内面にかけて黒褐色の釉を厚めにかける。壺付きに目跡が残るが数は不明、口径10.4cm、器高2.9cm。14は五輪花皿、底部はあげ底で円盤状をなす。体部は直線的に外にひろがり、中位で屈曲してたちあがりながら外反する。口縁端部は丸くおさめる。輪花の刻みは浅い。体部外面の下半から内面にかけて青色がかった黄白色の釉をかける。釉下に白化粧。見込みと壺付きに6ヶ所の目跡が残る。口径15.3cm、器高3.3cm。15は杯、底部はあげ底の平底。体部は外傾しながら直線的にたちあがり、口縁部がわずかに外反する。体部外面の下半は露胎で、上半から内面にかけて、黄味がかった淡いオリーブ色の釉をかける。口縁部の内外の3ヶ所に褐釉の斑文がある。見込みと壺付きに7ヶ所の目跡が残る。口径14.9cm、器高1.3cm。16は五輪花紋、底部は削り出しの高い輪高台。体部はやや丸味をもってたちあがり、口縁端部は丸くおさめる。輪花の刻みは浅い。輪花の下の割線は細い。全面に黄味がかった淡オリーブ色の釉を施釉し、壺付きの釉を後から削りとする。他と比較し優品である。壺付きに8ヶ所の目跡が残る。口径17.2cm、器高7.7cm。17は蓋付き鉢。底部はあげ底の円盤状、体部は内溝しながらたちあがり、受部は平坦で横に張り出し、蓋受けのたちあがりは低く内傾する。体部外面の下半は露胎、上半から内面にかけて黄味の強いオリーブ色の釉をかける。釉下は白化粧。受部に11ヶ所、内底部に6ヶ所、壺付きに8ヶ所の目跡が残る。口径20.8cm、受部径22.8cm、器高10.3cm。

3は土器の杯、底部はヘラ切り、板目压痕が残る。体部は丸味をもってたちあがり、口縁部は外反し、端部は丸くおさめる。口径12.0cm、器高3.2cm。

⑤ SK-100

a. 遺構 (Fig.81)

第5次調査区北半中央部の東端に検出した土坑である。SK-82、SK-85と切り合い関係にあり、SK-82を切り、SK-85に切られている。

土坑は南北径1.7cm、東西径1.6cm以上の不整円形プランをなす。深さ0.3mで底面は平坦で

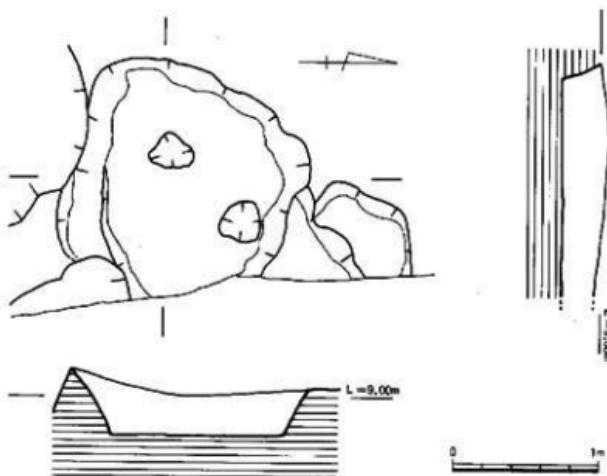


Fig.80 SK-100実測図

ある。土坑からは瓦類、陶磁器類の他に、馬齒などの獸骨、炭等が出てくるので、ゴミ捨て用として掘削されたものであろう。

b. 出土遺物 (Fig.81)

出土遺物には瓦類をはじめ、青磁器、白磁器、須恵器、上師器、新羅陶器、食料残滓である獸骨などがある。新羅陶器2点を図示した。

新羅陶器は2点共大型の壺である。1は半分が現存する。底部はあげ底になった平底で、体部下半は外傾しながら直線的にたちあがり、上半部は肩曲して内湾する扁平なものとなる。胴部最大径は中位にある。頸部は短かく、直立し、口縁部は外反する。口縁端部はヘラナデされ平追である。口縁部内側には凹線一条をめぐらしている。胴部最大径よりやや上位に横耳がつけられる。2個が残存するが元来は5個付けられたと思われる。体部外面の上半部は平行の凹線が数条にわたってひかれその上からナデ調整。器壁は0.5~0.7cmと薄く、特に底部は0.2cmと極端に薄い。下半と内面はナデ調整。全面上に黒色顔料（漆か？）が塗られている。全体に胎土の空気が充分に抜けていなく、無数に火ぶくれ状のふくらみがみられる。体部上半から口縁部および内底部には自然釉が付着している。底部径27.1cm、口径19.3cm、器高30.1cm、胴部最大径42.6cmで、全体に扁平である。胎土は精良で焼成は堅緻。内外面は黒色。自然釉がかかる部分は黒灰色をなす。2は体部下半を欠く。1と同様の器形をなす。胴部最大径は中位にあり、

7. 第6次調査の概要

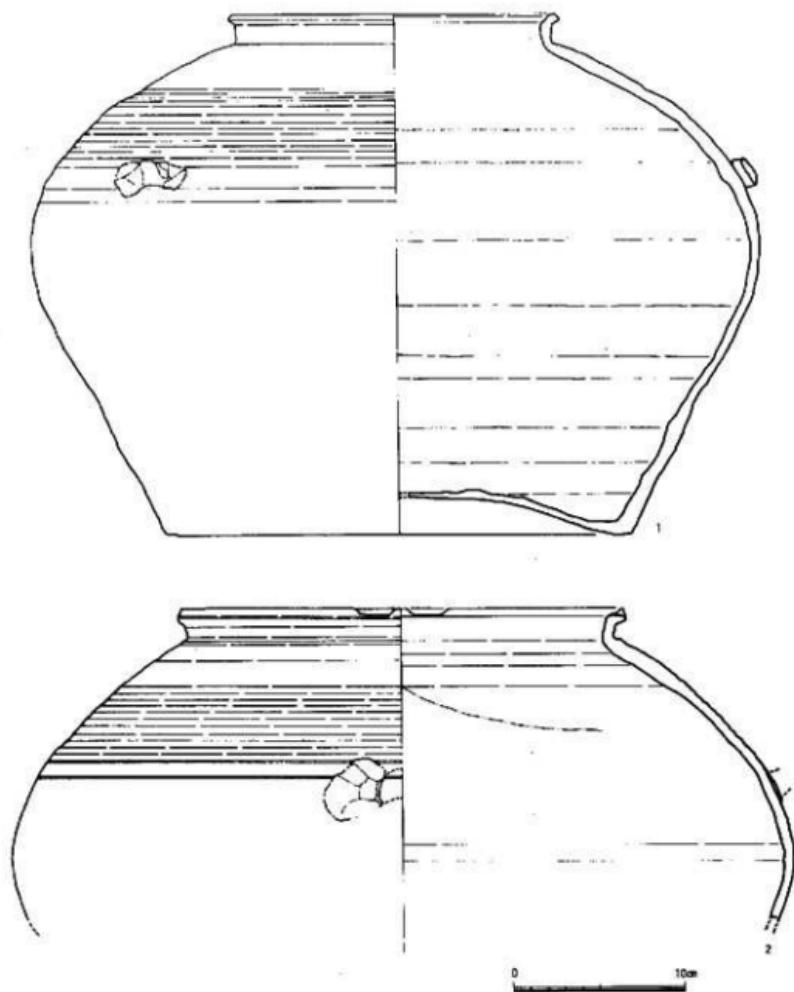


Fig.81 SK-100出土遺物実測図

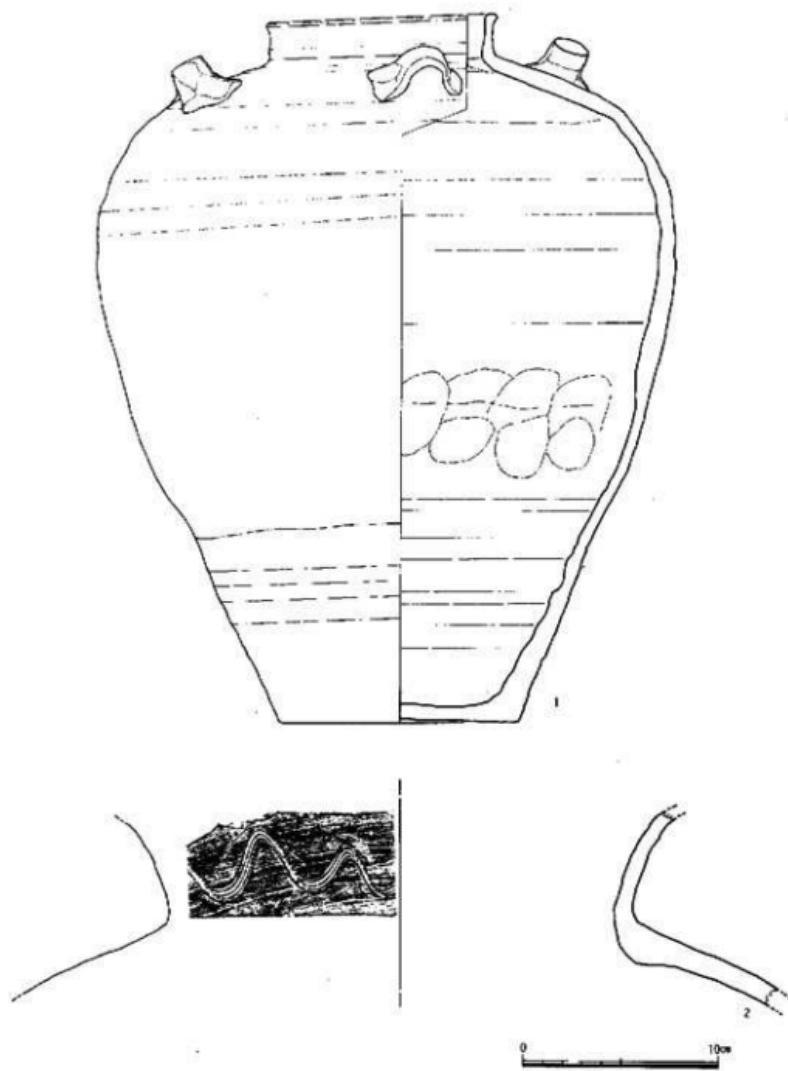


Fig.82 SK-105出土遺物実測図

7. 第6次調査の概要

肩部は内湾し扁平になるとみられる。頸部と体部の境に段が形成される。頸部は短かく外傾しながら、口縁部は外反する。口縁端部はつまみあげられたようにたちあがり尖り気味におさめる。内側は平坦な面がつくられ稜線がつく。胴部最大径のやや上位に横耳が対称に2個つけられ、それに対応して口縁端部のたちあがりが削りとられている。耳の部分に鋭い沈線が2条めぐらされ、それより上位に浅い凹窓15条がめぐらされている。外面と口縁部内側に黒色顔料(漆か?)が塗られている。胎土は精良で灰褐色。焼成は堅致。外面が灰黒色、内面は青灰色をなす。口径25.8cm、腹部最大径45.6cm。底部片があるが同一個体かどうかは判断できない。

④ S K - 105

a. 遺構

第5次調査区北半部中央の東側に検出した土坑である。S B - 50の基壇、S G - 51と切り合った関係がある。S B - 50との関係は不明である。S G - 51には切られていて先行する遺構である。

土坑は小型で、東西径1.1m、南北径1.5m以上の平方形プランをなす。深さ約30cm、断面形は逆台形状をなす。土坑の中央底面には、ほぼ完形の四耳壺が横たわっていた。土坑の性格については不明。

b. 出土遺物 (Fig. 82)

瓦類、青磁器、白磁器、綠釉陶器、須恵器、土師器等がある。土坑が小さいので量的には多くない。2点を図示した。

1は四耳壺、大型品である。底部はわずかにあげ底の平底。体部は底から直接外傾しながらたちあがり、肩部でゆるやかに内湾しながら頸部にいたる。頸部最大径は上位にある。長脚で肩が張る。頸部は直立し、口縁部は外反気味に肥厚する。肩部に横耳が4ヶ所につけられる。外面にはナデ調整。内面はロクロ痕が明瞭であるが、中位よりやや下は指押えによって調整している。この部分だけが器壁が薄くなっている。底部近くは露胎で、下半から頸部内面にかけて黄緑色～青味がかかった淡オリーブ色の釉が施されるが剥離が著しい。釉下には化粧土はみられない。口径11.8cm、器高36.3cm、胴部最大径29.4cm。2は大型の綠釉陶器の壺である。体部は大きく張り、頸部は外傾しながらたちあがる。口縁部を欠き、形体は不明。体部外面には格子目タキを加え、その上にナデ調整をおこなっている。内面には平行の受具の痕跡が残る。頸部には柳目波状文を施している。胎土は微砂粒を含むが精良、焼成は不良で軟質である。外面に黄味の強い灰白色の釉をかける。以上の他、やや太めの沈線で草花文を描く青磁器もある。

⑪ SB-150 (Fig.82)

第6次調査区は現在調査中である。鶴鱗館間連造構については、(1)の調査の概要でのべたので、ここで筑紫館間連造構についてみてみよう。筑紫館間連造構と思われるのに、布掘りの掘立柱造構がある。第5次調査区から第6次調査にかけて検出した。幅1.2m前後、深さ約1.6m、柱は径50cm前後と大きく、柱間は、ほぼ2.1mの等間である。布掘りの掘方内は版築状によく固められている。S-98.5°-Eの方向に約71mを確認した。東側は調査区外にのび、西側はSB-31の東側礎石の下で北方向に直角に曲る。北側は展示館の中にはいるが下層が未調査のため不明。SB-50の雨落ち溝およびその延長の排水溝と重複するが、明らかに先行する造構である。排水溝とはわずかに軸線を異にする。掘り方内より、少量の縄目タタキの平瓦が出土している。配置からみれば、SK-57等と同時期とみられる。

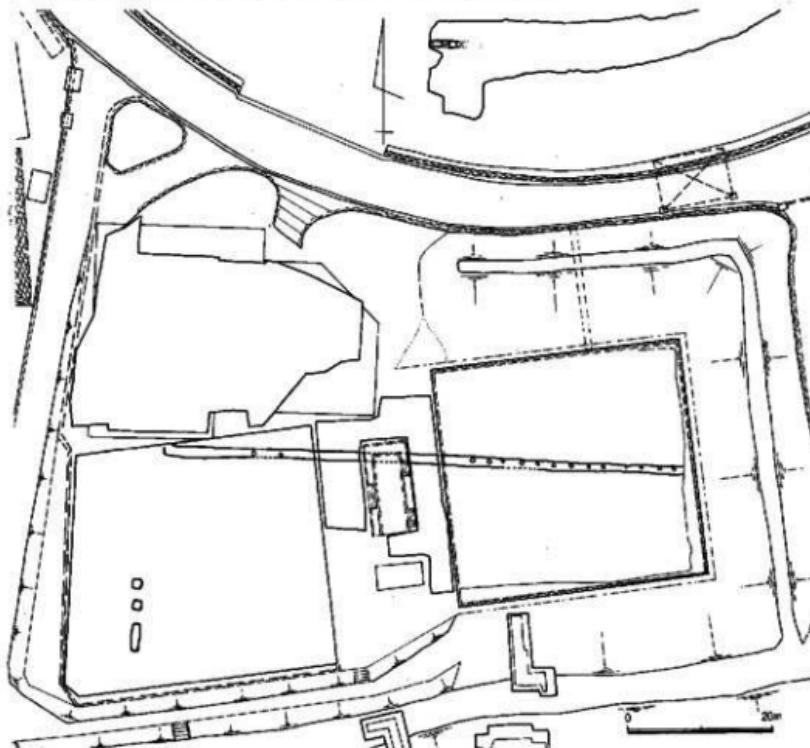


Fig.83 SB-150実測図

第4章 調査の若干のまとめ

鴻臚館の調査について第1次調査から第6次調査までの調査概要をみてきたが、ここで若干のまとめをして、今後の調査、報告書作成の目安としたい。

1. 遺跡の時期

遺跡の立地でみたように、福岡城跡は博多湾に突き出した丘陵上に位置して、東の福岡平野、西の早良平野の境界をなしている。立地条件のよさから各時代の生活が営まれ、遺跡として各時代のものが重複している。以下、これまでの調査で検出された遺構や出土遺物から探ってみよう。

縄文時代、土塁の調査で黒曜石製の石鏃が出土している。かつて、城内より押型文土器が採集され、隣接する大濠の中より中期・阿高式土器片も採集されている。将来、遺跡が発見される可能性がある。

弥生時代、第4次調査区から弥生式土器、柱状片刀石斧が出土している。過去の採集品の中にも多量の弥生式土器が存在する。

古墳時代、二時期の遺物がみられる。第3～6次調査区から鏡、銅鏡、ガラス玉が出土しており、鏡に付着する布、赤色顔料から、筑紫館あるいは鴻臚館の造成によって古墳が破壊された可能性が強い。期間は四世紀末～五世紀初。また、造成された谷部の松地層の下の黒色土層から六世紀中頃から後半にかけての遺物が出土しているので群集墳の存在が予想できる。なお、天守台には箱式石棺一基が現存しているので、城内にかなりの古墳が築造されていた可能性が強い。

筑紫館・鴻臚館の時代、後節でのべる。

中世、鴻臚館が廃絶した以後、福岡城が築城されるまでの間は全くの空白期であったが、第4～6次調査で若干の資料を得ることができた。第4・6次調査区で地下横穴各一基。また五輪塔風輪、遺物若干が出土していて中世の手がかりをつかんだ。かつて貞和六年銘の板碑が出土している。元来この地にあったとみて良いとみられる。

江戸時代、福岡城の築城以後、明治時代まで城として機能している。

福岡城の地域は断片的ではあるが、縄文時代から現代まで連続と人間の営みを認めることができる。

2. 筑紫館・鴻臚館遺構の時期区分

筑紫館・鴻臚館が文献資料に登場するのは持統二年（688年）の『日本書紀』の「新羅国使

金霜林等を筑塔館に棲す。」を初出とし、寛治五年（1091年）「熾盛光佛頂大威德銷災大吉祥陀羅尼經」釋書きに「太宰府渴臘館に於て、宋商季居簡の模本を以て、熾盛光佛頂大威德銷災大吉祥陀羅尼經を比較す。」という記事をもって終る。実に404年間にわたっている。その間、当然のこととして、建物の改築、改修がおこなわれたとみることができるよう。第3～6次調査で検出した建物遺構にも各時期のものが含まれている。それらを整理すると以下のようになる。

I期 据立柱の段階、柱穴の掘り方、切り合い関係から2小期に分離できる。

a期 布掘りの据立柱遺構 SB-15, SB-150が該当する。

b期 方形掘り方の柱穴をもつ、布掘り据立柱遺構を切っているので、布掘り遺構より明らかに後である。SB-16が該当する。

II期 瓦葺き礎石建物の段階。埋めこまれた礎石の存在や排水溝が二段になっていること、瓦の種類から少なくとも2期以上に分かれるとと思われるが遺構としては確認していない。

SB-31, SB-32, SB-50、推定南門跡の基壇が該当する。これらの建物はいずれも9世紀代に比定できる。

III期 II期以降の時期の建物遺構としては検出していないが、第3～6次調査で検出した土坑の大部分がこの時期の遺構である。食料残渣を捨てたゴミ穴が多いことを考慮すれば、建物は他の地域に移築された可能性が強い。

検出遺構の年代は、ほぼ文献と一致しているが、調査面積がせまいことを考えれば、今後、さらに小別が可能になるとを考えられる。建物配置で最もはっきりするのはII期段階でFig.83に示したように、全容を知るにはほど遠い。また、この地盤が渴臘館の中心域とは考えられず、むしろ出土上遺物等から客館の一部ではないかと思われる。

3. 出土遺物について

第3次～第6次調査の出土遺物について、若干のまとめをしておきたい。出土遺物の中で最も量が多いのが建物に葺かれた瓦類であるが、瓦類については次節でふれるので、ここでは瓦類以外についてみてみよう。

出土遺物の中で目立つのが、外国産の陶磁器である。遺物は現在整理中であり正確な数字は示せないが、国産の土器類との比較では出土量の6～7割が外国産の陶磁器で占められている。出土量も日本で出土した古代の外国産陶磁器の量をはるかに凌駕している。

外国産陶磁器には中国産陶磁器、新羅陶器、イスラム陶器と各国のものが含まれているが、量的には中国産が最も多い。

2. 筑茶館・御膳館造構の時期区分

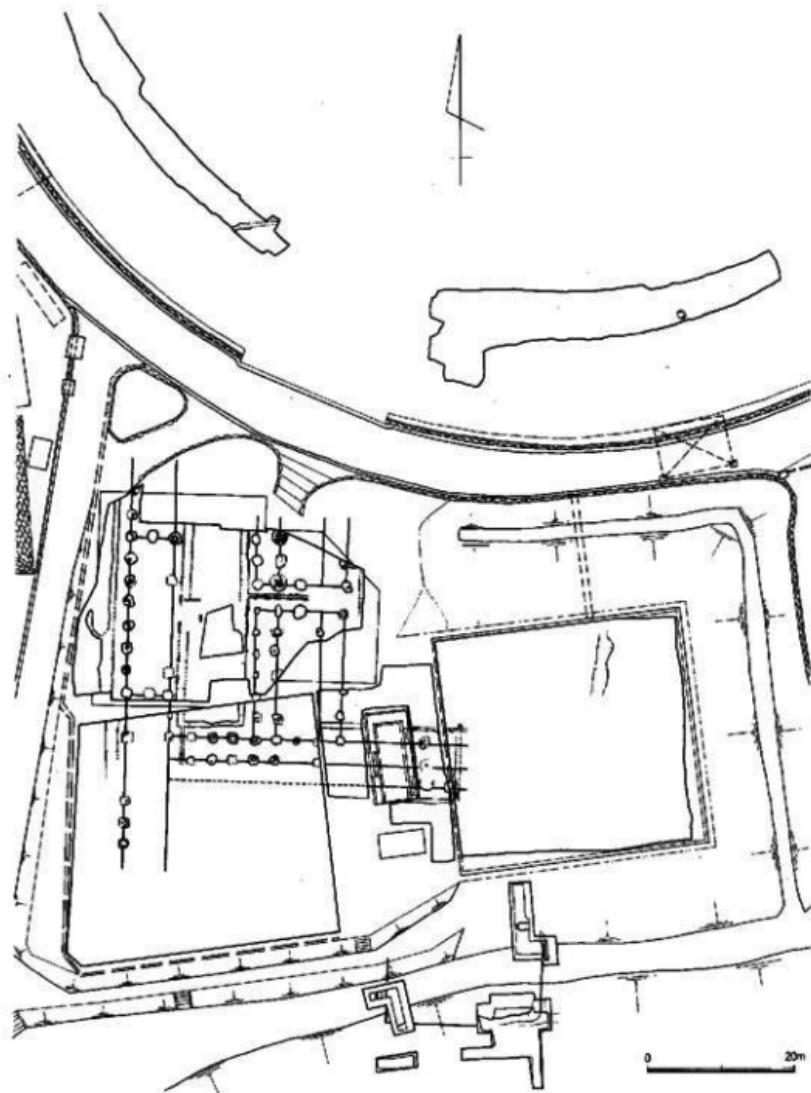


Fig.84 碑石建物 (SB-31, 32, 50) 推定南門配置図

中国産陶磁器は8世紀～11世紀にかけてのものがあり、9世紀後半以降、量的に増加する。これは、承和年間を境にして、鴻臚館の機能が、貿易を主体としたものに変化するのに対応するかに見えるが、発掘が主に9世紀以降の遺構に限られており、下層遺構が未調査であることや、時期によって建物配置が異なり陶磁器類を多量に含むゴミ捨て用の土坑が時期によって場所が異なることなどを考慮すると、一概に対応関係とはいえない。

中国産陶磁器の產地をみていくと、浙江省越州窯系の物が最も多く、次いで湖南省長沙窯や河北省邢窯や、定窯の白磁器がある。また、極少量であるが唐三彩がある。陶枕、碗などがあるが、そのうちの陶枕は、肇県窯の製品と考えられる。その他、緑釉や產地不明の製品もかなりの量含まれている。

越州窯系青磁器は9世紀から11世紀までのものが含まれる。器種は、碗（大、中、小の各種）鉢、杯、皿、双耳壺、四耳壺、水注、合子、塔形合子、香炉、蓋の各種がある。越州窯系青磁器には、優品と粗製品の二種が含まれている。量的には粗製品が多い。特に粗製品の中には、SK-38、SK-56下層、SK-61、SK-80、SK-81にみられるように、完形品に近いものが、50個体～200個体分一括廃棄されている。これらの青磁器類はいずれも二次的に火を受けていて変色している。また、重ね焼きの目土がそのまま残ったり、重ねたまま癒着したりしている。いずれにも使用痕は認められない未使用品である。倉庫等に収納保管されていたものが、火事等の不慮の事故によって破損し一括投棄されたとみられる。これに対して優品は量的に少ないが、いずれにも使用痕が認められ、鴻臚館で宴席に使用されたものと考えられる。

長沙窯の製品には水注、碗の二種がある。量的には少なく新しい段階にはみられない。褐綠彩の破片が存在する。9世紀段階には一定の量を占めている。

邢窯、定窯と思われる白磁器は器種として碗、皿がある。量的にはさほど多くないが一定の比率で存在する。11世紀代に白磁器が増加することは注意される。

新羅陶器は量的に少ないが、7世紀後半から各時期のものが存在する。器種には蓋、壺、樽形横瓶等がある。貿易品としてではなく、日常雑器として鴻臚館に持ち込まれた可能性が強い。日本製品、中国製品との共伴関係が明らかなので、新羅陶器の幅年に有効な資料である。下層の調査が進めば、さらに量はふえるとみられる。

イスラム陶器は数十片がある。破片が小さくなり全形を知るものはないが、数個体分が含まれている。時期的にも幅がありそうで、今後の検討が必要である。

次に注目されるのが、木簡およびその出上遺構である。出土遺構は考古学的所見や脂肪酸分析から便所であると推定される。木簡は文字が残るものは少ないが、肥後、肥前、豊前、筑前と九州の各國のものが含まれている。木簡の時期は715年を前後するものであり、この地が筑紫館である有力な資料を得たことになる。なお、九州以外で諸国木簡が含まれていること

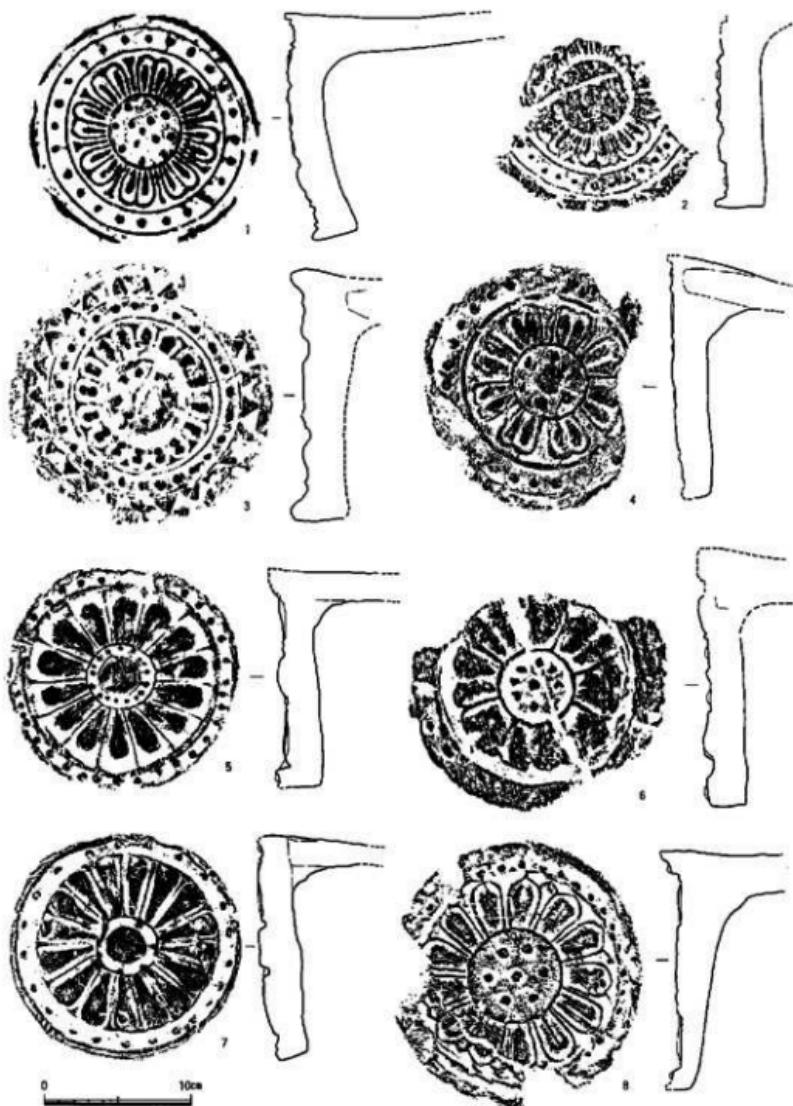


Fig.85 軒瓦集成(1)

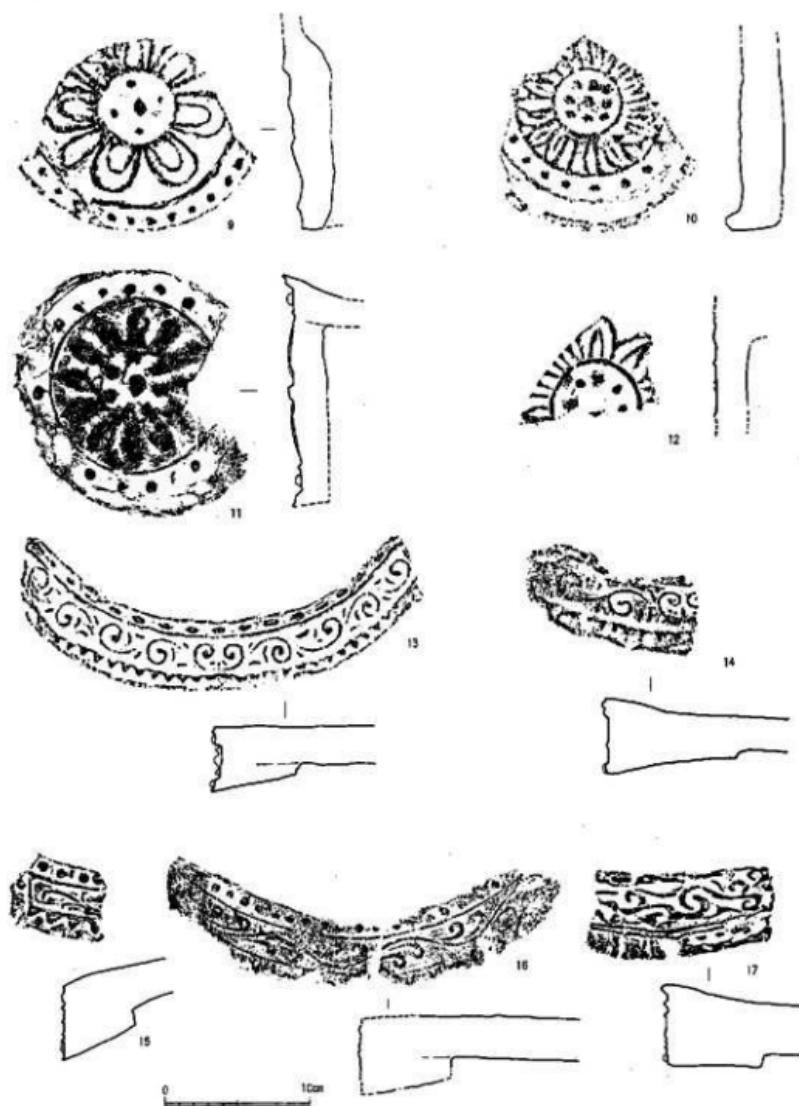


Fig.86 軒瓦集成(2)

3. 出土遺物について

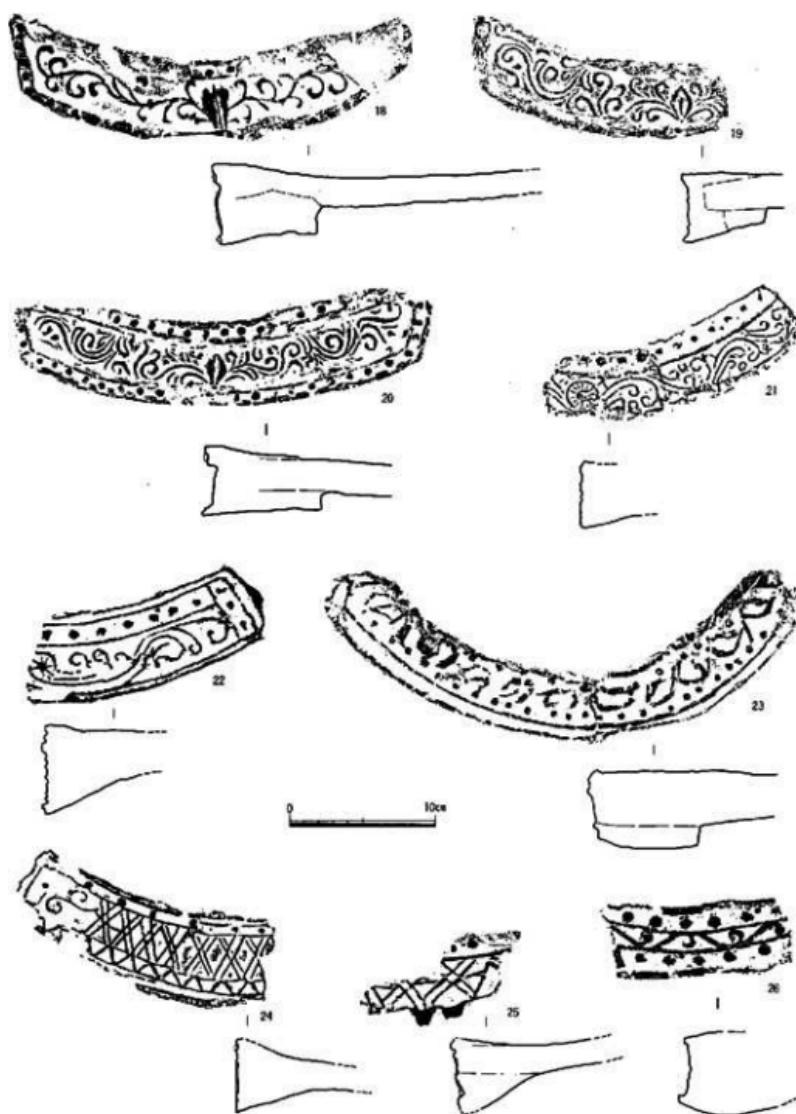


Fig.87 軒瓦集成(3)

は注目される。

この他の遺物として梵鐘の鋳型、製鉄関連遺物、鉄器、貨幣など興味あるものがあるが詳細は本報告書にゆずりたい。

4. 瓦類について

瓦類は各時期のものが含まれ、量的に非常に多い。平瓦、丸瓦、軒平瓦、軒丸瓦、面戸瓦、契斗丸、鬼瓦がある。

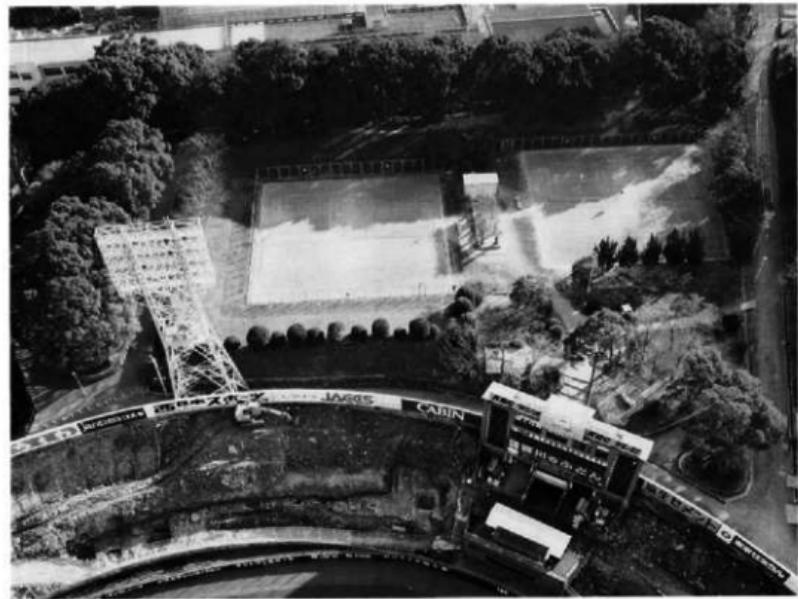
軒先瓦の種類はFig139～141に示した。軒先瓦は今までの表採資料から、軒丸瓦は8型式8種類、軒平瓦は8型式11種類が判明していたが、今回の調査でさらに軒丸瓦1種類、軒平瓦3型式3種類を加え、軒丸瓦が12型式15種類、軒平瓦が11型式14種類が存在する。時期的には7世紀末から11世紀代までのものが確認され、ほぼ、文献の年代と一致している。量的には創建期に使用されたと思われる鴻臚館式が最も多く、出土量の2/3以上を占める。鴻臚館式瓦は大宰府政府にも使用されているが、そもそも、どちらのために製作されたものであるかは、今後の詳細な検討が必要であろう。瓦の構成比率等は算出していないが、今後、正式報告において欠を補ぎないたいと思う。

図 版

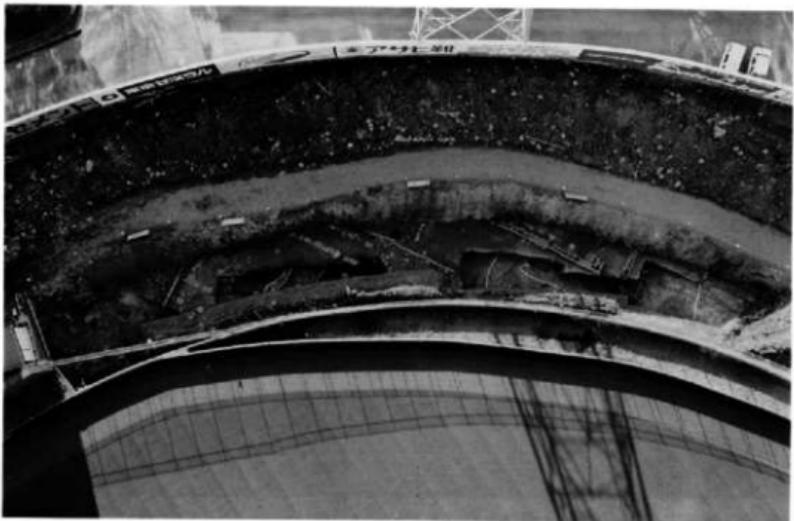
PLATES



(1) 第3次調査全景（平和台野球場外野スタンド）



(2) 平和台野球場とテニスコート（第4～6次調査区）



(1) 第3次調査・ライト側スタンド調査区全景



(2) 第3次調査・ LEFT側スタンド調査区全景



(1) 第3次調査・SB-11 検出状況（西から）



(2) 第3次調査・SB-11 検出状況（南から）



(1) 第3次調査・SB-11 瓦堆積除去状況



(2) 第3次調査・SD-08 瓦堆積状況



(1) 第3次調査・SD-06瓦堆積状況



(2) 第3次調査・SD-06および江戸時代暗渠



(1) 第3次調査・SB-15.16 検出状況



(2) 第3次調査・SB-15 布掘りの状況



(1) 第3次調査・SB-15.16断面



(2) 第3次調査・地下事業の状態



(1) 第3次調査・SK-01完掘状況



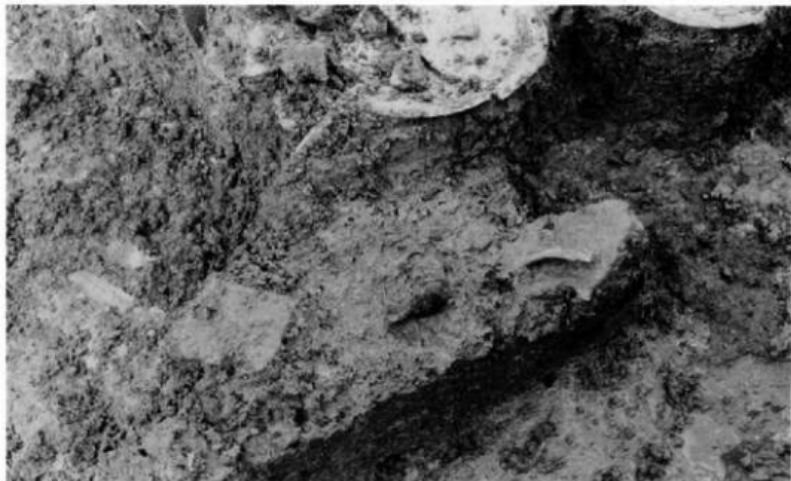
(2) 第3次調査・SK-01土層断面



(1) 第3次調査・SK-02遺物出土状況（南から）



(2) 第3次調査・SK-02遺物出土状況（西から）



(1) 第3次調査・SK-02ガラス出土状況



(2) 第3次調査・SK-03遺物出土状況



(1) 第3次調査・礎石検出状況(原位置を移動)



(2) 第3次調査・SD-06石硯出土状況



(1) 第4次調査・調査区全景（北から）



(2) 第4次調査・調査区全景（西から）



(1) 第4次調査・推定南門前面トレンチ全景（南から）



(2) 第4次調査・推定南門前面トレンチ全景（西から）



(1) 第4次調査・推定南門後面トレンチ全景（北から）



(2) 第4次調査・推定南門後面トレンチ全景（東から）



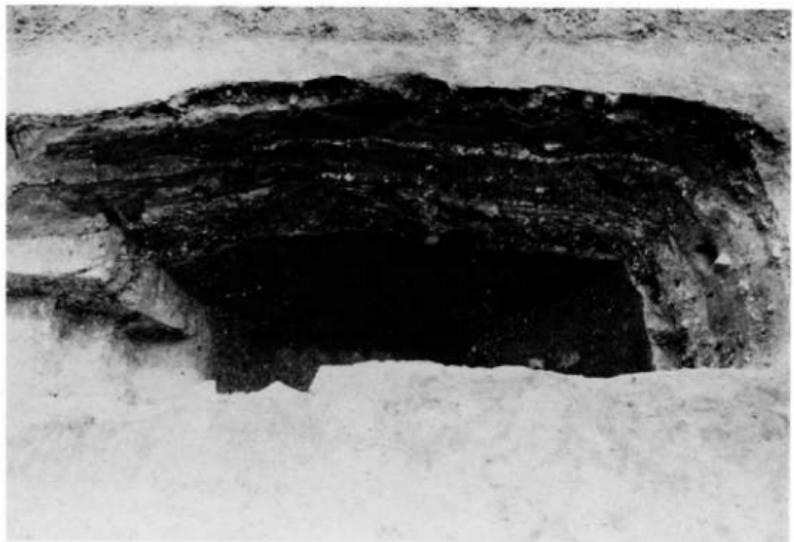
(1) 第4次調査・第Ⅱ調査区全景（北から）



(2) 第6次調査・第24連隊弾薬庫検出状況（西から）



(1) 第4次調査・第Ⅲ調査区全景（西から）



(2) 第4次調査・第Ⅲ調査区土層断面



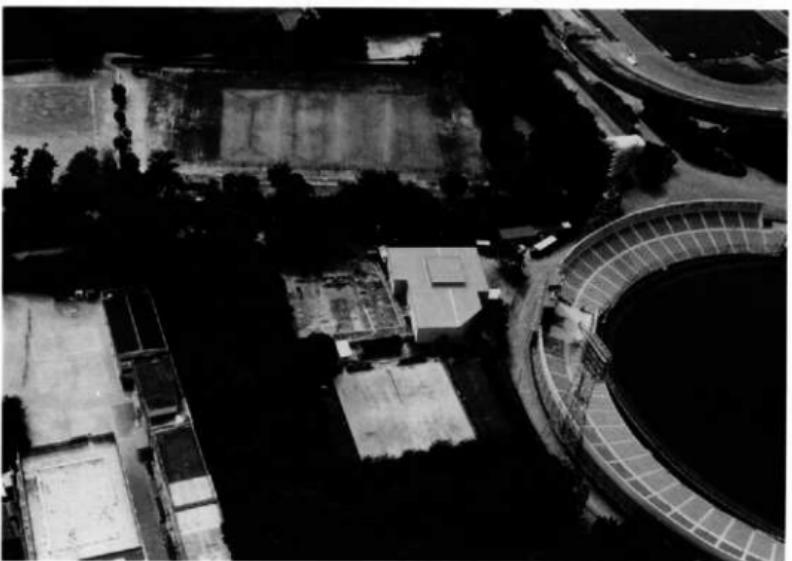
(1) 第4次調査・SK-38遺物出土状況



(2) 第5次調査・SK-81遺物出土状況



(1) 第5次調査・調査区全景（南から）



(2) 第5次調査・調査区全景（東から）



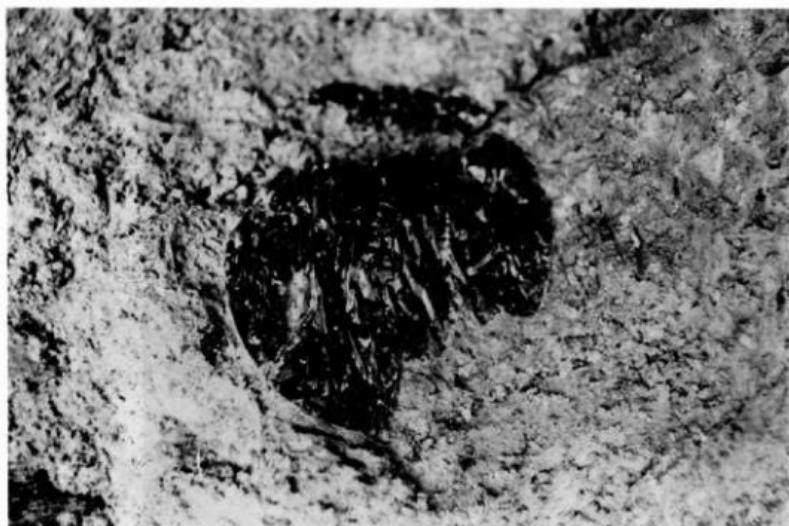
(1) 第5次調査・調査区全景（南から）



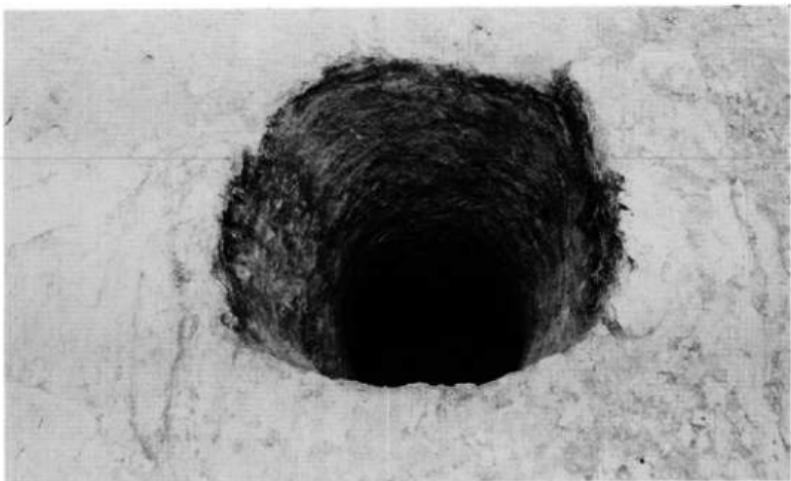
(2) 第5次調査・調査区全景



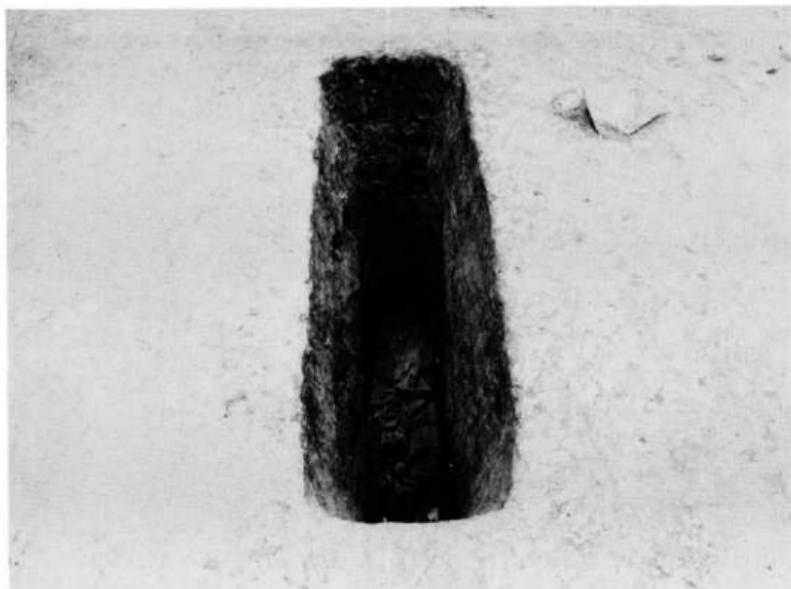
(1) 第6次調査・SK-69



(2) 第6次調査・SK-69漆器出土状況



(1) 第6次調査・SK-70



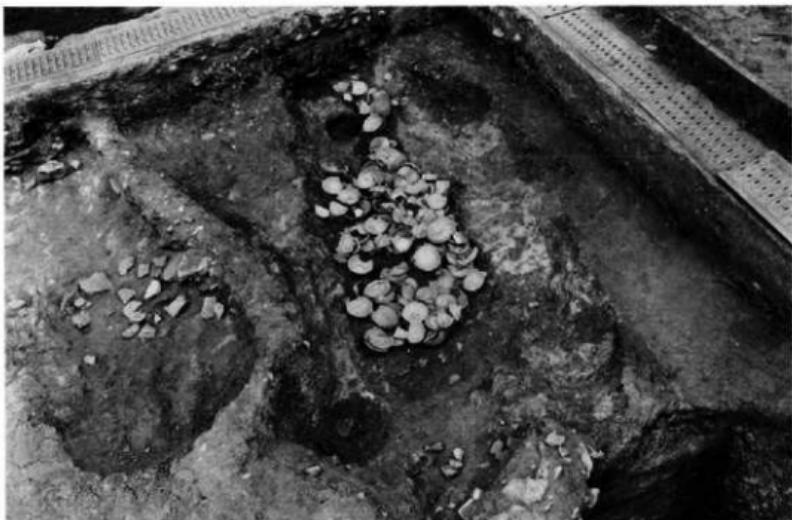
(2) 第6次調査・SK-57



(1) 第5次調査・SK-56全景と土層断面



(2) 第5次調査・SK-61遺物出土状況



(1) 第6次調査・SK-80遺物出土状況



(2) 第6次調査・SK-82遺物出土状況と土層断面



(1) 第6次調査・SK-82遺物出土状況（南から）



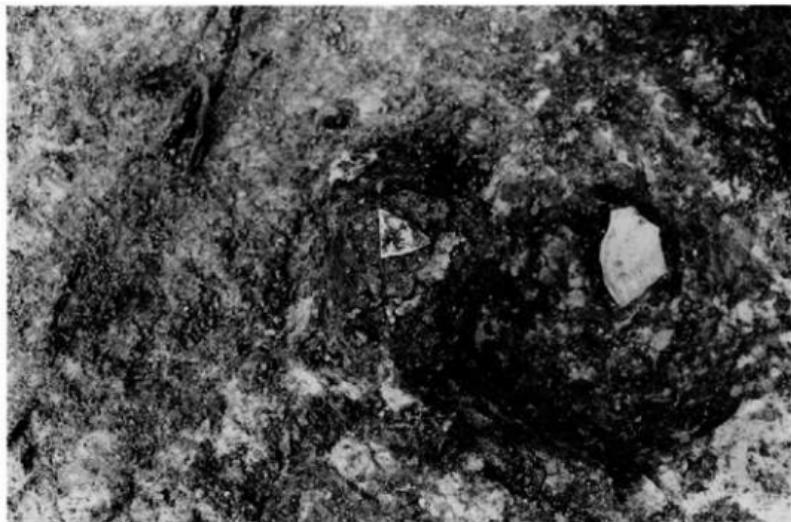
(2) 第6次調査・SK-82遺物出土状況（東から）



第6次調査・SB-50 磚石列と瓦溜



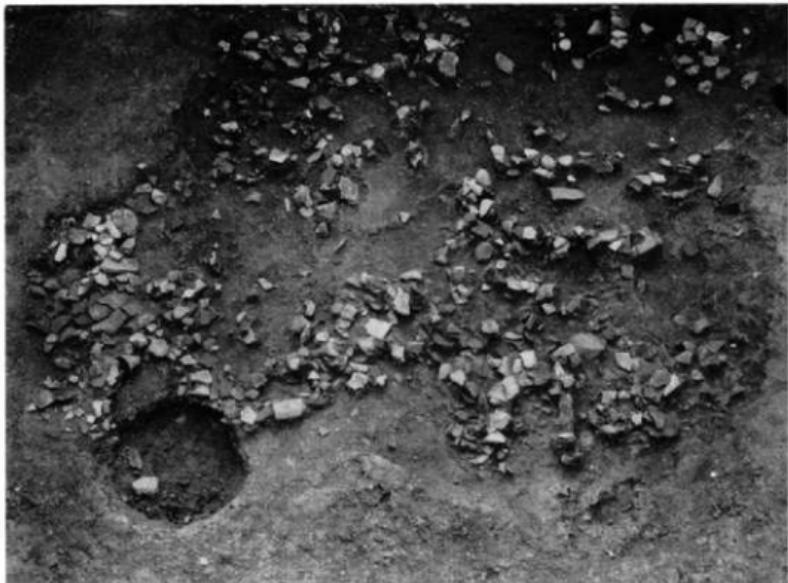
第6次調査・SK-105 遺物出土状況



(1) 第6次調査・唐三彩陶枕出土状況



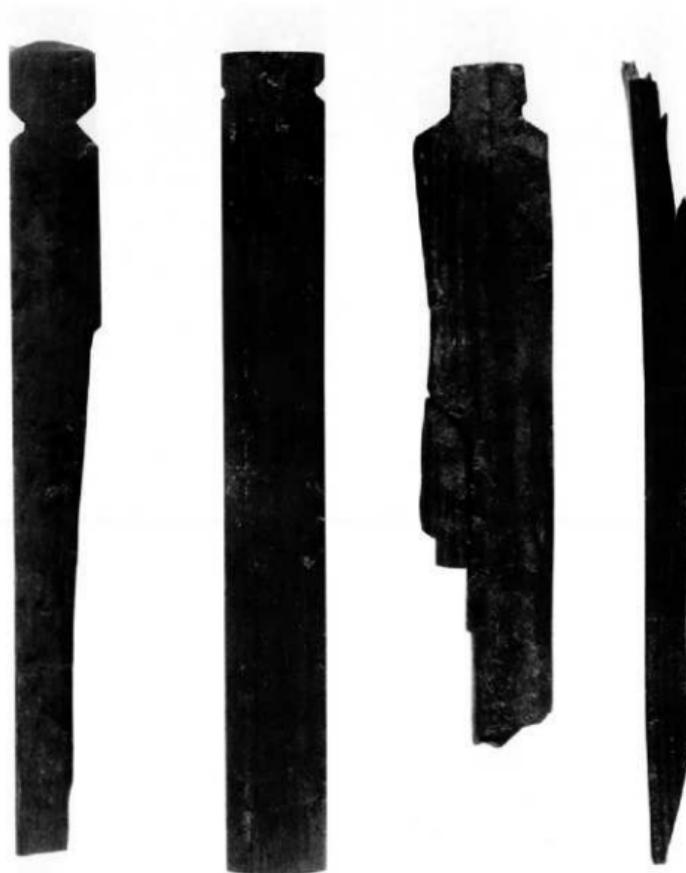
(2) 第6次調査・SK-155 イスラム陶器出土状況



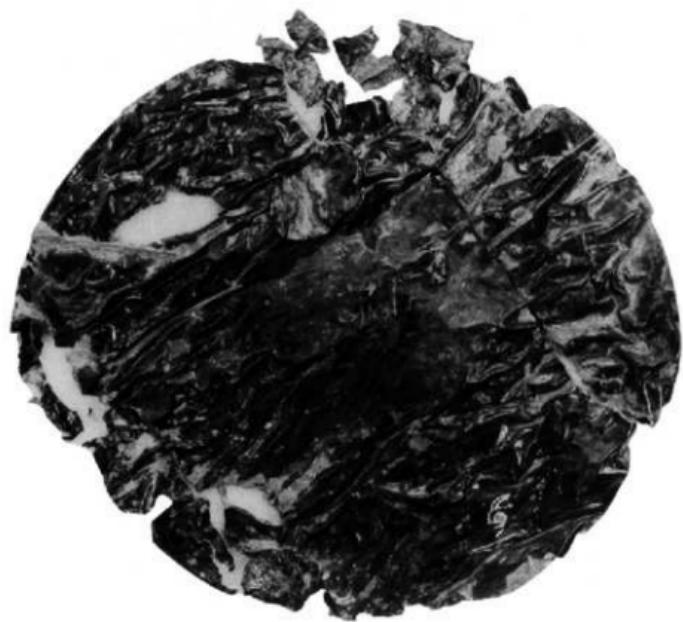
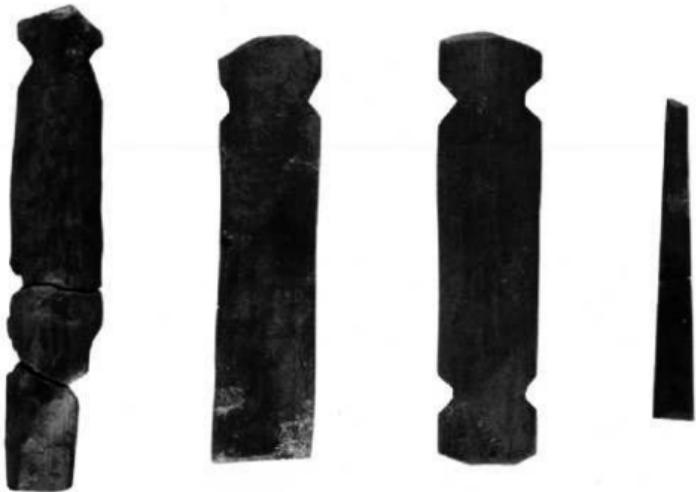
(1) 第6次調査・SK-159・160 遺物出土状況



(2) 第6次調査・SK-160 イスラム陶器出土状況



(1) SK-57 出土木簡



(1) SK-57 出土木簡・SK-69 出土漆容器



(1) SK-57 出土須恵器



(2) SK-57 出土須恵器の墨書

福岡市
鴻臚館跡 I
福岡市埋蔵文化財調査報告書
(第270集)

編集・発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8-1
電話(福岡)711-4667

印 刷 久野印刷株式会社
福岡市中央区天神5丁目5-8
電話(092)741-0637

